第二千百八十五 明治十年十一月廿二日司法省丁第八拾貳號（大審院諸裁判所）へ達

民事裁判言渡ノ儀ニ付甲號ノ通高知裁判所ヨリ伺出ニ因リ乙號ノ通リ法制局ヘ質問回答ノ上丙號ヲ以テ指令ニ及ヒ候條此段爲心得相達候事

甲號民事裁判言渡ノ儀ニ付伺（十年十月）

高知裁判所

民事訴訟審理ノ末口書調印等整頓シタル後ハ裁判言渡ノ日ヲ指示シタル呼出狀ヲ發シ原被告又ハ引合人等出頭ノ上言渡ヲナスヘキ成規ニ候得共若シ原被告又ハ引合人等ノ内無屆不參又ハ病氣其他ノ事故申立出頭不致者儘有之其レカ爲メ相手方ノ損耗ヲ釀シ隨テ迷惑不少ノミナラス事務ノ滯滯ヲモ生候樣可立至候ニ付自今右樣ノ者有之闕席イタシ候得ハ闕席ノ裁判申渡候上闕席ノ者ヘハ言渡書遞送致シ遣シ候樣致度此段相伺候也

乙號

法制局ヘ質問

高知裁判所ヨリ別紙ノ通伺出候處既ニ口書調印等モ相濟候上ナレハ寧ロ利アルモ害ナカルヘケレハ左之通指令（略之）ニ可及ト存候得共未タ例規無之ニ付爲念一應御質問ニ及候間至急何分ノ御答被下度候也

明治十年十月十八日

丙號 指令

伺之通

但無屆不參等ノ厳ハ規則ニ依リ相當ノ處分ニ及フヘキ事

明治十年十一月十五日

第二千百八十六 明治十一年二月廿五日司法省丁第五號（大審院諸裁判所）へ達

欠席裁判言渡ノ義ニ付高知裁判所ヱ左ノ通更ニ相達候條此段爲心得相達候事

高知裁判所ヱ達（第六百五拾五號 十一年二月廿二日）

其裁判所ヨリ明治十年十一月附ノ伺欠席裁判言渡ノ義ニ付同年十一月十五日附ヲ以テ指令ニ及ヒ置候處右言渡ノ上ハ其欠席人ヨリ日附ノ惜カナル受領証ヲ取置クヘシ此旨更ニ相達候事

○第五款 質地ヨリ起ル訴訟處分方

第二千百八十七 明治六年二月十四日第五拾壹號布告

壬申二月十五日第五拾號布告ノ通地所賣買被差許候上ハ質地ハ貸借上ノ事柄ニ付翌十六日以後ノ證書ニテ質地ヨリ起ル訴訟ハ糶賣ノ手續ヲ以濟方可申付事

但壬申二月十五日以前取引ノ質地ニテ年季明不受戻時ハ從前ノ通流地タルヘキ事

第二千百八十八 明治六年三月廿七日司法省第四拾六號布達

從前質地ヨリ起ル訴訟ハ證文中ニ年季明不受戻候ハヽ流地ニ可致旨之文言有之分ハ期限ヨリ二ケ月右文言無之分ハ十年ノ内訴出候ハヽ受戻シ申付來候處當八月ヨリ以後ハ流地文言有無ニ不拘年季明不受戻シテ訴訟ヲ爲ス時ハ明治六年第五拾壹號御布告ニ基キ二ケ月亦ハ

（第五拾號布告ハ（二千百十八）ニ掲出ス）

十ケ年ノ猶豫ヲ與ヘ直ニ糴賣ノ手續ヲ以テ裁判可致事

但原告被告雙方熟議ノ濟方ハ此限ニアラサル事

○第六款　控訴上告附控訴書類遞送

第二千百八十九　明治十年二月十九日第拾九號布告

明治八年五月第九拾壹號布告大審院諸裁判所職制章程同年同月第九拾三號布告控訴上告手續別冊ノ通リ改正候條此旨布告候事（大審院諸裁判所職制章程ハ符號（三千二）ニ分掲ス）

但巡回裁判規則判事職制通則ハ刪除候事

控訴上告手續

第一章

控訴ノ事

第一條　凡ソ始審裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ控訴裁判所ニ訴ヘ覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云フ（十四年第二號布達ニ依リ地方裁判所ヲ始審裁判所ト上等裁判所ヲ控訴裁判所トス以下皆同シ）

第二條　控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハス

第三條　控訴ハ一タヒスルヿヲ得再ビスルヿヲ得ス

第四條　始審裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタル時原告被告ノ雙方又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナル時ハ裁判言渡シヨリ第七日マテニ（裁判言渡ノ翌日ヨリ數フ）裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルヿヲ得ヘシ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルヿヲ要スルノ場合

ニ於テハ七日内ト雖ヒ控訴スルヿヲ得

第五條　始審裁判所ノ裁判言渡ヨリ二ケ月（三十日ヲ以ヲ一月トス）ヲ過ルトキハ控訴スルヿヲ許サス但シ始審裁判所ヨリ控訴裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キトキハ期限二ケ月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ增スヘシ（十五年第廿一號布告ヲ以テ期限三ケ月）ト改ム

第六條　控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル始審裁判所ニ屆ケ出ツヘシ但シ添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條　前條ノ屆ヲ受取リタル始審裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ控訴裁判所ノ請求アル時ハ始審裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條　控訴裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章

上告總則ノ事

第九條　各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云

第十條　上告スルヿヲ得ルノ事件ハ

第一　裁判所管理ノ權限ヲ越ユ

第二　聽斷ノ定規ニ乖ク

第三　裁判法律ニ違フ

第十一條　大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニアラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ理セス

刑事ノ上告ハ治罪法ニ依リ消滅ス

第十二條　陸海軍ノ裁判權限ヲ越ユル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルヿヲ得

第十三條　凡ソ上告シタル者已ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フルヿヲ得ス

第三章　民事上告ノ事

第十四條　民事ノ上告スルヿヲ得ル者ハ已ニ控訴裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル者ニ限ル

第十五條　上告ヲ爲ント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀ヲ大審院ニ捧クヘシ而シテ同時被告人ニ通知スルヿヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ增ス此定期ヲ過レハ上告スルヿヲ許サス

上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

第一　原告人ノ住所身分氏名

第二　代言人アレハ其住所身分氏名

第三　被告人ノ住所身分氏名

第四　證人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名

第五　始審裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

第六　控訴裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ

上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘシ

第一　始審裁判所ニ於テノ訴狀並ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第二　控訴裁判所ニ於テノ訴狀並答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第三　上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ編シテ一冊ト爲シ又ハ藁數多ニ付編シテ幾冊ト爲シタル者

右ノ訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟庭ニ取下ケ見坐ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ取ルヿヲ得ヘシ

若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サヽルニ因リ上告人其寫ヲ出シ能ハサル時ハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第十六條　上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ大審院ニ預クヘシ若シ其金高ヲ預ケサルキハ上告ヲ爲スヿヲ得ス

第一　若シ上告ヲ取上ケサルキハ其預リ金ヲ沒入ス

第二　若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三　若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ沒入シ又訴訟入費規則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム（被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云）

第十七條　上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ屆出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日内ニ大審院ニ遞送スヘシ

第十八條　上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院已ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レハ即日原

裁判所ニ通報シテ大審院ヨリ郵信ヲ發ス執行ヲ止メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ

但內國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ內國人ニ對スル上告ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ

第十九條　上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代言人ヲシテ之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

第二十條　大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スル時ハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第廿一條　判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタル時ハ其後二日內ニ被告人呼出狀ヲ仕出スヘシ此ノ呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ

第廿二條　被告人ハ呼出シ狀ヲ受取タルヨリ三十日內ニ答辨書ヲ作リ自身又ハ代言人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キトキハ八里毎ニ一日ヲ增スヘシ

第廿三條　大審院ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取リシトキハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遲緩ナク一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニ原被對審ノ呼出狀ヲ原被雙方ニ送達スヘシ

第廿四條　原被對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被交互ノ論辨ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルトキハ何々ノ理由ヲ以テ裁判所ヲ破壞スルニ付更ニ某裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ

第廿五條　若シ原告人ノ上告理ナシト決スルトキハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ

第四章

刑事上告ノ事（治罪法ニ依リ消滅ニ歸スルヲ以テ省ク）

第二千百九十一　明治十五年一月廿三日司法省丁第拾號（控訴裁判所始審裁判所ヘ達）

客年第八拾三號布告ヲ以テ治安裁判所及始審裁判所ノ權限相定メラレ候ニ付テハ治安裁判所ノ裁判ニ對スル控訴ハ始審裁判所ニ於テ受理スヘキハ勿論ニ候處右布告ヲ知得サル前ニ於テ管區裁判所若クハ治安裁判所ノ裁判ニシテ始審裁判所ニ控訴スヘキモノニ對シ控訴裁判所ニ控訴スル者ハ控訴裁判所ニ於テ之ヲ受理シ管轄始審裁所所ニ引繼クヘキ儀ト心得ヘシ此旨爲念相達候事

附錄　明治十二年九月三十日司法省丁第貳拾四號（各上等裁判所ヘ達）

控訴書類遞送ノ義別紙ノ通大審院ヨリ申出之趣モ有之ニ付自今右書類ハ通運ニテ遞送可致此段相達候事

別紙

各上等裁判所ヨリ上告屆出候節控訴書類往返遞送費取立方之儀去明治十二年七月十一日付ヲ以上申仕八月五日御聞屆ノ御達ニ相成リ其後各上等裁判所ニ於テモ右御聞屆ノ

趣ニ相運ヒ候處右控訴書類遞送方ニ付郵便送致ト通運送致ト兩便ニ於テハ通運賃ハ郵便ヨリ小數ニ付通運ノ方ニ一定致シ候ヘハ人民ノ幸不少且又本院ニ於テモ右ニ付テノ不都合ハ無之事ト存候間控訴書類往返遞送ノミニ限リ通運ヲ以差出方相成候様重テ御達相成度此段上申仕候也

明治十二年九月二十日

司法卿大木喬任殿

大審院長

判事玉乃世履

（朱書指令）

上申ノ趣聞届別紙ノ通各上等裁判所ヘ相達候事

○明治十三年七月二十日司法省丁第拾六號（各上等裁判所函館裁判所）ヘ達

控訴書類遞送ノ儀司法省明治十二年九月丁第廿四號ヲ以テ各上等裁判所ヱ達置候處右ハ自今郵便ニ附シテ便ナルモノハ郵便ニ附シ通運ニ附シ便ナルモノハ通運ニ附シ且場所ニ因リ其他ノ方法ヲ以テ送致スルヲ得ヘキ向（東京上等裁判所ヨリ大審院ニ送致スルハ小便等ニ附スルノ類）ハ適宜可取計此旨更ニ相達候事

○第四章　裁判執行

○第壹欵　裁判執行處分

第二千百九十一　明治十一年十月十六日司法省丁第三拾六號（各上等裁判所ヘ達）

別紙終決裁判執行云々大審院ヨリ伺出候ニ付朱書之通指令ニ及候條此旨心得ノ爲メ相達候事

別紙

茲ニ某ノ地方裁判所ニ於テ終決裁判ノ執行ヲ爲サント其場ニ臨ミ判文ニ照ラシ原告被告ニ云々ノ事ヲ命シタリ然ルニ一方ノ甲者其ノ執行ノ命令ハ判文ノ意ニ違ヘリトシ判文ヲ提供シテ判文通ノ執行ヲ求メシニ執行裁判官ハ之レニ説明ヲ與ヘス而シテ該地方警察官ヲシテ之レカ執行ヲナサシメタリ依テ甲者ハ其執行ノ判文ニ違フ旨ヲ訴狀ニ作リ以テ其裁判ヲ爲セシ原裁判所即チ某上等裁判所ヘ差出シ原判文ノ説明ト原判文ニ違ヒシ執行ノ救正トヲ願ヒシニ某上等裁判所ハ其説明ヲ與ヘスメ判文ニ違ヒシ執行ニ異論アラハ執行スヘキノ裁判所即チ初審廳ヘ申立同廳ノ指揮ヲ受ヘキ儀ト可相心得ト申渡シ右ノ訴狀却下シタリ爰ニ於テ甲者ハ右某上等裁判所ノ申渡ヲ不法トシ上告メ曰ク初審廳ノ指揮ハ業已ニ之ヲ得タリ然ルニ其指揮某上等裁判所ノ判文ニ違ヒシ指揮ナルニヨリ止ムヲ得ス其裁判ヲ與ヘラレシ某上等裁判所ニ説明及ヒ救正ヲ乞ヒタリシニ某上等裁判所ノ申渡ノ如クシテ猶又初審廳ノ指揮ヲ要セハ是則チ一廳ニシテ訴訟ヲ覆審スルカ如シ夫レ裁判ハ之ヲ授ケシ裁判所ノ思考ヨリ成立セシ論説ナリ故ニ其論説ノ兩義ニ解釋ス可キ疑議ノ生スル條件アラハ之ヲ兩義中ノ一義ニ決スルヿハ原ト裁判セシ裁判所ノ説明ヲ得サレハ果メ原裁判所ノ思考ニ適スルヤ否ヤハ傍人之ヲ説明スル能ハサル也故ニ其裁判ヲ爲シタル所ヲ以テ本訴ノ管理者ト看認メ其執行ニ係ハル疑議ハ裁判シタル裁判所カ當ニ管理メ説明スヘキ筋ナリト思考ス然ルヲ原裁

判所ハ之レカ説明ヲ與ヘスシテ一概ニ訴狀及ヒ願書ヲ卻ケ强テサキニ非違ノ執行ヲ命シタル地方裁判所ノ再ヒ指揮ヲ受クヘシトノ裁判ハ是其管理ノ本分ヲ行ハサルモノニ付不當ノ申渡シト思考シ右ノ申渡ノ破毀ヲ求ムト因テ本院ニ於テ被上告者ヲ召喚シ對審セシムルニ果メ上告ノ如ク發キニ初審廳ニ於テ指揮ヲナシ已ニ執行ヲ命セシハ原被ノ口供符合セリ如此場合ニ於テハ某上等裁判所ハ其與ヘシ判文ノ説明ヲ自カラナスヘキニ却テ再度初審ノ指揮ヲ受シムヘキ旨裁判セシハ不條理ニ付原裁判所カ却下ノ裁判ヲ破毀シ原裁判所ニ於テ發ノ終決裁判ノ説明ヲ與フヘキモノト判決ヲ下シ不相當ノ儀ト考慮致シ候然ルニ上告ニ付裁判ヲ破毀セシ上ハ他ノ裁判所ニ移スノ外原裁判所ニ於テ再ヒ審理セシムルヿハ異例ナレトモ本件ハ他ノ裁判所ニ於テハ説明ヲ與ヘ難キ事件ニ付定例ニハ無之候得共原裁判所ヘ附シ可然哉此段相伺候也

明治十一年十月二日　　司法卿大木喬任殿

朱書

伺之通

明治十一年十月十六日　　大審院長　判事玉乃世履

○第貳欵　訴訟入費

書類認メ料離譯料ニ付テハ十七年司甲第壹號告示（二千百六十三）參看

○第壹節　訴訟入費規則

第二千百九十二　明治九年四月廿二日司法省甲第五號布達

訴訟入費償却規則左之通改正候條此旨布達候事

第一條

訴狀並其外書類認料　一枚十六行十五字詰ニ付十錢但シ一枚以下モ同價

右定限

第一　原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二　被告人ノ答書ノ正本副本

第三　訴狀又ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫

第四　審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫

第五　訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被雙方往復ノ文書　一日ニ付五十錢

第二條（十二年同省甲第二號布達ニ依リ引合人ノ下ノ三字ヲ削ル第三條四條皆同シ）

證人並ニ引合人手當

但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ二十五錢ヲ增ス

右定限

裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條（九年同省甲第六號ヲ以テ追テ達スル迄施行ニ不及旨ヲ布達ス）

證人並引合人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當　一日ニ付五十錢

第四條

證人並引合人旅費

但シ八里ヲ越レハ毎滿一里ニ付拾錢　滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

右定限

第一　兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ經ルト雖モ乙路ヲ以テ計算スヘシ

第二　本條ハ日本國管内ヲ通行スルモノヽ爲メ設ク

第五條

原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當　一日ニ付五十錢

但シ八里外ヨリ罷出止宿スル者ハ二十五錢ヲ增ス

右定限

第二條ニ同シ

第六條 上同

原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當　一日ニ付五十錢

第七條

原告人又ハ被告人直者旅費　滿八里ニ付十錢歸路モ同斷

但シ八里ヲ越レハ毎滿一里ニ付十錢

右定限

第四條ニ同シ

第八條

通辯雇料　一日ニ付三圓

右定限

第二條ニ同シ往返旅費ヲモ定額ノ通計算ス可シ

第九條

飜譯料　一枚ニ付十六行十五字詰二圓但シ一枚以下モ同價

右定限

第一條ニ同シ

第十條

測量繪圖認料

右定限

第一　長三百間ニテ盡ル時ハ　西ノ内一枚ニ付十錢

百間ニ付一尺ノ割

第二　長六百間迄　同　十二錢

百間ニ付五寸ノ割

第三　長千二百間迄　同　十四錢

百間ニ付三寸ノ割

第四　長六千間迄　同　十七錢
百間ニ付二寸ノ割
第五　長一萬二千間迄　同　二十錢
百間ニ付一寸ノ割
第六　長一萬二千間以上　同　廿四錢
百間ニ付五分ノ割
一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セス大凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致ス可シ
但西ノ内一枚ニ付十錢

第十一條

使賃

滿一里毎ニ十錢一里未滿ハ五錢

但シ歸路モ同斷

右定限

第一　裁判所ニテ示談中雙方承諾ノ上原告被告雙方又ハ一方ノ者ヨリ遣ハシタル使賃
第二　裁判所ニテ示談中原告又ハ被告一方ノモノ掛裁判役ノ檢印ヲ經タル使賃
第三　原告又ハ被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セサル時掛裁判役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ責ムル使賃
第四　原告被告雙方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ雙方又ハ一方ノ者ノ申立ニ因リ裁判所ヨリ臨時ニ遣シタル使賃

第十二條

郵便並ニ電信料

右定限

第十一條ニ同シ

第十三條

身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又町村役場ニ納ム可キ評價人監定人等ノ日雇賃金ノ諸入費及ヒ身代限諸雜費臨時計算ヲ以テ定ム

右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツヘシ

[第二千百九十三]　明治十一年一月七日司法省丁第壹號大審院諸裁判所へ達
明治九年四月甲第五號ヲ以テ訴訟入費償却規則及布達昔候處右ハ爾後各國公使ヘ談判ノ次第有之ニ付當分外國人民ヘハ施行難相成候條此旨可相心得候事
但各國之内已ニ該規則之通準行致シ來候分ハ此限ニアラス十一年丁第貳號省達ヲ以テ但書ヲ加フ

[第二千百九十四]　明治十二年三月十四日司法省丁第拾號諸裁判所へ達
裁判費訴訟費ノ義ニ付別紙ノ通大審院ヘ相達候條此旨爲心得相達候事

別紙

大審院ヘ達明治十二年三月十三日

裁判費訴訟費ノ義過般及答議候處右ハ取消シ別紙ノ通更ニ相達候事

（括弧内朱書）

別紙

定價

〔第一例〕

初告ニテ　原告（甲）勝　被告（乙）負　（乙）入費ヲ拂フ

控訴ニテ　被告（乙）勝　原告（甲）負　（甲）ハ初告控訴兩件ノ入費ヲ拂フ

（破棄セス）上告ニテ　被告（乙）勝　原告（甲）負　（甲）ハ總テノ入費ヲ拂フ

〔第二例〕

初告ニテ　（甲）勝或ハ負トモ　（乙）負或ハ勝トモ

控訴ニテ　（乙）勝　（甲）負　（甲）ハ初告控訴ノ入費ヲ拂フ

（破棄ス）上告ニテ　（甲）勝　（乙）負　（乙）ハ上告入費ヲ拂フ而メ甲ハ控訴マデノ乙ノ入費ヲ既ニ償ヒシナラハ取返スヘシ

〔第三例〕此例ハ大審院ニ於テ破棄シタル後第二ノ上等裁判所ニ移シタル場合ナリ

此時負者ハ初告ト第一控訴ト第二控訴ト都合三件ノ入費ヲ拂フヘシ上告入費ニ至テハ其ノ上告ノ負者之ヲ拂ヒ第二控訴ノ負者ハ之ヲ拂フヘキニ非ス

○第貳節　訴訟入費請求方

〔第二千百九十五〕　明治十一年十二月廿日司法省丁第四拾四號大審院諸裁判所へ達

訴訟入費請求ノ義ハ素ヨリ本人ノ自由ナリト雖モ之ヲ請求セント欲スルモノハ裁判言渡以前ニ請求候様可致此旨爲心得相達候事

〔第二千百九十六〕　明治十二年十一月廿一日司法省丁第貳拾八號大審院諸裁判所へ達

訴訟入費云々ノ義十一年丁第四拾四號ヲ以テ相達置候處左ノ通改達候條此旨可心得事

訴訟入費ハ曲者ヨリ直者ニ辨償スヘキハ當然ノ事ナルニ付裁判言渡ノ節ハ必ス曲者ノ辨償ニ歸スヘキ旨言渡スヘシ

○第三節　書類遞送及被告人喚問旅費辨償等ノ事

〔第二千百九十七〕　明治十一年三月十四日司法省丁第拾號大審院諸裁判所へ達

民事訴訟上ニ付人民喚出狀送達費用等餘儀ナク一時裁判所ヨリ立替渡シタルモノハ其時々直チニ詞訟人ヨリ取立ヘシ但裁判落着ノ上ハ曲者ノ辨償ニ歸スヘキハ勿論タルヘキ事

右ハ爲念此旨相達候事

〔第二千百九十八〕　明治十二年八月五日司法省丁第貳拾壹號各上等裁判所へ達

控訴書類返戻入費ノ義ニ付別紙大審院上申ニ朱書ノ通指令及候條此旨相心得可取計事

別紙

上等裁判所ヨリ上告屆出候趣ヲ以テ控訴書類遞送後其儘期限ヲ經過シ上告及ハス當院ニ於テ右書類返戻及候節遞送入費ノ儀ハ是迄官費ニ相立來候處右ハ人民ヨリ取立可然ト相考候得共當院ニ於テ直ニ各地在住ノ人民ヨリ取立候テハ實際繁雜ノ手數ニ相涉リ候間以來上等裁判所ニ於テ遞送入費取立ノ節當院ヨリ返戻ノ入費ヲモ併テ取立置キ候得ハ可然哉ト相考候條右之趣各上等裁判所ヱ御達相成度此段上申候也

明治十二年七月十一日　　大審院長
司法卿大木喬任殿　　判事玉乃世履

（朱書）
上申ノ趣聞屆候事
明治十二年八月五日

第二千百九十九　明治十五年三月八日司法省丁第拾六號（始審裁判所）へ達
控訴書類返附遞送費ノ義ニ付別紙大審院上申ニ對シ朱書ノ通指令及置候條此旨相心得可取計事

別紙十二年丁第貳拾壹號省達ト同文ナルヲ以テ略ス

第二千二百　明治十三年四月十九日司法省丁第六號（大審院諸裁判所）へ達
民事詞訟上喚出狀送達ノ義ハ可成丈直ニ本人ヘ送達スヘシ不得止戸長役場（戸長役場アラサルトキハ區役所）ヲ經由スルトキハ其役場迄ノ送達費用ハ其呼出ヲ請フ者ヨリ取立ツヘシ但裁判落着ノ上曲者ノ辨償ニ歸スヘキハ勿論ナリトス
右相達候事
丙第四號　　各府縣
民事詞訟上喚出狀送達ノ義別紙ノ通大審院諸裁判所ヘ相達候條爲心得此段相達候事
（別紙ハ丁第六號達ニ付略之）

第二千二百一　明治十三年十二月廿七日司法省丁第廿八號（大審院諸裁判所）へ達
民事裁判上呼出人ノ地名人名等ヲ誤寫スルニ因テ生スル失費ノ義ニ付別紙ノ通太政官ヘ相伺候處朱書ノ通御指令相成候條此旨爲心得相達候事

別紙

民事裁判上呼出人ノ地名人名ヲ誤寫スルニ因テ生スル失費ノ義ニ付伺
民事裁判上ニ係リ受付掛等ノ書記其呼出人ノ地名人名等ヲ誤寫スルニ因テ生スル失費ノ義ニ付明治十年九月一日附ヲ以テ別紙之通相伺朱書之如ク御裁令有之爾來其書記ニ任シタル者ヲシテ辨償爲致來候處右辨償ノ義務ハ固ヨリ主任者ノ負擔タルヘキハ當然ノ通理ナルヘシト雖ヒ本邦未タ一般ニ官吏辨償ニ任スルノ規則相立サルヲ以テ官吏ノ失誤ヨリ起ル職務ニ關スル損害ハ其主任者奉仕スル所ノ聽費ニテ償却シ其官吏ハ相當ノ懲戒ニ處スル方穩當ナルヘシ且刑事裁判上ニ係ル前同樣ノ償ハ總テ官費ニ相立候成規ニ有之候間均シク官吏ニシテ職務上ノ失誤ナルニ取扱同一ニ相成ラス候テハ隙礙不尠候條依テ自今民事裁判上ニ係ル誤寫ト雖ヒ明治九年第六拾三號公布ノ官吏其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出シタル者云々ノ成規ニ準シ取扱可然哉此旨相伺候也
明治十三年十一月十七日　　司法卿田中不二麿
太政大臣三條實美殿

（朱書）
伺之通

明治十三年十二月十八日
（別紙十年九月一日ノ伺書ハ略之）

第二千二百二 明治十五年三月廿二日内務省乙第貳拾號府縣（沖繩函館札幌根室ノ四廳ヲ除ク）ヘ達
民事裁判所ヨリ人民呼出狀脚夫ノ賃錢及赤貧者被告トナリ喚問旅費ノ儀從前郡區役所又ハ戸長役場ニ於テ繰替又ハ官費支給候向モ有之候處自今一切不相成候條此旨相達候事

第二千二百三 明治十五年四月五日司法省丁第貳拾壹號大審院裁判所ヘ達
民事裁判上人民召喚狀脚夫賃錢及赤貧者喚問途中旅費支出方ノ儀ニ付明治十年本省丁第八拾六號達ニ及置候處響ニ内務省ヨリ協議有之今般同省ニ於テ乙第貳拾號ノ通府縣ヘ達相成候條此旨爲心得相達候事

○第五章　身代限

○第壹款　通則

第二千二百四 明治五年九月十三日司法省第九號布達
凡動産不動産取引ノ詞訟ヲ審判スルニ原告被告雙方ノ内一方之者負公事ニ決スル時ハ日切濟方申付候上仍ホ不相濟ニ於テハ身代限リ申付候方法ニ有之候處自今日切濟方ノ舊法ヲ廢シ一方ノ者負公事ニ相決直ニ濟方不相成候時ハ身代限之方法ヲ執行可致候事

○第貳款　身代限抵償トシテ差押フベカラサル物件及身代限掲示案

第二千二百五 明治五年六月廿三日第百八拾七號布告
今般華士族平民共身代限規則被相定候條左之通相達候事
但當壬申八月朔日ヨリ施行可致事

華士族平民身代限規則

平民身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一時服着替共（男女共各二通宛）
一夜具（男女共各一通宛）
一本人ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等職業ニ必要ナル書類器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任ス可シ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者（道具屋ノ類）一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ（町村）役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムヘキ事
一食料
家族ノ人口ヲ量リ一ケ月間用ヰル飯米ヲ殘シ置クヘキ事
但男丁ハ一日ニ付五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛ノ事
一鍋釜及炊具各　一通

華士族身代限抵償トシテ差押フヘカラサル品類（五年三百廿七號布告ヲ以テ次項ヲ取消ス）

僧尼ハ職業ト改リタルヲ以テ六年第八十八號布告アル爾後此規則モ遵奉スヘキニ付之ヲ除ク

十六年第七號達（千百九十三）參看

一大小類　男子一人ニ付各一腰宛
一冠服　男子一人ニ付各一通宛
一時服着替共　男女共各　二通宛
一夜具　男女共各　一通宛
一本人職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品
但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等ノ職業ニ必要ナル書類及諸器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者（道具屋ノ類）一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ（町村）役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事
一鍋釜及炊具類　各一通
右身代限ノ節ハ三十日間裁判所門前高札場並ニ本人家宅ヘ掲示ヲ出シ其次第德丞日限中追願ノ者ハ取紙ノ上可處置事
但新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ
一前條ニ記スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ内未タ代價ヲ拂ハサル分ハ賣主ヨリ日限内訴出レハ現品ヲ取戻スヿヲ得ヘシ
但現在着用ノ衣服夜具ハ此限ニアラス
一身代限ノ物件ハ入札拂ニ出ス可シ尤金銀器等ノ定價判然タル物品ハ眞價ヨリ低ク賣拂フヘカラス且ツ賣拂金ノ總額ハ其者ノ負債及ヒ右一件ノ諸費用ヲ償フニ過クヘカラス

但入札拂ノ日ヨリ三日前ニ其品物及ヒ場所時刻ヲ裁判所門前並ニ其者ノ居宅及ヒ各地士民群集ノ所ヘ掲示シ及ヒ新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ且ツ貸主借主ヨリ差出セシ監定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ（町村）役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ取立裁判所ヘ差出スヘシ

第二千二百六　明治七年七月三日第七拾壹號布告身代限掲示案左之通改正候條此旨布告候事

明治六年五月第百八拾壹號布告

何町村　何之誰

右之者儀何町村何ノ誰ヨリ何々（其事日ヲ掲ク）出訴ニ及ヒ吟味ノ上身代限申付ルニ付若シ何ノ誰ヘ係リ金穀其他諸取引ノ訴有之者ハ當何日ヨリ來ル何月何日迄日數六十日内ニ當裁判所ヘ訴出ツヘシ右日限過去訴出ルニ於テハ此度身代分散金ノ分配ニハ不差加者也

○第三款　他ノ負債ニ付身代限ノ場合ニ於テ抵當ノ不動産處分方

第二千二百七　明治八年四月十日第五拾三號布告

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戶長役場ノ帳簿ニ記載シテ奥書割印モ之レアル公正ノ証書ニ付若シ身代限リ財産中質入又ハ書入ノ地所アリテ其價主掲示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ糶賣金配當ノ日マテノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引

キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第相渡スヘク候條此旨布告候事

但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

○第四欵　負債主身代限ノ場合ニ於テ他ニ貸付アル金穀證文取扱方

第二千二百八　明治七年九月四日司法省第廿三號各裁判所各府縣へ達

金穀ヲ借リ返濟ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候トキ所有物ノ内他人ヘ貸附置キタル金穀ノ証文之レアル節ノ取扱振明治五年壬申第四拾號ヲ以テ相達置候處証議ノ次第有之左之通改正候條此旨相達候事

第一條

各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸付置キタル金穀ノ証文有之時ハ其証文ノ定約期限ノ滿未滿ヲ論セス証文ニ記名シタル負債主ヘ眞偽ヲ尋ヲ無相違時ハ其負債主ヨリ証文面ノ通リ可受取旨身代限ニ遭フ者ノ債主ヘ申渡シ別紙雛形ニ倣ヒ証文ニ裏書ヲ爲シ其債主ニ可相渡事

第二條

前條ノ場合ニ於テ債主其証文ヲ受取ルヲ好マサル時ハ其証文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置クヘキ事

但シ定約期限ノ証文ニテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テソノ負債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受度旨申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘキ事

第三條

債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸附置キタル金穀ノ証文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致タサセ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トヘ金高ニ應シ配當シソノ落札ノ証文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ據リ處分スヘキ事

但シ數名ノ債主壺ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及フヘキ事

第四條

証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取リタル時ハ其金員中ヨリ己レノ受取ルヘキ金高ト之レヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘金ハ証文ニ記載シアル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト餘金ヲ返シタル請取書トヲ以テ裁判所ニ屆出ツヘキ事

第五條

若シ証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ントスルニ証文ニ記名シタル負債主モ亦タ身代限ニ遭ヒテ證文ニ記シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサルトキハ証文ニ記名シタル負債主ヨリ証文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次第返濟スヘキ旨ノ証文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ事

但此時裏ニ身代限ニ遭タル者ノ裏書證文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ差引ヲ記

載シ二通ノ證書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ

第六條

證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサル時證文ニ記載シタル債主即チ羈ニ身代限ニ遭ヒシ人已ニ身代ヲ持直シタルトキハ直ニ其人ニ對シ再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事

證文裏書雛形

表書ノ貸主何ノ誰儀年號月日身代限申付候ニ付此證文ハ札ヲ以テ渡ス時ハ此間ニ入札ヲ以テノ五字ヲ書加フヘシ某府縣管下某國某郡某町村何之誰ヘ相渡候條此證書ノ金額ハ右何之誰ヘ濟方致候上其段當裁判所ヘ可屆出事

年號月日　　某裁判所印

○第五款　財産ヲ異ニスル者身代限ノ節處分方

第二千二百九　明治五年九月十八日第二百七拾五號布告

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財産ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家督ヲ其子ニ讓リ隱居別宅シテ財産ヲ異ニスル者自今一已ニ金銀借受候分其證券中本家ノ戸主保證ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財産ヲ目的トシ貸シ與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相滯訴訟ニ及ヒ候節同居ノ者ハ其身所持ノ品物ノミ分産異居ノ者ハ其財産ノミヲ以テ之ニ當ヲ身代限リニ裁判申渡候條爲心得此段相達候事

六年六月十九日布告ヲ以テ當分施行ヲ停止ス

○第六章　内外交渉訴訟

第二千二百十　明治六年六月十三日第貳百五號布告

外國人訴訟規則別紙之通被相定候條此旨相達候事

外國人日本人ニ對シタル事件各開港場或ハ開市場裁判所ヘ訴出ル者ハ總テ左件ノ定則ヲ遵守スヘシ

聽訟手續第一章

一訴訟ヲ爲ス者ハ都テ書面ヲ以テシ原告人或ハ正ク法ニ隨テ委任ヲ受ケタル代人ヨリ左ノ條條ニ從ヒ明細ニ認メ出スヘシ其訴狀或ハ他ノ書類ニテモ外國文ヲ以テ認アルモノハ裁判所ニテ要スル時ハ一々日本文ヲ添ヘ出スヘシ

第一　原告人ノ本國並日本居留ノ住所氏名

第二　被告人ノ住所身分姓名

第三　求ル處ノ金額或ハ賠償ノ高

第四　訴訟ノ由テ生スル明細ナル情實

第五　取引中被告人ヨリ原告人ノ請取タル金及品物アレハ其員數ヲ明細ニ記載スヘシ

第二章

一訴狀ノ書類ハ總テ本書ト眞正ノ寫ト都合二通ヲ出スヘシ

第三章

一訴狀ヲ請取タル上ハ其證跡明確ナルトキハ直ニ其被告人ヲ裁判所ニ呼出シ答辨ヲ爲サシム

ヘシ

一證跡明確ナラサル時ハ裁判所見込ヲ以テ原告人ヨリ證據金又ハ請合證書ヲ出セシ上被告人ヲ呼出スヘシ

第四章

一被告人ノ答辨モ亦自身或ハ正ク法ニ隨テ委任ヲ受ケタル代人ニテ記名シタル書面ヲ以テ其訴狀中ノ件々ニ對シ一々答辨ヲ爲スヘシ

第五章

一被告人ノ答書モ亦正副二本ヲ出スヘシ原告人一見センヿヲ乞フ者アラハ副本ヲ以テ貸與ルヿヲ得セシムヘシ

第六章

一訴狀ハ被告人ヨリ書面ヲ以テ開申セル時日ヲ以テ順次ヲ立テ裁判ヲ爲スヘシ但事故アリテ原告人及被告人ノ雙方或ハ其一方ヨリ裁判猶豫ヲ願出ル時ハ此例ニ非ス

第七章

一審問及裁判ノ日限ハ前以テ雙方ノ者共ヘ報知シ置一件始終ノ審問ハ凡テ之ヲ公ニスヘシ諸引合人ハ其訟庭ニ出テタル時ハ先引合トシテ差出セシ本人ヨリ引合人ヘ對シ一々其事蹟ヲ質問シ而シテ後相手方亦審官ニ乞ヒ右ノ引合人ヘ對シ眞否ヲ質問スルヲ得ヘシ若シ又一方ノ人自ラ証明センヿヲ申立ルトキハ審官ノ令ニヨリ相手方之ニ對シテ質問スルヲ得ヘシ審官ハ此間何時ニテモ引合人ニ質問スヘシ引合人ハ引合ノ任ニ當ル前毫モ欺詐ヲ用ヒス誠實ニ應答ヲ爲ス可キヿヲ陳述スヘシ

第八章

一引合人ノ申立ヲ聞終リテ後尚一方ヨリ申立ル事アリト乞フ時ハ其對論ヲ聞キ若シ雙方ヨリ申立ルヿアル時ハ原告其對論ヲ始メ且ツ之ヲ終ルヲ得ヘシ

第九章

一原告人或ハ被告人孰レニテモ差出セル証據書ハ裁判所ノ免許ヲ得テ寫ヲ差出シ本書ヲ取下クルヲ得ヘシ

第十章

一譯官ヲ要スルトキハ雙方自ラ之ヲ差出スヘシ若シ出シ能ハサルトキ裁判所ニテ相當ノ人ヲ得ヘキトキハ裁判所之レニ命シテ辨セシメ其用ニ供セル方ヨリ相當ノ料ヲ差出サシムヘシ

第十一章

一都テ訴訟ノ裁決ハ其裁判ノ條理ヲ書面ニ認メ訴狀ニ添ヘ置クヘシ孰レノ方ニテモ望ミアル時ハ右裁決或ハ意見ノ書及其訴訟ニ關シ差出セル書類ノ寫ヲ一見スルヿヲ得ヘシ

第十二章

一裁決ノ後十日ヲ經サル内裁決ヲ受ケシ方ヨリ相手方ニ掛合ノ上再ヒ裁判ヲ乞フ時ハ裁判所之ヲ聽用スヘシ尤裁判所ニテ以前ノ裁斷不當ナリト思フ時歟或ハ裁決ノ後新タニ肝要ナル証據ヲ得如此証據ヲ差出スニ於テハ裁判所必ス以前ノ裁決ヲ更變スルノ理アリト思フ時ニ限ルヘシ

第十三章

一各港場裁判所ニ於テ處斷セル裁判ノ趣ニ不伏ナル時ハ司法省裁判所ヘ上告スルヲ得ヘシ

第十四章

一前條ノ如ク上告スルニハ裁決ノ後三ケ月ヲ越ユヘカラス且右ノ情由豫メ相手方或ハ代人ノアル時ハ其代人ニ書面ヲ以テ告知ラセ且其開港場ノ裁判所ヘモ豫メ其情由ヲ申立ヘシ

但上告スルモノ故アリテ此期限ヲ延ンヿヲ欲スルモノハ預ケ金ヲ爲シ又ハ証書ヲ出シ豫メ願立ルヿハ事實不得止分ハ六ケ月迄ハ裁判所之ヲ許容スヘシ既ニ上告ニ及フ時ハ其裁判ヲ爲シタル開港場或ハ開市場ノ裁判所ヨリモ司法省裁判所ヘ其情由ヲ告知シ雙方ノ口書及其訴訟ニ關シタル諸書付ノ寫ヲ差出スヘシ

第十五章

一裁判所ハ裁判ニヨリテ決定スル處ノ償還ハ速ニ之ヲ遂ケシムル樣取計フヘシ

治罪手續第一章

一日本人ノ罪科アルヲ外國人ヨリ申出ルヿハ公然之ヲ吟味スヘシ原告人及其引合人トナルヘキト申出タルモノ或ハ被告人及其引合人タルヘキ者ヲ吟味スルヿ猶訴訟手續ニ於ケルカ如シ

第二章

一裁判所ハ訴訟裁判ニ於ケルカ如ク罪科裁判ニ於テモ原告人或ハ被告人ヲ論セス孰レノ方ニテモ其引合人トナルヘキ者ヲ呼寄セント欲スルヿハ其裁判所ノ權限ニ循ヒ之ヲ扶助ナスヘシ

第三章

一罪科ノ裁決ハ書面ヲ以テシ被告人罪科ニ伏スルヿハ之ヲ普通至當ノ罪科ニ處スヘシ

[第二千二百十一] 明治七年九月廿三日第百貳拾五號（省使府縣）ヘ達

外國政府並外國人民ヨリ我政府ニ對スル詞訟ハ外務省ニ於テ取調候旨明治六年八月第二百八十九號ヲ以テ相達置候處向後外國政府並外國人民ヨリ我政府ニ對スル詞訟都テ司法省ニ於テ取調裁判可及候條此旨相達候事

[第二千二百十二] 明治八年五月七日司法省甲第三號布達

內國人ヨリ外國人ヘ係ル民事ノ訴訟手續左之通相定候條此旨布達候事

內國人原告人ニテ外國人ニ係ル民事ノ訴訟ハ原告人其事由ヲ各開港開市場ノ府縣廳ニ申出其廳ノ添狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事ヘ申訴スヘシ（司法省甲第拾三號布達ヲ以テ民申ノ下二字ヲ削ル）

[第二千二百十三] 明治九年九月廿八日司法省甲第拾貳號布達

明治八年當省甲第三號ヲ以テ布達候內國人ヨリ外國人ニ係ル民事ノ訴訟手續中今般左之通相定候條此旨布達候事（九年甲第十三號布達ヲ以テ民申ノ下二字ヲ削ル）

第一條　內國人原告ニテ外國人ニ係ル刑事並ニ民刑附帶ノ訴訟ハ檢事其他ノ警察官（東京ニテハ警視廳其他ノ府縣ハ地方官）ニ於テ之ヲ承ケ直ニ被告人管轄ノ外國領事ヘ照會シ裁判ヲ求ムヘシ

第二條　前條ノ場合ニ於テ犯罪ノ爲メ損害ヲ受ケタル者其償ヲ求ル民事ノ訴ハ總テ本人ノ望ニ任スヘシ

第二千二百十四　明治十五年八月廿三日司法省丁第四拾三號（大審院裁判所ヘ達）

御國人民ヨリ朝鮮國人ニ對スル控訴ノ儀ニ付大坂控訴裁判所ヨリ甲號ノ通伺出テ乙號ノ通及指令候條爲心得此旨相達候事

甲

我國人ヨリ在朝鮮國同國人ヘ係ル控訴被告人召喚ノ儀ニ付伺

大坂府下秋宗清兵衛ヨリ仝府羈留朝鮮國人扑琪淙ヘ係リ大坂始審裁判所ヘ出訴ノ末別紙控訴狀（略之）ニ掲載ノ如ク裁判ヲ受ケ之ニ服セス及控訴候然ルニ被告人ハ右裁判後歸國致シ現今ハ釜山浦辨察衙門中ニ罷在候趣ニ付召喚ノ手續ハ當廳ヨリ直チニ彼港在留我國領事ヘ照會シ領事ヨリ彼ノ官衙ヘ移シ候順序ニ而可然哉別紙照會案（略之）相添ヘ併セテ伺候間至急御指令ヲ乞ヒ候也

明治十五年七月廿二日　大坂控訴裁判所長　判事　清岡公張

大木司法卿殿

乙

伺ノ趣必スシモ被告人ノ出廷ヲ要セサル儀ニ付訴狀ヲ添ヘ領事廳ヘ移文シテ被告人ノ答辯書ヲ差出サシムル樣可取計事

明治十五年八月廿一日

○第五部　刑罰

○第壹編　刑律

○第壹章　刑法

第二千二百十五　明治十三年七月十七日第三拾六號布告

刑法別冊ノ通改定候條此旨布告候事

但實際施行ノ期日ハ追テ布告スヘキ事（十四年第三十六號ヲ以テ十五年一月一日ヨリ實施ノ旨ヲ布告ス）

別冊

刑法

第一編　總則

第一章　法例

第一條　凡法律ニ於テ罰ス可キ罪別テ三種ト爲ス

一重罪

二輕罪

三違警罪

第二條　法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト雖モ之ヲ罰スルヿヲ得ス

第三條　法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスヿヲ得ス

若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス

第四條　此刑法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ス可キ者ニ適用スルヿヲ得ス

（十四年第八拾壹號布告（二千二百十六）參看）

第五條　此刑法ニ正條ナクシテ他ノ法律規則ニ刑名アル者ハ各其法律規則ニ從フ
若シ他ノ法律規則ニ於テ別ニ總則ヲ掲ケサル者ハ此刑法ノ總則ニ從フ

第二章　刑例

第一節　刑名

第六條　刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス
主刑ハ之ヲ宣告ス
附加刑ハ法律ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム

第七條　左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス
一　死刑
二　無期徒刑
三　有期徒刑
四　無期流刑
五　有期流刑
六　重懲役
七　輕懲役
八　重禁獄
九　輕禁獄

第八條　左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス

一　重禁錮
二　輕禁錮
三　罰金

第九條　左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲ス
一　拘留
二　科料

第十條　左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス
一　剝奪公權
二　停止公權
三　禁治産
四　監視
五　罰金
六　沒收

第十一條　刑ヲ執行シ及ヒ犯人ヲ檢束スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第二節　主刑處分

第十二條　死刑ハ絞首ス但規則ニ定ムル所ノ官吏臨檢シ獄內ニ於テ之ヲ行フ

第十三條　死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フヿヲ得ス

第十四條　大祀令節國祭ノ日ハ死刑ヲ行フヿヲ禁ス

死刑執行ニ付テハ十四年第六拾七號布告第二千二百十七ノ一條自第一條至第八條參看

第十五條　死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ナル時ハ其執行ヲ停メ分娩後一百日ヲ經ルニ非サレハ刑ヲ行ハス

第十六條　死刑ノ遺骸ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下付ス但式ヲ用ヒテ葬ルヿヲ許サス

第十七條　徒刑ハ無期有期ヲ分タス島地ニ發遣シ定役ニ服ス

有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第十八條　徒刑ノ婦女ハ島地ニ發遣セス內地ノ懲役場ニ於テ定役ニ服ス

第十九條　徒刑ノ囚六十歲ニ滿ル者ハ通常ノ定役ヲ免シ其體力相當ノ定役ニ服ス

第二十條　流刑ハ無期有期ヲ分タス島地ノ獄ニ幽閉シ定役ニ服セス

有期流刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス

第二十一條　無期流刑ノ囚五年ヲ經過スレハ行政ノ處分ヲ以テ幽閉ヲ免シ島地ニ於テ地ヲ限リ居住セシムルヿヲ得

有期流刑ノ囚三年ヲ經過スル者亦同シ

第二十二條　懲役ハ內地ノ懲役場ニ入レ定役ニ服ス但六十歲ニ滿ル者ハ第十九條ノ例ニ從フ

重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十三條　禁獄ハ內地ノ獄ニ入レ定役ニ服セス

重禁獄ハ九年以上十一年以下輕禁獄ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十四條　禁錮ハ禁錮場ニ留置シ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁錮ハ定役ニ服セス

懲役重禁錮ニ付テハ同上自第十六條至第廿條參看

徒流刑執行ニ付テハ同上自第九條至第十五條參看

禁錮ハ重輕ヲ分タス十一日以上五年以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

第二十五條　定役ニ服スル囚人ノ工錢ハ監獄ノ規則ニ從ヒ其幾分ヲ獄舍ノ費用ニ供シ其幾分ヲ囚人ニ給與ス但現役百日以內ハ給與ノ限ニ在ラス

第二十六條　罰金ハ二圓以上ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス

第二十七條　罰金ハ裁判確定ノ日ヨリ一月內ニ納完セシム若シ限內納完セサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シ之ヲ輕禁錮ニ換フ其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

罰金ヲ禁錮ニ換フル者ハ更ニ裁判ヲ用ヒス檢察官ノ求ニ因リ裁判官之ヲ命ス但禁錮ノ期限ハ二年ニ過クルヿヲ得ス

若シ禁錮限內罰金ヲ納メタル時ハ其經過シタル日數ヲ扣除シテ禁錮ヲ免ス親屬其他ノ者代テ罰金ヲ納メタル時亦同シ

附錄　明治十五年十月五日司法省丁第五拾三號大審院裁判所ヘ達

罰金ヲ禁錮ニ換フル儀ニ付神奈川重罪裁判所判事荒木博臣ヨリ別紙甲號ノ通伺出候ニ付乙號ノ通及指令候條爲心得此旨相達候事

別紙

甲號

罰金ヲ禁錮ニ換フル義ニ付伺

重罪裁判ニテ罰金ノ言渡ヲ受ケタル者期限內ニ納完セサル時ハ刑法第廿七條ニ照シ輕禁錮ニ換フヘキ處重罪裁判所閉聽後ハ始審裁判所ニ於テ開キタルトキ右禁錮ニ換フル事ヲ檢察官ノ求

ニ因リ其始審裁判所ノ所長判事ニテ之ヲ命シ候様致度右ハ差掛リ候事件有之候間至急
御指令相成度此段相伺候也

明治十五年九月十八日　　神奈川重罪裁判所
　　判事荒木博臣印

司法卿大木喬任殿

乙號
伺ノ通
明治十五年九月廿六日

○明治十六年十一月十日第三拾七號布告
陸海軍法衙ニ於テ罰金科料ニ處スル時ハ直ニ輕禁錮拘留ニ換フルコトヲ得
右奉　勅旨布告候事

第廿八條附錄見合

第二十八條　拘留ハ拘留所ニ留置シ定役ニ服セス其刑期ハ一日以上十日以下ト爲シ仍ホ各
本條ニ於テ其長短ヲ區別ス
第二十九條　科料ハ五錢以上一圓九十五錢以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其多寡ヲ區別ス
第三十條　科料ハ裁判確定ノ日ヨリ十日内ニ完納セシム若シ限内納完セサル者ハ第二十七
條ノ例ニ照シ之ヲ拘留ニ換フ

第三節　附加刑處分

第三十一條　剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス
一國民ノ特權
二官吏ト爲ルノ權
三勳章年金位記貴號恩給ヲ有スルノ權
四外國ノ勳章ヲ佩用スルノ權
五兵籍ニ入ルノ權
六裁判所ニ於テ證人ト爲ルノ權但單ニ事實ヲ陳述スルハ此限ニ在ラス
七後見人ト爲ルノ權但親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲メニスルハ此限ニ在ラス
八分散者ノ管財人ト爲リ又ハ會社及ヒ共有財産ヲ管理スルノ權
九學校長及ヒ教師學監ト爲ルノ權
第三十二條　重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス終身公權ヲ剝奪ス
第三十三條　禁錮ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス現任ノ官職ヲ失ヒ及ヒ其刑期間公
權ヲ行フヿヲ停止ス
第三十四條　輕罪ノ刑ニ於テ監視ニ付シタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス監視ノ期限間公權ヲ行
フヿヲ停止ス
主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル者亦同シ
第三十五條　重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其主刑ノ終ルマテ自ラ財産ヲ
治ムルヿヲ禁ス
第三十六條　流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル時ハ行政ノ處分ヲ以テ治産ノ禁ノ幾分ヲ免スル

監視ニ付テハ同上第二十章参看

第二十八條附録見合

ヿヲ得

第三十七條　重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス各本刑ノ短期三分ノ一ニ等シキ時間監視ニ付ス

第三十八條　輕罪ノ刑ニ附加スル監視ハ之ヲ宣告ス但各本條ニ記載スルノ外監視ニ付スルヿヲ得ス

第三十九條　死刑及ヒ無期刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス五年間監視ニ付ス

第四十條　監視ノ期限ハ主刑ノ終リタル日ヨリ起算ス主刑ノ期滿免除ヲ得タル時ハ其捕ニ就キタル日ヨリ起算ス

若シ主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付シタル時ハ其裁判確定ノ日ヨリ起算ス

第四十一條　監視ニ付セラレタル者其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ假ニ監視ヲ免スルヿヲ得

第四十二條　附加ノ罰金ハ之ヲ宣告ス若シ一月内ニ納完セサル時ハ第二十七條ノ例ニ照シ輕禁錮ニ換ヘ主刑滿限ノ後之ヲ執行ス

第四十三條　左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ沒收ス但法律規則ニ於テ別ニ沒收ノ例ヲ定メタル者ハ各其法律規則ニ從フ

一法律ニ於テ禁制シタル物件

二犯罪ノ用ニ供シタル物件

三犯罪ニ因テ得タル物件

附録　明治十二年七月廿九日司法省丙第拾號（大審院諸裁判所檢事アラサル府縣檢事ヘ達）

凡ソ僞證或ハ公私文書ノ贋造ニ係ルヿ發覺シ刑事裁判ヲ經シ上ハ其文書ハ素ヨリ其裁判所ニ沒入シ置クヘシト雖モ或ハ其文書ノ證憑ナキヲ以テ他ニ詞訟ヲ起スヘキ途方ヲ失ヒ冤枉者ナキヲ保シ難シ故ニ其文書ヲ沒入スルニ當リ其文書ノ寫ヲ請求スル者ニハ必ス之ヲ與フヘシ

但裁判所ニ於テ該書類ニ消印ヲ押捺スル如キノ慣習ハ廢止トス

各裁判所ニ於テハ前條文書ノ寫ヲ以テ訴出ルモノアラハ尋常ノ證據ト見ルハ勿論ト雖モ若他ノ裁判ニ在リテハ一應其沒入セシ所ノ裁判所ヘ照會シテ其沒入セシハ果シテ信ナルヤヲ認メシ上裁判ヲ與フヘシ

右相達候事

○明治十五年五月十一日司法省丙第貳拾號（大審院裁判所警視廳府縣東京府ヲ除ク）ヘ達

犯罪ノ用ニ供シタル物件及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ本案ノ裁判ヲ言渡ス迄ニ所有主ヲ發見セサル時ハ刑法第四十三條第四十四條ニ從ヒ其本案ノ裁判ト共ニ沒收ノ言渡ヲ爲スヘシト雖モ右ノ物件ハ之ヲ其裁判所々在ノ地及ヒ犯罪ノ地ニ公告シ一年間（公告シタル日ヨリ起算ス）ニ所有主ヲ發見シタル時ハ檢察官ヨリ直ニ之ヲ還付スヘシ此旨爲心得相達候事

但檢察官ニ於テ保存ス可カラサル物件又ハ保存スルニ付費用ヲ要スヘキ者ト思料スル時ハ公竇ノ處分ヲ爲シタル上其代金ヲ保存シ置クヘシ

○明治十五年六月廿六日司法省丙第貳拾四號（大審院裁判所警視廳府縣東京ヲ除ク東京鎮兵本部ヘ達）

犯罪ノ用ニ供シ又ハ犯罪ニ因リ得タル物件ハ轉轉シテ他人ノ手ニ在リ及ヒ沒收スヘキモノ若クハ證憑ノ爲メ官ニ保存シ置クヲ必要トスルモノヲ除クノ外ハ裁判官檢察官司法警察官ニ於テ實際ノ便宜ニ因リ裁判言渡アルマテ其所有主ヘ假ニ之ヲ下渡シ置クヲ得ヘシ此旨爲心得相達候事

第四十四條　法律ニ於テ禁制シタル物件ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス犯罪ノ用ニ供シ及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ犯人ノ所有ニ係リ又ハ所有主ナキ時ノ外之ヲ沒收スルヲ得ス

第四節　償償處分

第四十五條　刑事ノ裁判費用ハ其全部又ハ幾分ヲ犯人ニ科ス但其費用ノ額ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四十六條　犯人刑ニ處セラレ又ハ放免セラルヽト雖モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ免カルヽヿヲ得ス

第四十七條　數人共犯ニ係ル裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ共犯人ヲシテ之ヲ連帶セシム

第四十八條　裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ被害者ノ請求ニ因リ刑事裁判所ニ於テ之ヲ審判スルヿヲ得若シ贓物犯人ノ手ニアル時ハ請求ナシト雖モ直チニ之ヲ被害者ニ還付ス

第五節　刑期計算

第四十九條　刑期ヲ計算スルニ一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第五十條　刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行スルヿヲ得ス

第五十一條　刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算ス若シ上訴ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ從フ

一犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算ス若シ其上訴不當ナル時ハ後判宣告ノ日ヨリ起算ス

二檢察官ノ上訴ニ係ル者ハ其上訴正當ナルト否トヲ分タス前判宣告ノ日ヨリ起算ス

三上訴中保釋ヲ得又ハ責付セラレタル者ハ其日數ヲ刑期ニ算入スルヿヲ得ス

第五十二條　刑期限內逃走シ再ヒ捕ニ就キタル者ハ其逃走ノ日數ヲ除キ前後受刑ノ日ヲ計算ス

第六節　假出獄

第五十三條　重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ謹守シ悛改ノ狀アル時ハ其刑期四分ノ三ヲ經過スルノ後行政ノ處分ヲ以テ假ニ出獄ヲ許スヿヲ得

無期徒刑ノ囚ハ十五年ヲ經過スルノ後亦同シ

流刑ノ囚ハ第二十一條ニ照シ幽閉ヲ免スルノ外假出獄ノ例ヲ用ヒス

第五十四條　徒刑ノ囚ハ假出獄ヲ許サルヽト雖モ仍ホ島地ニ居住セシム

第五十五條　假出獄ヲ許サレタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ治產ノ禁ノ幾分ヲ免スルヿヲ得但本刑期限內特別ニ定メタル監視ニ付ス

第五十六條　假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入スルヿヲ得ス

第五十七條　刑期限内更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サス

第七節　期滿免除

第五十八條　刑ノ執行ヲ遁レタル者法律ニ定メタル期限ヲ經過スルニ因テ期滿免除ヲ得

第五十九條　主刑ハ左ノ年限ニ從テ期滿免除ヲ得

一死刑ハ三十年
二無期徒流刑ハ二十五年
三有期徒流刑ハ二十年
四重懲役重禁獄ハ十五年
五輕懲役輕禁獄ハ十年
六禁錮罰金ハ七年
七拘留科料ハ一年

第六十條　剝奪公權停止公權及ヒ監視ハ期滿免除ヲ得ス

附加ノ罰金ハ主刑ト共ニ期滿免除ヲ得

沒收ハ五年ヲ經テ期滿免除ヲ得但禁制物ハ期滿免除ノ限ニ在ラス

第六十一條　期滿免除ハ刑ノ執行ヲ遁レタル日ヨリ起算ス若シ捕ヲ就キ再ヒ逃走シタル時ハ其逃走ノ日ヨリ起算シ闕席裁判ニ係ル時ハ其宣告ノ日ヨリ起算ス

十四年司法第二十號（二千二百四十八）上參看

第六十二條　刑ノ執行ヲ遁レタル者ニ對シ逮捕ヲ命シタル時ハ最終ノ令狀ヲ出シタル日ヨリ期滿免除ヲ起算ス

第八節　復權

第六十三條　公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後其情狀ニ因リ將來ノ公權ヲ復スルヿヲ得

主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後亦同シ

第六十四條　大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ直チニ復權ヲ得特赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ赦狀中記載スルニ非サレハ復權ヲ得ス

赦ニ因テ復權ヲ得タル者ハ自ラ監視ヲ免シタル者トス

第六十五條　復權ハ勅裁ニ非サレハ之ヲ得可カラス

第三章　加減例

第六十六條　法律ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ數條ニ記載シタル例ニ照シテ加減ス

但加ヘテ死刑ニ入ルヿヲ得ス

第六十七條　重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑
二無期徒刑
三有期徒刑
四重懲役

五輕懲役

第六十八條　國事ニ關スル重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一死刑

二無期流刑

三有期流刑

四重禁獄

五輕禁獄

第六十九條　輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

輕禁獄ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

第七十條　禁錮罰金ニ該ル者減輕ス可キ時ハ各本條ニ記載シタル刑期金額ノ四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等ト爲シ其加重ス可キ時ハ亦四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス

輕罪ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルヿヲ得ス但禁錮ハ加ヘテ七年ニ至ルヿヲ得

第七十一條　禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處シ罰金ヲ減盡シタル時ハ科料ニ處ス禁錮罰金ヲ減シテ其短期十日以下寄數一圓九十五錢以下ニ及フ時ハ亦拘留科料ニ處スルコトヲ得

第七十二條　拘留科料ニ該ル者加減ス可キ時ハ禁錮罰金ノ例ニ照シ其四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス

違警罪ノ刑ハ加ヘテ輕罪ニ入ルヿヲ得ス但拘留ハ加ヘテ十二日ニ至ルヿヲ得減シテ一日

以下ニ降スヿヲ得ス科料ハ加ヘテ二圓四十錢ニ至ルヿヲ得減シテ五錢以下ニ降スヿヲ得ス

第七十三條　禁錮拘留ヲ加減スルニ因テ其期限ニ零數ヲ生シ一日ニ滿サル時ハ之ヲ除棄ス

第七十四條　附加ノ罰金ハ主刑ニ從テ加減シ其金額ノ四分ノ一ヲ加減スルヲ以テ一等ト爲ス若シ減盡シタル時ハ止タ主刑ヲ科ス

第四章　不論罪及ヒ減輕

第一節　不論罪及ヒ宥恕減輕

第七十五條　抗拒ス可カラサル强制ニ遇ヒ其意ニ非サルノ所爲ハ其罪ヲ論セス

天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル危難ニ遇ヒ自己若クハ親屬ノ身體ヲ防衛スルニ出タル所爲亦同シ

第七十六條　本屬長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者ハ其罪ヲ論セス

第七十七條　罪ヲ犯ス意ナキノ所爲ハ其罪ヲ論セス但法律規則ニ於テ別ニ罪ヲ定メタル者ハ此限ニ在ラス

罪ト爲ル可キ事實ヲ知ラスシテ犯シタル者ハ其罪ヲ論セス

罪本重カル可クシテ犯ス時知ラサル者ハ其重キニ從テ論スルヿヲ得ス

法律規則ヲ知ラサルヲ以テ犯スノ意ナシト爲スヿヲ得ス

第七十八條　罪ヲ犯ス時知覺精神ノ喪失ニ因テ是非ヲ辨別セサル者ハ其罪ヲ論セス

第七十九條　罪ヲ犯ス時十二歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ論セス但滿八歲以上ノ者ハ情狀ニ因リ

滿十六歲ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヿヲ得

第八十條　罪ヲ犯ス時滿十二歲以上十六歲ニ滿サル者ハ其所爲是非ヲ辨別シタルト否トヲ審案シ辨別ナクシテ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ滿二十歲ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヿヲ得

若シ辨別アリテ犯シタル時ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ二等ヲ減ス

第八十一條　罪ヲ犯ス時滿十六歲以上二十歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス

第八十二條　瘖啞者罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ論セス但情狀ニ因リ五年ニ過キサル時間之ヲ懲治場ニ留置スルヿヲ得

第八十三條　違警罪ハ滿十六歲以上二十歲ニ滿サル者ト雖モ其罪ヲ宥恕スルヿヲ得ス

滿十二歲以上十六歲ニ滿サル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス十二歲ニ滿サル者及ヒ瘖啞者ハ其罪ヲ論セス

第八十四條　此節ニ記載スルノ外特別ノ不論罪宥恕減輕ハ各本條ニ於テ之ヲ記載ス

第二節　自首減輕

第八十五條　罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ニ一等ヲ減ス但謀殺故殺ニ係ル者ハ自首減輕ノ限ニ在ラス

第八十六條　財產ニ對スル罪ヲ犯シタル者自首シテ其贓物ヲ還給シ損害ヲ賠償シタル時ハ自首減等ノ外仍ホ本刑ニ二等ヲ減ス其全部ヲ還償セスト雖モ半數以上ヲ還償シタル時ハ

一等ヲ減ス

第八十七條　財產ニ對スル罪ヲ犯シ被害者ニ首服シタル者ハ官ニ自首スルト同ク前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第八十八條　此節ニ記載スルノ外本條別ニ自首ノ例ヲ揭ケタル者ハ各其本條ニ從フ

第三節　酌量減輕

第八十九條　重罪輕罪違警罪ヲ分タス所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スルヿヲ得

法律ニ於テ本刑ヲ加重シ又ハ減輕ス可キ者ト雖モ其酌量ス可キ時ハ仍ホ之ヲ減輕スルヿヲ得

第九十條　酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第五章　再犯加重

第九十一條　先ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯重罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十二條　先ニ重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯輕罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ

第九十三條　先ニ違警罪ノ刑ニ處セラレタル者再犯違警罪ニ該ル時ハ本刑ニ一等ヲ加フ但一年內再ヒ其違警罪裁判所ノ管轄地內ニ於テ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヿヲ得ス

第九十四條　再犯加重ハ初犯ノ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ論スルヿヲ得ス

第九十五條　刑期限內再ヒ罪ヲ犯スニ因リ刑ヲ宣告シタル時ハ先ツ其定役ニ服ス可キ者ヲ

執行シ定役ニ服セサル者ヲ後ニス若シ初犯再犯共ニ定役ニ服スル刑ニ該ル時又ハ共ニ定役ニ服セサル刑ニ該ル時ハ先ツ其重キ者ヲ執行ス

罰金科料ニ該ル者ハ順序ニ拘ハラス各之ヲ徵收ス

第九十六條　陸海軍裁判所ニ於テ判決ヲ經タル者再ヒ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ初犯ノ罪常律ニ從ヒ處斷シタル者ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヿヲ得ス

第九十七條　大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ再ヒ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論スルヿヲ得ス

第九十八條　三犯以上ノ者ト雖モ其加重ノ法ハ再犯ノ例ニ同シ

第六章　加減順序

第九十九條　犯罪ノ情狀ニ因リ總則ニ照シ同時ニ本刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ左ノ順序ニ從テ其刑名ヲ定ム但從犯及ヒ未遂犯罪ノ減等其他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ハ其加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

一再犯加重

二宥恕減輕

三自首減輕

四酌量減輕

第七章　數罪俱發

第百條　重罪輕罪ヲ犯シ未タ判決ヲ經ス二罪以上俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從テ處斷ス重罪ノ刑ハ刑期ノ長キ者ヲ以テ重ト爲シ刑期ノ等シキ者ハ定役アル者ヲ以テ重ト爲ス

輕罪ノ刑ハ其所犯情狀重キ者ニ從テ處斷ス

第百一條　違警罪二罪以上俱ニ發シタル時ハ各其刑ヲ科ス若シ重罪又ハ輕罪ト俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從フ

第百二條　一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論セス其重キ者ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス但前發ノ刑罰金科料ニ該リ已ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス

若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未タ發セサル罪再犯ノ罪ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ前發ノ刑ヲ通算セス

第百三條　數罪俱ニ發シ一ノ重キニ從フ時ト雖モ其沒收及ヒ徵償ノ處分ハ各本法ニ從フ

第八章　數人共犯

第一節　正犯

第百四條　二人以上現ニ罪ヲ犯シタル者ハ皆正犯ト爲シ各自ニ其刑ヲ科ス

第百五條　人ヲ敎唆シテ重罪輕罪ヲ犯サシメタル者ハ亦正犯ト爲ス

第百六條　正犯ノ身分ニ因リ別ニ刑ヲ加重ス可キ時ハ他ノ正犯從犯及ヒ敎唆者ニ及ホスヿヲ得ス

第百七條　犯人ノ多數ニ因リ刑ヲ加重ス可キ時ハ敎唆者ヲ算入シテ多數ト爲スヿヲ得ス

第百八條　事ヲ指定シテ犯罪ヲ敎唆スルニ當リ犯人敎唆ニ乘シ其指定シタル以外ノ罪ヲ犯シ又ハ其現ニ行フ所ノ方法敎唆者ノ指示シタル所ト殊ナル時ハ左ノ例ニ照シテ敎唆者ヲ

處斷ス

一所犯教唆シタル罪ヨリ重キ時ハ止タ其指定シタル罪ニ從テ刑ヲ科ス

二所犯教唆シタル罪ヨリ輕キ時ハ現ニ行フ所ノ罪ニ從テ刑ヲ科ス

第二節　從犯

第百九條　重罪輕罪ヲ犯スコヲ知テ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示シ其他豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一等ヲ減ス但正犯現ニ行フ所ノ罪從犯ノ知ル所ヨリ重キ時ハ止タ其知ル所ノ罪ニ照シ一等ヲ減ス

第百十條　身分ニ因リ刑ヲ加重ス可キ者從犯ト爲ル時ハ其重キニ從テ一等ヲ減ス

正犯ノ身分ニ因リ刑ヲ減免ス可キ時ト雖モ從犯ノ刑ハ其輕キニ從テ減免スルコヲ得ス

第九章　未遂犯罪

第百十一條　罪ヲ犯サンコヲ謀リ又ハ其豫備ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル者ハ本條別ニ刑名ヲ記載スルニ非サレハ其刑ヲ科セス

第百十二條　罪ヲ犯サントシテ已ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂ケサル時ハ已ニ遂ケタル者ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第百十三條　重罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ本條別ニ記載スルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルコヲ得ス

違警罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ其罪ヲ論セス

第十章　親屬例

第百十四條　此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

一祖父母父母夫妻

二子孫及ヒ其配偶者

三兄弟姉妹及ヒ其配偶者

四兄弟姉妹ノ子及ヒ其配偶者

五父母ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

六父母ノ兄弟姉妹ノ子

七配偶者ノ祖父母父母

八配偶者ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

九配偶者ノ父母ノ兄弟姉妹ノ子

十配偶者ノ父母ノ兄弟姉妹

第百十五條　祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト稱スルハ庶子曾玄孫外孫同シ兄弟姉妹ト稱スルハ異父異母ノ兄弟姉妹同シ

養子其養家ニ於ル親屬ノ例ハ實子ニ同シ

第二編　公益ニ關スル重罪輕罪

第一章　皇室ニ對スル罪

第百十六條　天皇三后皇太子ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ處ス

第百十七條　天皇三后皇太子ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ三月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

皇陵ニ對シ不敬ノ所爲アル者亦同シ

第百十八條　皇族ニ對シ危害ヲ加ヘタル者ハ死刑ニ處ス其危害ヲ加ヘントシタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第百十九條　皇族ニ對シ不敬ノ所爲アル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百二十條　此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二章　國事ニ關スル罪

第一節　內亂ニ關スル罪

第百二十一條　政府ヲ顚覆シ又ハ邦土ヲ僭竊シ其他朝憲ヲ紊亂スルヿヲ目的ト爲シ內亂ヲ起シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一首魁及ヒ敎唆者ハ死刑ニ處ス

二群衆ノ指揮ヲ爲シ其他樞要ノ職務ヲ爲シタル者ハ無期流刑ニ處シ其情輕キ者ハ有期流刑ニ處ス

三兵器金穀ヲ資給シ又ハ諸般ノ職務ヲ爲シタル者ハ重禁獄ニ處シ其情輕キ者ハ輕禁獄ニ處ス

四敎唆ニ乘シテ附和隨行シ又ハ指揮ヲ受ケテ雜役ニ供シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百二十二條　內亂ヲ起スノ目的ヲ以テ兵器彈藥船舶金穀其他軍備ノ物品ヲ劫掠シタル者ハ已ニ內亂ヲ起シタル者ノ刑ニ同シ

第百二十三條　政府ヲ變亂スルノ目的ヲ以テ人ヲ謀殺シタル者ハ兵ヲ擧ルニ至ラスト雖モ內亂ト同ク論シ其敎唆者及ヒ下手者ヲ死刑ニ處ス

第百二十四條　前三條ノ罪ハ未遂犯罪ノ時ニ於テ乃チ本刑ヲ科ス

第百二十五條　兵隊ヲ招募シ又ハ兵器金穀ヲ準備シ其他內亂ノ豫備ヲ爲シタル者ハ第百二十一條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

內亂ノ陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ各二等ヲ減ス

第百二十六條　內亂ノ豫備又ハ陰謀ヲ爲スト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

第百二十七條　內亂ノ情ヲ知テ犯人ニ集會所ヲ給與シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百二十八條　內亂ニ乘シテ人ノ身體財產ニ對シ內亂ノ目的ニ關セサル重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ通常ノ刑ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二節　外患ニ關スル罪

第百二十九條　外國ニ與シテ本國ニ抗敵シ又ハ外國ト交戰中同盟國ニ抗敵シ其他本國ニ背

叛シテ敵兵ニ附屬シタル者ハ死刑ニ處ス

第百三十條　交戦中敵兵ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ本國及ヒ同盟國ノ都府城塞又ハ兵器彈藥船艦其他軍事ニ關スル土地家屋物件ヲ敵國ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス

第百三十一條　本國及ヒ同盟國ノ軍情機密ヲ敵國ニ漏泄シ若クハ兵隊屯集ノ要地又ハ道路ノ險夷ヲ敵國ニ通知シタル者ハ無期流刑ニ處ス

敵國ノ間諜ヲ誘導シテ本國管内ニ入ラシメ若クハ之ヲ藏匿シタル者亦同シ

第百三十二條　陸海軍ヨリ委任ヲ受ケ物品ヲ供給シ及ヒ工作ヲ爲ス者交戦ノ際敵國ニ通謀シ又ハ其賂遺ヲ收受シテ命令ニ違背シ軍備ノ缺乏ヲ致シタル時ハ有期流刑ニ處ス

第百三十三條　外國ニ對シ私ニ戦端ヲ開キタル者ハ有期流刑ニ處ス其豫備ニ止ル者ハ一等又ハ二等ヲ減ス

第百三十四條　外國交戦ノ際本國ニ於テ局外中立ヲ布告シタル時其布告ニ違背シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百三十五條　此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三章　靜謐ヲ害スル罪

第一節　兇徒聚衆ノ罪

第百三十六條　兇徒多衆ヲ嘯聚シテ暴動ヲ謀リ官吏ノ説諭ヲ受クルト雖モ仍ホ解散セサル者首魁及ヒ教唆者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス附和隨行シタル者ハ二圓以上五圓以下ノ罰金ニ處ス

第百三十七條　兇徒多衆ヲ嘯聚シテ官廳ニ喧鬧シ官吏ニ強逼シ又ハ村市ヲ騷擾シ其他暴動ヲ爲シタル者首魁及ヒ教唆者ハ重懲役ニ處ス其嘯聚ニ應シ煽動ノ勢ヲ助ケタル者ハ輕懲役ニ處シ其情輕キ者ハ一等ヲ減ス附和隨行シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百三十八條　暴動ノ際人ヲ殺死シ若クハ家屋船舶倉庫等ヲ燒燬シタル時ハ現ニ手ヲ下シ及ヒ火ヲ放ツ者ヲ死刑ニ處ス

首魁及ヒ教唆者情ヲ知テ制セサル者亦同シ

第二節　官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

第百三十九條　官吏其職務ヲ以テ法律規則ヲ執行シ又ハ行政司法官署ノ命令ヲ執行スルニ當リ暴行脅迫ヲ以テ其官吏ニ抗拒シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

暴行脅迫ヲ以テ其官吏ノ爲ス可カラサル事件ヲ行ハシメタル者亦同シ

第百四十條　前條ノ罪ヲ犯シ因テ官吏ヲ毆傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第百四十一條　官吏ノ職務ニ對シ其目前ニ於テ形容若クハ言語ヲ以テ侮辱シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書圖畫又ハ公然ノ演説ヲ以テ侮辱シタル者亦同シ

第三節　囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

十五年第七十三號布告（二千二百廿五）參看

以下ノ罰金ニ處ス

第百四十二條　已決ノ囚徒逃走シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス
若シ獄舍獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シテ逃走シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百四十三條　已決ノ囚徒逃走ノ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論セス其刑期限內再ヒ逃走シタル者ハ再犯ヲ以テ論ス

第百四十四條　未決ノ囚徒入監中逃走シタル者ハ第百四十二條ノ例ニ同シ但原犯ノ罪ヲ判決スル時ニ於テ數罪俱發ノ例ニ照シテ處斷ス

第百四十五條　囚徒三人以上通謀シテ逃走シタル時ハ第百四十二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第百四十六條　囚徒ヲ逃走セシムル爲メ兇器其他ノ器具ヲ給與シ又ハ逃走ノ方法ヲ指示シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス因テ囚徒ノ逃走ヲ致シタル時ハ一等ヲ加フ

第百四十七條　囚徒ヲ劫奪シ又ハ暴行脅迫ヲ以テ囚徒ノ逃走ヲ助ケタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ輕懲役ニ處ス

第百四十八條　囚徒ヲ看守シ又ハ護送スル者囚徒ヲ逃送セシメタル時ハ亦前條ノ例ニ同シ

第百四十九條　前數條ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第百五十條　看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百五十一條　犯罪人又ハ逃走ノ囚徒及ヒ監視ニ付セラレタル者ナルヿヲ知テ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメタル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第百五十二條　他人ノ罪ヲ免カレシメンヿヲ圖リ其罪證ト爲ル可キ物件ヲ隱蔽シタル者ハ十一日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十三條　前二條ノ罪ヲ犯シタル者犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第四節　附加刑ノ執行ヲ遁ルヽ罪

第百五十四條　公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者私ニ其權ヲ行ヒタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十五條　監視ニ付セラレタル者其規則ニ違背シタル時ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第百五十六條　前二條ノ罪ハ其刑期限內再ヒ犯シタル時ニ非サレハ再犯ヲ以テ論スルヿヲ得ス

第五節　私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造シ及ヒ所有スル罪

第百五十七條　官命ヲ受ケス又ハ官許ヲ得スシテ陸海軍ノ用ニ供スル銃礮彈藥其他破裂質ノ物品ヲ製造シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其之ヲ輸入シタル者亦同シ

前項ノ物品ヲ私ニ販賣シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百五十八條　前條ノ罪ヲ犯スト雖モ職工又ハ雇人ニシテ止タ正犯ノ使令ニ供シタル者ハ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百五十九條　前二條ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第百六十條　第百五十七條ニ記載シタル物品ヲ私ニ所有シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百六十一條　第百五十七條ニ記載シタル物品ノ製造ニ供シタル器械ニシテ單ニ其用ニ供ス可キ者ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收ス

第六節　往來通信ヲ妨害スル罪

第百六十二條　道路橋梁河溝港埠ヲ損壞シテ往來ヲ妨害シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百六十二條　僞計又ハ威力ヲ以テ郵便ヲ妨害シ若クハ之ヲ阻止シタル者ハ亦前條ニ同シ

第百六十四條　電信ノ器械柱木ヲ損壞シ又ハ條線ヲ切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ器械柱木條線ヲ損壞シテ電信ノ妨害ヲ爲スト雖モ不通ニ至ラサル時ハ一等ヲ減ス

第百六十五條　瀛車ノ往來ヲ妨害スル爲メ鐵道及ヒ其標識ヲ損壞シ其他危險ナル障礙ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第百六十六條　船舶ノ往來ヲ妨害スル爲メ燈臺浮標其他航海ノ安寧ヲ保護スル標識ヲ損壞シ又ハ詐僞ノ標識ヲ點示シタル者ハ亦前條ニ同シ

第百六十七條　前數條ニ記載シタル罪其事務ニ關スル官吏及ヒ雇人職工自ラ犯シタル時ハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ

第百六十八條　第百六十二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ殺傷シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第百六十九條　第百六十五條第百六十六條ノ罪ヲ犯シ因テ瀛車ヲ顚覆シ又ハ船舶ヲ覆沒シタル時ハ無期徒刑ニ處シ人ヲ死ニ致シタル時ハ死刑ニ處ス

第百七十條　此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第七節　人ノ住所ヲ侵ス罪

第百七十一條　壹間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入リタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ左ニ記載シタル所爲アル時ハ一等ヲ加フ

一門戶牆壁ヲ踰越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開キテ入リタル時

二兇器其他犯罪ノ用ニ供ス可キ物品ヲ携帶シテ入リタル時
三暴行ヲ爲シテ入リタル時
四二人以上ニテ入リタル時

第百七十二條　夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅又ハ人ノ看守シタル建造物ニ入リタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス
若シ前條ニ記載シタル加重ス可キ所爲アル時ハ一等ヲ加フ

第百七十三條　故ナク皇居禁苑離宮行在所及ヒ皇陵内ニ入リタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第八節　官ノ封印ヲ破棄スル罪

第百七十四條　官署ノ處分ニ因リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破棄シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス
若シ看守者自ラ犯シタル時ハ一等ヲ加フ

第百七十五條　官ノ封印ヲ破棄シテ其物件ヲ盜取シ又ハ毀壞シタル者ハ盜罪及ヒ毀壞ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第百七十六條　看守者其懈怠ニ因リ封印ヲ破棄シ又ハ其物件ヲ盜取毀壞スル犯人アルヿヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九節　公務ヲ行フヿヲ拒ム罪

第百七十七條　陸海軍ノ將校タル者出兵ヲ要求スル權アル官署ヨリ其要求ヲ受ケ故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百七十八條　陸海軍ノ徵兵ニ編入セラル可キ者身體ヲ毀傷シテ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ以テ免役ヲ圖リタル時ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
若シ他人ニ囑託シ其氏名ヲ詐稱シ代テ徵募ニ應セシメタル者亦同シ其囑託ヲ受ケテ徵募ニ應シタル者ハ第二百三十一條ノ例ニ照シテ處斷ス

第百七十九條　醫師化學家其他職業ニ因リ官署ヨリ解剖分析又ハ鑑定ヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第百八十條　裁判所ヨリ證人トシテ證據ヲ陳述スルヿヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ亦前條ニ同シ

第百八十一條　傳染病流行ノ際又ハ傳染病ノ疑アル船舶入港スルニ當リ醫師其病患ヲ檢査シ又ハ消滅ノ方法ヲ陳述スルヿヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
獸類傳染病流行ノ際獸醫此條ノ罪ヲ犯シタル時ハ一等ヲ減ス

第四章　信用ヲ害スル罪

第一節　貨幣ヲ僞造スル罪

第百八十二條　內國通用ノ金銀貨及ヒ紙幣ヲ僞造シテ行使シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第百八十三條　內國ニ於テ通用スル外國ノ金銀貨ヲ僞造シテ行使シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百八十四條　官許ヲ得テ發行スル銀行ノ紙幣ヲ僞造シ若クハ變造シテ行使シタル者ハ內外國ノ區別ニ從ヒ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第百八十五條　內國通用ノ銅貨ヲ僞造シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

若シ變造シテ行使シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百八十六條　前數條ニ記載シタル貨幣ノ僞造變造已ニ成テ未タ行使セサル者ハ各本刑ニ照シ一等ヲ減シ其未タ成ラサル者ハ二等ヲ減ス

若シ僞造ノ器械ヲ豫備シテ未タ着手セサル者ハ各三等ヲ減ス

第百八十七條　貨幣ヲ僞造變造スルノ情ヲ知テ雇ヲ受ケタル職工ハ前數條ニ記載シタル犯人ノ受ク可キ刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ職工ノ補助ヲ爲シテ雜役ニ供シタル者ハ職工ノ刑ニ照シ一等又ハ二等ヲ減ス

第百八十八條　貨幣ヲ僞造變造スルノ情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者ハ僞造變造ノ各本刑ニ照シ二等ヲ減ス

第百八十九條　僞造變造ノ貨幣ヲ內國ニ輸入シタル者ハ僞造變造ノ刑ニ同シ

第百九十條　僞造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ取受シ之ヲ行使シタル者ハ僞造變造シテ行使シタル者ノ刑ニ照シ各二等ヲ減ス

其未タ行使セサル者ハ各三等ヲ減ス

第百九十一條　前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第百九十二條　貨幣ヲ僞造變造シ及ヒ輸入取受シタル者未タ行使セサル前ニ於テ官ニ自首シタル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

若シ職工雜役及ヒ房屋ヲ給與シタル者未タ行使セサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第百九十三條　貨幣ヲ取受スルノ後ニ於テ僞造又ハ變造ナルヿヲ知リ之ヲ行使シタル者ハ其價額二倍ノ罰金ニ處ス但其罰金ハ二圓以下ニ降スヿヲ得ス

第二節　官印ヲ僞造スル罪

第百九十四條　御璽國璽ヲ僞造シ又ハ其僞璽ヲ使用シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第百九十五條　各官署ノ印ヲ僞造シ又ハ其僞印ヲ使用シタル者ハ重懲役ニ處ス

第百九十六條　產物商品等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ僞造シ又ハ其僞印ヲ使用シタル者ハ輕懲役ニ處ス

書籍什物等ニ押用スル官ノ記號印章ヲ僞造シ又ハ其僞印ヲ使用シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百九十七條　御璽國璽官印記號印章ノ影獻ヲ盜用シタル者ハ前數條ニ記載シタル僞造ノ

刑ニ照シ各一等ヲ減ス

若シ監守者自ラ犯シタル時ハ僞造ノ刑ニ同シ

第百九十八條　官ヨリ發行スル各種ノ印紙界紙及ヒ郵便切手ヲ僞造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第百九十九條　已ニ貼用シタル各種ノ印紙及ヒ郵便切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百條　此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百一條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節　官ノ文書ヲ僞造スル罪

第二百二條　詔書ヲ僞造シ又ハ增減變換シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

其詔書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百三條　官ノ文書ヲ僞造シ又ハ增減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其官ノ文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百四條　公債証書地券其他官吏ノ公証シタル文書ヲ僞造シ又ハ增減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

若シ無記名ノ公債証書ニ係ル時ハ一等ヲ加フ

第二百五條　官吏其管掌ニ係ル文書ヲ僞造シ又ハ增減變換シテ行使シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

其文書ヲ毀棄シタル者亦同シ

第二百六條　官ノ文書ヲ僞造スルニ因テ官印ヲ僞造シ又ハ盜用シタル者ハ僞造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百七條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四節　私印私書ヲ僞造スル罪

第二百八條　他人ノ私印ヲ僞造シテ使用シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ他人ノ印影ヲ盜用シタル者ハ一等ヲ減ス

第二百九條　爲替手形其他証書ヲ以テ賣買ス可キ證書若クハ金額ト交換ス可キ約定手形ヲ僞造シ又ハ增減變換シテ行使シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其手形證書ニ詐僞ノ裏書ヲ爲シテ行使シタル者亦同シ

第二百十條　賣買貸借贈遺交換其他權利義務ニ關スル證書ヲ僞造シ又ハ增減變換シテ行使シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其餘ノ私書ヲ僞造シ又ハ增減變換シテ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ

二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百十一條　此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百十二條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第五節　免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ僞造スル罪

第二百十三條　官ノ免狀又ハ鑑札ヲ僞造シテ行使シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官印ヲ僞造シ又ハ盜用シタル時ハ僞造官印ノ各本條ニ照シテ處斷ス

第二百十四條　屬籍身分氏名ヲ詐稱シ其他詐僞ノ所爲ヲ以テ免狀鑑札ヲ受ケタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

官吏情ヲ知テ其免狀鑑札ヲ下付シタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十五條　公務ヲ免カル可キ爲メ醫師ノ氏名ヲ用ヒ疾病ノ證書ヲ僞造シテ行使シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

醫師囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十六條　陸海軍ノ徵兵ヲ免カル可キ爲メ疾病ノ證書ヲ僞造シテ行使シタル者及ヒ囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル醫師ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百十七條　免狀鑑札及ヒ疾病ノ證書ヲ增減變換シテ行使シタル者ハ亦僞造ノ刑ニ同シ

第六節　僞證ノ罪

第二百十八條　刑事ニ關スル證人トシテ裁判所ニ呼出サレタル者被告人ヲ曲庇スル爲メ事ヲ掩蔽シテ僞證ヲ爲シタル時ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一重罪ヲ曲庇スル爲メ僞證シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二輕罪ヲ曲庇スル爲メ僞證シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三違警罪ヲ曲庇スル爲メ僞證シタル者ハ違警罪ノ本條ニ依テ處斷ス

第二百十九條　僞證ノ爲メ被告人正當ノ刑ヲ免カレタル時ハ僞證者ノ刑前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百二十條　被告人ヲ陷害スル爲メ僞證ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ照シテ處斷ス

一重罪ニ陷ラシムル爲メ僞證シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二輕罪ニ陷ラシムル爲メ僞證シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

三違警罪ニ陷ラシムル爲メ僞證シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十一條　偽證ノ爲メ被告人刑ニ處セラレタル後ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ偽證者ヲ其刑ニ反坐ス若シ反坐ノ刑前條ニ記載シタル偽證ノ刑ヨリ輕キ時ハ前條ノ例ニ照シテ處斷ス

其刑期限内ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ既ニ經過シタル日數ニ照シテ反坐ノ刑期ヲ減スルヿヲ得但減シテ前條偽證ノ刑ヨリ降スヿヲ得ス

第二百二十二條　偽證ノ爲メ被告人死刑ニ處セラレタル時ハ反坐ノ刑一等ヲ減ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ二等ヲ減ス

若シ被告人ヲ死ニ陷ルヽノ目的ヲ以テ偽證ヲ爲シタル時ハ死刑ニ反坐ス其未タ刑ヲ執行セサル前ニ於テ發覺シタル時ハ一等ヲ減ス

第二百二十三條　民事商事又ハ行政裁判ニ關シテ偽證ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百二十四條　鑑定又ハ通事ノ爲メ裁判所ニ呼出サレタル者詐偽ノ陳述ヲ爲シタル時ハ前數條ニ記載シタル偽證ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百二十五條　賄賂其他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽證又ハ詐偽ノ鑑定通事ヲ爲サシメタル者ハ亦偽證ノ例ニ同シ

第二百二十六條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者其事件ノ裁判宣告ニ至ラサル前ニ於テ自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第七節　度量衡ヲ偽造スル罪

八年第百三十五號公選（千八百五十六）九年第十七號布告（千八百五十七）參看

第二百二十七條　度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シテ販賣シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但官ノ記號印章ヲ偽造シ又ハ流用シタル時ハ偽造官印ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第二百二十八條　偽造變造ノ情ヲ知テ其度量衡ヲ販賣シタル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ減ス

第二百二十九條　商賈農工定規ヲ增減シタル度量衡ヲ所有シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ其度量衡ヲ使用シテ利ヲ得タル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第二百三十條　人ノ囑託ヲ受ケテ度量衡ヲ偽造シ又ハ變造シタル者ハ其囑託シタル犯人ノ刑ニ照シテ各一等ヲ減ス

第八節　身分ヲ詐稱スル罪

第二百三十一條　官署ニ對シ文書又ハ言語ヲ以テ其屬籍身分氏名年齡職業ヲ詐稱シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十二條　官職位階ヲ詐稱シ又ハ官ノ服飾徽章若クハ内外國ノ勳章ヲ僭用シタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九節　公選ノ投票ヲ偽造スル罪

第二百三十三條　公選ノ投票ヲ偽造シ又ハ其數ヲ增減シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十四條　賄賂ヲ以テ投票ヲ爲サシメ又ハ賄賂ヲ受ケテ投票ヲ爲シタル者ハ二月以

上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十五條　投票ヲ檢査シ及ヒ其數ヲ計算スル者其投票ヲ偽造シ又ハ增減シタル時ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百三十六條　調書ヲ造リ投票ノ結局ヲ報告スル者其數ヲ增減シ其他詐偽ノ所爲アル時ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五章　健康ヲ害スル罪

第一節　阿片烟ニ關スル罪

第二百三十七條　阿片烟ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第二百三十八條　阿片烟ヲ吸食スルノ器具ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第二百三十九條　稅關官吏情ヲ知テ阿片烟及ヒ其器具ヲ輸入セシメタル者ハ前二條ノ刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百四十條　阿片烟ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖ル者ハ輕懲役ニ處ス

人ヲ引誘シテ阿片烟ヲ吸食セシメタル者亦同シ

第二百四十一條　阿片烟ヲ吸食シタル者ハ二年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百四十二條　阿片烟及ヒ吸食ノ器具ヲ所有シ又ハ受寄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二節　飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪

第二百四十三條　人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルヿ能ハサルニ至ラシメタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十四條　人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ用ヒテ水質ヲ變シ又ハ腐敗セシメタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十五條　前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三節　傳染病豫防規則ニ關スル罪

第二百四十六條　傳染病豫防ノ爲メ設ケタル規則ニ違背シテ入港ノ船舶ヨリ上陸シ又ハ物品ヲ陸地ニ運搬シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十七條　船長自ラ前條ノ罪ヲ犯シ又ハ人ノ犯スヿヲ知テ制セサル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ加フ

第二百四十八條　傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ流行地方ヨリ他處ニ出タル者ハ十五日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十九條　獸類ノ傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ獸類ヲ他處ニ出シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四節　危害品及ヒ健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪

第二百五十條　官許ヲ得スシテ危害ヲ生ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ二十圓以上

二百圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ健康ヲ害ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十一條　官許ヲ得テ前條ニ記載シタル製造所ヲ創設スト雖モ危害ヲ豫防シ健康ヲ保護スル規則ニ違背シタル者ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第二百五十二條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第五節　健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪

第二百五十三條　人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ飲食物ニ混和シテ販賣シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十四條　規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十五條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六節　私ニ醫業ヲ爲ス罪

第二百五十六條　官許ヲ得スシテ醫業ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十七條　前條ノ犯人治療ノ方法ヲ誤リ因テ人ヲ死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六章　風俗ヲ害スル罪

第二百五十八條　公然猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十九條　風俗ヲ害スル冊子圖畫其他猥褻ノ物品ヲ公然陳列シ又ハ販賣シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百六十條　賭場ヲ開張シテ利ヲ圖リ又ハ博徒ヲ招結シタル者ハ三月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十一條　財物ヲ賭シテ現ニ博奕ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者亦同シ但飲食物ヲ賭スル者ハ此限ニアラス

賭博ノ器具財物其現場ニ在ル者ハ之ヲ沒收ス

第二百六十二條　財物ヲ醵集シ富籤ヲ以テ利益ヲ僥倖スルノ業ヲ興行シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十三條　神祠佛堂墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ所爲アル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ誹謗又ハ禮拜ヲ妨害シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七章　死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

第二百六十四條　埋葬ス可キ死屍ヲ毀棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十五條　墳墓ヲ發掘シテ棺槨又ハ死屍ヲ見ハシタル者ハ二月以上三年以下ノ重禁

錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ死屍ヲ毀棄シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十六條　此章ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第八章　商業及ヒ農工ノ業ヲ妨害スル罪

第二百六十七條　僞計又ハ威力ヲ以テ穀類其他衆人ノ需用ニ缺ク可カラサル食用物ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス」

前項ニ記載シタル以外ノ物品ノ賣買ヲ妨害シタル者ハ一等ヲ減ス

第二百六十八條　僞計又ハ威力ヲ以テ糶賣又ハ入札ヲ妨害シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十九條　僞計又ハ威力ヲ以テ農工ノ業ヲ妨害シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百七十條　農工ノ雇人其雇賃ヲ增サシメ又ハ農工業ノ景況ヲ變セシムル爲メ雇主及ヒ他ノ雇人ニ對シ僞計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十一條　雇主其雇賃ヲ減シ又ハ農工業ノ景況ヲ變スル爲メ雇人及ヒ他ノ雇主ニ對シ僞計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者ハ亦前條ニ同シ

第二百七十二條　虛僞ノ風說ヲ流布シテ穀類其他衆人需用物品ノ價直ヲ昂低セシメタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九章　官吏瀆職ノ罪

第一節　官吏公益ヲ害スル罪

第二百七十三條　官吏其管掌ニ係ル法律規則ヲ公布施行セス又ハ他ノ官吏ノ公布施行ヲ妨害シタル者ハ二月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十四條　兵隊ヲ要求シ及ヒ之ヲ使用スル權アル官吏地方ノ騷擾其他兵權ヲ以テ鎭撫ス可キ時ニ當リ其處分ヲ爲サヽル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十五條　官吏規則ニ違背シテ商業ヲ爲シタル者ハ二十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二節　官吏人民ニ對スル罪

第二百七十六條　官吏擅ニ威權ヲ用ヒ人ヲシテ其權利ナキ事ヲ行ハシメ又ハ其爲ス可キ權利ヲ妨害シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十七條　人ノ身體財產ヲ妨害スルノ犯人アルニ當リ豫審判事檢事警察官吏其報告ヲ受ケテ速ニ保護ノ處分ヲ爲サヽル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百七十八條　逮捕官吏法律ニ定メタル程式規則ヲ遵守セスシテ人ヲ逮捕シ又ハ不正ニ

十五年司丁第四拾壹號達（二千二百廿二）同年第七拾三號布告（二千二百廿三）參看

人ヲ監禁シタル者ハ十五日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第二百七十九條　司獄官吏程式規則ヲ遵守セスシテ囚人ヲ監禁シ若クハ囚人ヲ出獄セシム可キノ時ニ至リ之ヲ放免セサル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十條　前二條ニ記載シタル官吏又ハ護送者囚人ニ對シ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ囚人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十一條　水火震災ノ際官吏囚人ノ監禁ヲ解クヿヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加フ

第二百八十二條　裁判官檢事及ヒ警察官吏被告人ニ對シ罪狀ヲ陳述セシムル爲メ暴行ヲ加ヘ又ハ陵虐ノ所爲アル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ被告人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十三條　裁判官檢察官故ナクシテ刑事ノ訴ヲ受理セス又ハ遷延シテ審理セサル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其民事ノ訴ニ係ル者亦同シ

第二百八十四條　官吏人ノ囑託ヲ受ケ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ處分ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十五條　裁判官民事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ裁判ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

第二百八十六條　裁判官檢事警察官吏刑事ノ裁判ニ關シテ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ被告人ヲ曲庇シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其被告人ヲ陷害シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス若シ枉斷シタル所ノ刑此刑ヨリ重キ時ハ第二百二十一條第二百二十二條ノ例ニ照シテ反坐ス

第二百八十七條　裁判官檢事警察官吏賄賂ヲ收受聽許セスト雖モ情ニ徇カヒ又ハ怨ヲ挾サミ被告人ヲ曲庇陷害シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十八條　前數條ニ記載シタル賄賂已ニ收受シタル者ハ之ヲ沒收シ費用シタル者ハ其價ヲ追徵ス

第三節　官吏財產ニ對スル罪

第二百八十九條　官吏自ラ監守スル所ノ金穀物件ヲ竊取シタル者ハ輕懲役ニ處ス

因テ官ノ文書簿冊ヲ增減變換シ又ハ毀棄シタル時ハ第二百五條ノ例ニ照シ處斷ス

第二百九十條　租稅其他諸般ノ入額ヲ徵收スル官吏正數外ノ金穀ヲ徵收シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百九十一條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三編　身體財產ニ對スル重罪輕罪

第一章　身體ニ對スル罪

第一節　謀殺故殺ノ罪

第二百九十二條　豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑ニ處ス

第二百九十三條　毒物ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以テ論シ死刑ニ處ス

第二百九十四條　故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ無期徒刑ニ處ス

第二百九十五條　支解折割其他慘刻ノ所爲ヲ以テ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十六條　重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カルヽ爲メ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十七條　人ヲ殺スノ意ニ出デ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ死ニ致シタル者ハ故殺ヲ以テ論シ其豫メ謀ル者ハ謀殺ヲ以テ論ス

第二百九十八條　謀殺故殺ヲ行ヒ誤テ他人ヲ殺シタル者ハ仍ホ謀故殺ヲ以テ論ス

第二節　毆打創傷ノ罪

第二百九十九條　人ヲ毆打創傷シ因テ死ニ致シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百條　人ヲ毆打創傷シ其兩目ヲ瞎シ兩耳ヲ聾シ又ハ兩肢ヲ折リ及ヒ舌ヲ斷チ陰陽ヲ毀敗シ若クハ知覺精神ヲ喪失セシメ篤疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ又ハ一肢ヲ折リ其他身體ヲ殘廢シ癈疾ニ致シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百一條　人ヲ毆打創傷シ二十日以上ノ時間疾病ニ罹リ又ハ職業ヲ營ムヿ能ハサルニ至ラシメタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

其疾病休業ノ時間二十日ニ至ラサル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

疾病休業ニ至ラスト雖モ身體ニ創傷ヲ成シタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百二條　豫メ謀テ人ヲ毆打創傷シ休業癈篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ前數條ニ記載シタル刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第三百三條　重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ其罪ヲ免カルヽ爲メ人ヲ毆打創傷シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百四條　毆打ニ因リ誤テ他人ヲ創傷シタル者ハ仍ホ毆打創傷ノ本刑ヲ科ス

第三百五條　二人以上共ニ人ヲ毆打創傷シタル者ハ現ニ手ヲ下シ傷ヲ成スノ輕重ニ從テ各自ニ其刑ヲ科ス若シ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ルヿ能ハサル時ハ其重傷ノ刑ニ照シ一等ヲ減ス但教唆者ハ減等ノ限ニ在ラス

第三百六條　二人以上共ニ人ヲ毆打スルニ當リ自ラ人ヲ傷セスト雖モ幫助シテ傷ヲ成サシ

メタル者ハ現ニ傷ヲ成シタル者ノ刑ニ一等ヲ減ス

第三百七條　健康ヲ害ス可キ物品ヲ施用シテ人ヲ疾苦セシメタル者ハ豫メ謀テ毆打創傷スルノ例ニ照シテ處斷ス

第三百八條　人ヲ殺スノ意ニ非スト雖モ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ因テ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ヲ以テ論ス

第三節　殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪

第三百九條　自己ノ身體ニ暴行ヲ受クルニ因リ直チニ怒ヲ發シ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但シ不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十條　毆打シテ互ニ創傷シ其手ヲ下スノ先後ヲ知ルヿ能ハサル者ハ各其罪ヲ宥恕スルヿヲ得

第三百十一條　本夫其妻ノ姦通ヲ覺知シ姦所ニ於テ直チニ姦夫又ハ姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者此限ニ在ラス

第三百十二條　晝間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入リ若クハ門戶牆壁ヲ踰越損壞セントスル者ヲ防止スル爲メ之ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス

第三百十三條　前數條ニ記載シタル宥恕ス可キ罪ハ各本刑ニ照シ二等又ハ三等ヲ減ス

第三百十四條　身體生命ヲ正當ニ防衛シ已ムヿヲ得サルニ出テ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス其罪ヲ論セス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十五條　左ノ諸件ニ於テ已ムヿヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ論セス

一財産ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スルニ出タル時

二盜犯ヲ防止シ又ハ盜賊ヲ取還スルニ出タル時

三夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入リ若クハ門戶牆壁ヲ踰越損壞スル者ヲ防止スルニ出タル時

第三百十六條　身體財産ヲ防衛スルニ出ルト雖モ已ムヿヲ得サルニ非シテ害ヲ暴行人ニ加ヘ又ハ危害已ニ去リタル後ニ於テ勢ニ乘シ仍ホ害ヲ暴行人ニ加ヘタル者ハ不論罪ノ限ニ在ラス但情狀ニ因リ第三百十三條ノ例ニ照シ其罪ヲ宥恕スルヿヲ得

第四節　過失殺傷ノ罪

第三百十七條　疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セス過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十八條　過失ニ因テ人ヲ創傷シ癈篤疾ニ致シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十九條　過失ニ因テ人ヲ創傷シ疾病休業ニ至ラシメタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五節　自殺ニ關スル罪

第三百二十條　人ヲ教唆シテ自殺セシメ又ハ囑託ヲ受ケテ自殺人ノ爲メニ手ヲ下シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其他自殺ノ補助

ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百二十一條　自己ノ利ヲ圖リ人ヲ教唆シテ自殺セシメタル者ハ重懲役ニ處ス

第六節　擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪

第三百二十二條　擅ニ人ヲ逮捕シ又ハ私家ニ監禁シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第三百二十三條　擅ニ人ヲ監禁制縛シテ毆打拷責シ又ハ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百二十四條　前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三百二十五條　擅ニ人ヲ監禁シ水火震災ノ際其監禁ヲ解クヿヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第七節　脅迫ノ罪

第三百二十六條　人ヲ殺サントシ脅迫シ又ハ人ノ住居シタル家屋ニ放火セントシ脅迫シタル者一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

毆打創傷其他暴行ヲ加ヘントシ脅迫シ又ハ財産ニ放火シ及ヒ毀壞劫掠セントシ脅迫シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百二十七條　兇器ヲ持シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百二十八條　親屬ニ害ヲ加フ可キ事ヲ以テ脅迫シタル者ハ亦前二條ノ例ニ同シ

第三百二十九條　此節ニ記載シタル罪ハ脅迫ヲ受ケタル者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第八節　墮胎ノ罪

第三百三十條　懷胎ノ婦女藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十一條　藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎セシメタル者ハ亦前條ニ同シ因テ婦女ヲ死ニ致シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十二條　醫師穩婆又ハ藥商前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百三十三條　懷胎ノ婦女ヲ威逼シ又ハ誑騙シテ墮胎セシメタル者ハ一年以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十四條　懷胎ノ婦女ナルヿヲ知テ毆打其他暴行ヲ加ヘ因テ墮胎ニ至ラシメタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス其墮胎セシムルノ意ニ出タル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百三十五條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ癡篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第九節　幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪

第三百三十六條　八歳ニ滿サル幼者ヲ遺棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

自ヲ生活スルヿ能ハサル老者疾病者ヲ遺棄シタル者亦同シ

第三百三十七條　八歳ニ滿サル幼者又ハ老疾者ヲ寥闃無人ノ地ニ遺棄シタル者ハ四月以上

四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十八條　給料ヲ得テ人ノ寄託ヲ受ケ保養スヘキ者前二條ノ罪ヲ犯シタル時ハ各一等ヲ加フ

第三百三十九條　幼者老疾者ヲ遺棄シ因テ癡疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ重懲役ニ處シ死ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第三百四十條　自己ノ所有地又ハ看守ス可キ地内ニ遺棄セラレタル幼者老疾者アルヿヲ知テ之ヲ扶助セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ疾病ニ罹リ昏倒スル者アルヿヲ知テ扶助セス又ハ申告セサル者亦同シ

第十節　幼者ヲ略取誘拐スル罪

第三百四十一條　十二歲ニ滿サル幼者ヲ略取シ又ハ誘拐シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十二條　十二歲以上二十歲ニ滿サル幼者ヲ略取シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其誘拐シテ自ラ藏匿シ若クハ他人ニ交付シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十三條　略取誘拐シタル幼者ナルヿヲ知テ自己ノ家屬僕婢ト爲シ又ハ其他ノ名稱ヲ以テ之ヲ收受シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第三百四十四條　前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但略取誘拐セラレタル幼者式ニ從テ婚姻ヲ爲シタル時ハ告訴ノ效ナシ

第三百四十五條　廿歲ニ滿サル幼者ヲ略取誘拐シテ外國人ニ交付シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第十一節　猥褻姦淫重婚ノ罪

第三百四十六條　十二歲ニ滿サル男女ニ對シ猥褻ノ所行ヲ爲シ又ハ十二歲以上ノ男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十七條　十二歲ニ滿サル男女ニ對シ暴行脅迫ヲ以テ猥褻ノ所行ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百四十八條　十二歲以上ノ婦女ヲ强姦シタル者ハ輕懲役ニ處ス

藥酒等ヲ用ヒ人ヲ昏睡セシメ又ハ精神ヲ錯亂セシメテ姦淫シタル者ハ强姦ヲ以テ論ス

第三百四十九條　十二歲ニ滿サル幼女ヲ姦淫シタル者ハ輕懲役ニ處ス若シ强姦シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百五十條　前數條ニ記載シタル罪ハ被害者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第三百五十一條　前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス但强姦ニ因テ癡篤疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百五十二條　十六歲ニ滿サル男女ノ淫行ヲ勸誘シテ媒合シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十三條　有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其相姦スル者亦同シ

此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ告訴ノ效ナシ

第三百五十四條　配偶者アル者重ネテ婚姻ヲ爲シタル時ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十二節　誣告及ヒ誹毀ノ罪

第三百五十五條　不實ノ事ヲ以テ人ヲ誣告シタル者ハ第二百二十條ニ記載シタル僞證ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百五十六條　誣告ヲ爲スト雖モ被告人ノ推問ヲ始メサル前ニ於テ誣告者自首シタル時ハ本刑ヲ免ス

第三百五十七條　誣告ニ因テ被告人刑ニ處セラレタル時ハ第二百二十一條第二百二十二條ニ記載シタル例ニ照シテ處斷ス

第三百五十八條　惡事醜行ヲ摘發シテ人ヲ誹毀シタル者ハ事實ノ有無ヲ問ハス左ノ例ニ照シテ處斷ス

一公然ノ演說ヲ以テ人ヲ誹毀シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二書類畫圖ヲ公布シ又ハ雜劇偶像ヲ作爲シテ人ヲ誹毀シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百五十九條　死者ヲ誹毀シタル者ハ誣罔ニ出タルニ非サレハ前條ノ例ニ照シテ處斷スルヿヲ得ス

第三百六十條　醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人若クハ神官僧侶其身分職業ニ於テ委託ヲ受ケタル事ニ因リ知得タル陰私ヲ漏告シタル者ハ誹毀ヲ以テ論シ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但裁判所ノ呼出ヲ受ケテ事實ヲ陳述スル者ハ此限ニ在ラス

第三百六十一條　此節ニ記載シタル誹毀ノ罪ハ被害者又ハ死者ノ親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第十三節　祖父母父母ニ對スル罪

第三百六十二條　子孫其祖父母父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

其自殺ニ關スル罪ハ凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ

第三百六十三條　子孫其祖父母父母ニ對シ毆打創傷ノ罪其他監禁脅迫遺棄誣告誹毀ノ罪ヲ犯シタル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ但發疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百六十四條　子孫其祖父母父母ニ對シ衣食ヲ供給セス其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百六十五條　祖父母父母ニ對シタル殺傷ノ罪ハ特別ノ宥恕及ヒ不論罪ノ例ヲ用フルヿ

ヲ得ス但其犯ス時知ラサル者ハ此限ニ在ラス

第二章　財産ニ對スル罪

第一節　竊盜ノ罪

第三百六十六條　人ノ所有物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十七條　水火震災其他ノ變ニ乘シテ竊盜ヲ犯シタル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百六十八條　門戸牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開キ邸宅倉庫ニ入リ竊盜ヲ犯シタル者ハ亦前條ニ同シ

第三百六十九條　二人以上共ニ前三條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百七十條　兇器ヲ携帶シテ人ノ住居シタル邸宅ニ入リ竊盜ヲ犯シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百七十一條　自己ノ所有物ト雖モ典物トシテ他人ニ交付シ又ハ官署ノ命令ニ因リ他人ノ看守シタル時之ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第三百七十二條　田野ニ於テ穀類菜菓其他ノ産物ヲ竊取シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百七十三條　山林ニ於テ竹木礦物其他ノ産物ヲ竊取シ又ハ川澤池沼湖海ニ於テ人ノ生養シ若クハ營業ニ關スル産物ヲ竊取シタル者ハ又前條ニ同シ

第三百七十四條　牧場ニ於テ牧畜ノ獸類ヲ竊取シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百七十五條　此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百七十六條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百七十七條　祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹互ニ其財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論スルノ限ニ在ラス

若シ他人共ニ犯シテ財物ヲ分チタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

第二節　強盜ノ罪

第三百七十八條　人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加ヘテ財物ヲ強取シタル者ハ強盜ノ罪ト爲シ輕懲役ニ處ス

第三百七十九條　強盜左ニ記載シタル情狀アル者ハ一個毎ニ一等ヲ加フ

一　二人以上共ニ犯シタル時

二　兇器ヲ携帶シテ犯シタル時

第三百八十條　強盜人ヲ傷シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百八十一條　強盜婦女ヲ強姦シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第三百八十二條　竊盜財ヲ得テ其取還ヲ拒ク爲メ臨時暴行脅迫ヲ爲シタル者ハ強盜ヲ以テ

論ス

第三百八十三條　藥酒等ヲ用ヒ人ヲ醉迷セシメ其財物ヲ盜取シタル者ハ強盜ヲ以テ論シ輕懲役ニ處ス

第三百八十四條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減輕ニ因テ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節　遺失物埋藏物ニ關スル罪

第三百八十五條　遺失及ヒ漂流ノ物品ヲ拾得テ隱匿シ所有主ニ還付セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百八十六條　他人ノ所有地內ニ於テ埋藏ノ物品ヲ堀得テ隱匿シタル者ハ亦タ前條ニ同シ

第三百八十七條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ揭ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第四節　家資分散ニ關スル罪

第三百八十八條　家資分散ノ際其財產ヲ藏匿脫漏シ又ハ虛僞ノ負債ヲ增加シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

情ヲ知テ虛僞ノ契約ヲ承諾シ若クハ其媒介ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百八十九條　家資分散ノ際牒簿ノ類ヲ藏匿毀棄シ若クハ分散決定ノ後債主中ノ一人又ハ數人ニ其負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第五節　詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

第三百九十條　人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シタル者ハ詐欺取財ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ官私ノ文書ヲ僞造シ又ハ增減變換シタル者ハ僞造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三百九十一條　幼者ノ知慮淺薄又ハ人ノ精神錯亂シタルニ乘シテ其財物若クハ證書類ヲ授與セシメタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十二條　物件ヲ販賣シ又ハ交換スルニ當リ其物質ヲ變シ若クハ分量ヲ僞テ人ニ交付シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十三條　他人ノ動產不動產ヲ冒認シテ販賣交換シ又ハ抵當典物ト爲シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

自己ノ不動產ト雖モ已ニ抵當典物ト爲シタルヲ欺隱シテ他人ニ賣與シ又ハ重子テ抵當典物ト爲シタル者亦同シ

第三百九十四條　前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三百九十五條　受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金額物件ヲ費消シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス若シ騙取拐帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

第三百九十六條　自己ノ所有ニ係ルト雖モ官署ヨリ差押ヘタル物件ヲ藏匿脫漏シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス但家資分散ノ際此罪ヲ犯シタル者ハ第三百八十八條ノ

例ニ照シテ處斷ス

第三百九十七條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百九十八條　此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第六節　贓物ニ關スル罪

第三百九十九條　强竊盜ノ贓物ナルヿヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百條　前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百一條　詐欺取財其他ノ犯罪ニ關シタル物件ナルヿヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七節　放火失火ノ罪

第四百二條　火ヲ放テ人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

第四百三條　火ヲ放テ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ燒燬シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第四百四條　火ヲ放テ廢屋及柴草肥料等ヲ貯フル屋舍ヲ燒燬シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百五條　火ヲ放テ人ヲ乘載シタル船舶瀛車ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

其人ヲ乘載セサル船舶瀛車ニ係ル時ハ重懲役ニ處ス

第四百六條　火ヲ放テ山林ノ竹木田野ノ穀麥又ハ露積シタル柴草竹木其他ノ物件ヲ燒燬シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第四百七條　火ヲ放テ自己ノ家屋ヲ燒燬シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百八條　放火ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第四百九條　火ヲ失シテ人ノ家屋財産ヲ燒燬シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十條　火藥其他激發ス可キ物品又ハ煤氣井蒸氣罐ヲ破裂セシメテ人ノ家屋財産ヲ毀壞シタル者ハ其故意ニ出ルト過失トヲ分チ放火失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第八節　決水ノ罪

第四百十一條　堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ毀壞シテ人ノ住居シタル家屋ヲ漂失シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

若シ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ漂失シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百十二條　堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シテ田圃礦坑牧場等ヲ荒廢シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第四百十三條　他人ノ便益ヲ損シ又ハ自己ノ便益ヲ圖ル爲メ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シ其他水利ヲ妨害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百十四條　過失ニ因テ水害ヲ起シタル者ハ失火ノ例ニ照シテ處斷ス

第九節　船舶ヲ覆沒スル罪

第四百十五條　衝突其他ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載シタル船舶ヲ覆沒シタル者ハ死刑ニ處ス但船中死亡ナキ時ハ無期徒刑ニ處ス

第四百十六條　前條ノ所爲ヲ以テ人ヲ乘載セサル船舶ヲ覆沒シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第十節　家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

第四百十七條　人ノ家屋其他ノ建造物ヲ毀壞シタル者ハ一月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第四百十八條　人ノ家屋ニ屬スル牆壁及ヒ園池ノ裝飾又ハ田圃ノ樊圍牧場ノ柵欄ヲ毀壞シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百十九條　人ノ稼穡竹木其他需用ノ植物ヲ毀損シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百二十條　土地ノ經界ヲ表シタル物件ヲ毀壞シ又ハ移轉シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百二十一條　人ノ器物ヲ毀棄シタル者ハ十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四百二十二條　人ノ牛馬ヲ殺シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四百二十三條　前條ニ記載シタル以外ノ家畜ヲ殺シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス但被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第四百二十四條　人ノ權利義務ニ關スル証書類ヲ毀棄滅失シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四編　違輕罪

第四百二十五條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

一規則ヲ遵守セスシテ火藥其他破裂ス可キ物品ヲ市街ニ運搬シタル者

二規則ヲ遵守セスシテ火藥其他破裂ス可キ物品又ハ自ラ火ヲ發ス可キ物品ヲ貯藏シタル者

三官許ヲ得スシテ烟火ヲ製造シ又ハ販賣シタル者

四人家稠密ノ場所ニ於テ濫リニ烟火其他火器ヲ玩ヒタル者

五蒸氣器械其他烟筒火竈ヲ建造修理シ及ヒ掃除スル規則ニ違背シタル者

六官署ノ督促ヲ受ケテ崩壞セントスル家屋牆壁ノ修理ヲ爲サヽル者

七官許ヲ得スシテ死屍ヲ解剖シタル者

八自己ノ所有地内ニ死屍アルヿヲ知テ官署ニ申告セス又ハ他所ニ移シタル者

九人ヲ毆打シテ創傷疾病ニ至ラサル者

十密ニ賣淫ヲ爲シ又ハ其媒合容止ヲ爲シタル者

十一人ノ住居セル家屋内ニ潛伏シタル者

十二定リタル住居ナク平常營生ノ產業ナクシテ諸方ニ徘徊スル者

十三官許ノ墓地外ニ於テ私ニ埋葬シタル者

十四違輕罪ノ犯人ヲ曲庇スル爲メ僞證シタル者但被告人僞證ノ爲メ刑ヲ免カレタル時ハ其他地方ニ委ス

第二百十九條ノ例ニ從フ

第四百二十六條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五十錢以上一圓五十錢以下ノ科料ニ處ス

一人家ノ近傍又ハ山林田野ニ於テ濫リニ火ヲ焚ク者

二水火其他ノ變ニ際シ官吏ヨリ防禦スヘキノ求メヲ受ケ傍觀シテ之ヲ肯セサル者

三不熟ノ菓物又ハ腐敗シタル飲食物ヲ販賣シタル者

四健康ヲ保護スル爲メ設ケタル規則又ハ傳染病豫防規則ニ違背シタル者

五人ノ通行ス可キ場所ニアル危險ノ井溝其他凹所ニ蓋又ハ防圍ヲ爲サヽル者

六路上ニ於テ犬其他ノ獸類ヲ嗾シ又ハ驚逸セシメタル者

七發狂人ノ看守ヲ怠リ路上ニ徘徊セシメタル者

八狂犬猛獸等ノ繫鎖ヲ怠リ路上ニ放チタル者

九變死人ノ檢視ヲ受ケスシテ埋葬シタル者

十墓碑及ヒ路上ノ神佛ヲ毀損シ又ハ汚瀆シタル者

十一神祠佛堂其他公ノ建造物ヲ汚損シタル者

十二公然人ヲ罵詈嘲弄シタル者但訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第四百二十七條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘留ニ處シ又ハ二十錢以上一圓二十五錢以下ノ科料ニ處ス

一濫リニ車馬ヲ疾驅シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

二制止ヲ肯セスシテ人ノ群集シタル場所ニ車馬ヲ牽キタル者

三夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者

附錄　明治十五年四月廿九日第貳拾貳號（內務省陸軍省海軍省司法省警視廳府縣東京府ヲ除ク）ヘ達

刑法第四百貳拾七條第三項夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者ト有之候處軍人制服ヲ着川乘馬シタル者ハ右ノ限ニ無之候條此旨相達候事

四木石等ヲ道路ニ堆積シテ防圍ヲ設ケス又ハ標識ノ點燈ヲ怠リタル者

五瓦礫ヲ通路家屋園圃ニ投擲シタル者

六禽獸ノ死屍ヲ道路ニ棄擲シ又ハ取除カサル者

七汚穢物ヲ道路家屋園圃ニ投擲シタル者

八警察ノ規則ニ違背シテ工商ノ業ヲ爲シタル者

九醫師穩婆事故ナクシテ急病人ノ招キニ應セルサル者

十死亡ノ申告ヲ爲サスシテ埋葬シタル者

十一流言浮說ヲ爲シテ人ヲ誑惑シタル者

十二妄ニ吉凶禍福ヲ說キ又ハ祈禱符呪等ヲ爲シ人ヲ惑ハシテ利ヲ圖ル者

十三私有地外ヘ濫リニ家屋牆壁ヲ設ケ又ハ軒樞ヲ出シタル者

十四官許ヲ得スシテ路傍又ハ河岸ニ床店等ヲ開キタル者
十五路上ノ植木市街ノ常燈及ヒ厠場等ヲ毀損シタル者
十六道路橋梁其他ノ場所ニ榜示シタル通行禁止及ヒ指道標ノ類ヲ毀棄汚損シタル者
第四百二十八條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日ノ拘留ニ處シ又ハ十錢以上一圓以下ノ科料ニ處ス
一官署ヨリ價額ヲ定メタル物品ヲ定價以上ニ販賣シタル者
二渡船橋梁其他ノ場所ニ於テ定價以上ノ通行錢ヲ取リ又ハ故ナク通行ヲ妨ケタル者
三渡船橋梁其他通行錢ヲ拂フ可キ場所ニ於テ其定價ヲ出サスシテ通行シタル者
四路上ニ於テ賭博ニ類スル商業ヲ爲シタル者
五官許ヲ得スシテ劇場其他觀物場ヲ開キ及ヒ其規則ニ違背シタル者
六溝渠下水ヲ毀損シ又ハ官署ノ督促ヲ受ケテ溝渠下水ヲ浚ハサル者
七制止ヲ肯セスシテ路傍ニ食物其他ノ商品ヲ羅列シタル者
八官許ヲ得スシテ獸類ヲ官有地ニ放チ又ハ牧畜シタル者
九身體ニ刺文ヲ爲シ及ヒ之ヲ業トスル者
十他人ノ擊キタル牛馬其他ノ獸類ヲ解放シタル者
十一他人ノ擊キタル舟筏ヲ解放シタル者
第四百二十九條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス
一橋梁又ハ堤防ノ害ト爲ル可キ場所ニ舟筏ヲ繫キタル者

二牛馬諸車其他物件ヲ道路ニ横タヘ又ハ木石薪炭等ヲ堆積シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
三車馬ヲ並ヘ牽テ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
四水路ニ於テ舟ヲ並ヘ通船ノ妨害ヲ爲シタル者
五氷雪塵芥等ヲ路上ニ投棄シタル者
六官署ノ督促ヲ受ケテ道路ノ掃除ヲ爲サヽル者
七制止ヲ肯セスシテ路上ニ遊戲ヲ爲シ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
八牛馬ヲ牽キ又ハ繫クヿヲ忽カセニシテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
九出入ヲ禁止シタル場所ニ濫リニ出入シタル者
十通行禁止ノ榜示ヲ犯シテ通行シタル者
十一道路ニ於テ放歌高聲ヲ發シテ制止ヲ肯セサル者
十二酩酊シテ路上ニ喧噪シ又ハ醉臥シタル者
十三路上ノ常燈ヲ消シタル者
十四人家ノ牆壁ニ貼紙及ヒ樂書シタル者
十五邸宅ノ番號標札招牌又ハ貸家賣家ノ貼紙其他報告ノ榜標等ヲ毀損シタル者
十六他人ノ田野園囿ニ於テ菜菓ヲ採食シ又ハ花卉ヲ採折シタル者
十七公園ノ規則ヲ犯シタル者
十八通路ナキ他人ノ田圃ヲ通行シ又ハ牛馬ヲ牽入レタル者
第四百三十條　前數條ニ記載スルノ外各地方ノ便宜ニヨリ定ムル所ノ違警罪ヲ犯シタル者

ハ其罰則ニ從テ處斷ス

[附錄一] 明治十四年八月三十一日第七拾七號（警視廳府縣東京府ヲ除ク）へ達

刑法第四百三十條ニ依リ各地方ノ便宜ニ從ヒ違警罪目ヲ定メ發行シタルトキハ之ヲ主務ノ省ヘ屆出ヘシ此旨相達候事

○明治十四年十一月廿一日內務省番外（警視廳府縣東京府ヲ除ク）へ達

本年八月第七拾七號公達中主務ノ省トアルハ內務司法兩省ヲ指稱シタル儀ニ候條爲心得此旨相達候事

○第貳章　新舊法比照

[第二千二百十六] 明治十四年十二月廿八日第八拾壹號布告

刑法第三條第二項ニ依リ新舊法ヲ比照スルニハ左ノ例ニ從フヘシ

第一條　新舊法比照左ノ如シ

新法	舊法
一　死刑	斬較
二　無期徒刑	懲役終身
三　有期徒刑	懲役十年
四　無期流刑	禁獄終身
五　有期流刑	重懲役十年
六　重懲役	懲役十年
七　輕懲役	懲役七年
八　重禁獄	禁獄十年
九　輕禁獄	禁獄七年
十　重禁錮	懲役十一日以上五年以下
十一　輕禁錮	禁獄錮十一日以上五年以下
十二　罰金	贖罪收贖罰金科料二圓以上
十三　拘留	懲役禁獄錮拘留十日以下
十四　科料	贖罪收贖罰金科二圓未滿

第二條　舊法ノ刑期新法主刑ノ刑期內ニ在ル時ハ新法ニ從フ但舊法ノ刑期ニ過クルヿヲ得ス（舊法ニ於テ懲役百日ニ該ル者新法ニ照シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ二月以上百日以下ノ重禁錮ニ處スルノ類）

若シ舊法ノ刑期新法死刑ノ短期ニ等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ（舊法ニ於テ禁獄三十日ニ該ル者新法ニ照ラシ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ禁獄三十日ニ處スルノ類）

第三條　舊法新法ノ刑共ニ短期長期アル者ハ其短期ノ短キ者ニ從フ但其長期ノ短キ者ニ過ルヿヲ得ス（舊法ニ於テ一年以上三年以下ノ懲役ニ該ル者新法ニ照ラシ三月以上四年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處スルノ類）

若シ舊法新法ノ刑其短期等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ（舊法ニ於テ二月以上三年以下ノ禁獄ニ該ル者新法ニ照ラシ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ二月以上二年以下ノ禁獄ニ處スルノ類）

第四條　舊法ノ贖罪收贖若クハ罰金科料ノ金額新法主刑ノ金額內ニ在ル時ハ新法ニ從フ但

舊法ノ金額ニ過クルヿヲ得ス

第五條　舊法新法ノ罰金科科共ニ多數寡數アル者ハ其寡數ノ寡キ者ニ從フ但其多數ノ寡キ者ニ過クルヿヲ得ス

第六條　舊法ニ於テ單ニ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金ヲ附加ス可キ時ハ其罰金ヲ附加セス

第七條　舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ於テ罰金科料ニ該ル時ハ新法ニ從フ

舊法ニ於テ贖罪收贖若クハ罰金科料ニ該ル者新法ニ照シ體刑ニ該ル時ハ舊法ニ從フ

第八條　舊法ニ從ヒ贖罪收贖ニ處シタル者其金額ヲ延期限内ニ納完スル能ハサル時ハ一圓ヲ一日ニ折算シ輕禁錮又ハ拘留ニ換フ但一圓未滿ト雖ヒ仍ホ一日ニ計算ス

第九條　舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ重罪ノ刑ニ處スル時ハ新法ノ附加刑ヲ適用セス但除族追奪位記沒收ノ類ハ舊法ニ從フ

第十條　舊法ニ於テ體刑ニ該ル者新法ニ從ヒ禁錮ノ刑ニ處スル時ハ監視ヲ附加セス

第十一條　華士族ノ犯罪新法ニ於テ輕罪ニ該ル者舊法ニ從ヒ處斷スル時ハ其族ヲ除セス

第十二條　新法ト舊法トヲ比照スルニハ各其本法ニ照シ加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

第十三條　舊法ニ於テ棒鎖ニ該ル者ハ仍ホ棒鎖ニ處ス

右奉　勅旨布告候事

○第三章　刑法附則ニ關スル件

○第壹款　刑法附則

第二千二百十七　明治十四年十二月十九日第六拾七號布告

刑法附則別冊ノ通相定メ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

右奉　勅旨布告候事

別冊

刑法附則

第一章　主刑執行

第一條　死刑ハ其執行ヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及ヒ獄司刑場ニ立會獄司ヨリ囚人ニ死刑ヲ執行スヘキヿヲ告示シタル後獄丁ヲシテ之ヲ決行セシム但其時限ハ午前十時前トス

第二條　死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警戒ヲ嚴ニシ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルヿヲ許サス但立會官吏ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニアラス

第三條　死刑ノ執行畢リタル時ハ書記其始末書ヲ作リ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印シ之ヲ裁判所ノ檢事局ニ納ム可シ

第四條　左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フヿヲ禁ス

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

仁孝天皇祭

神武天皇祭
六月大祓
秋季皇靈祭
神宮神嘗祭
天長節
後桃園天皇祭
新嘗祭
光格天皇祭
十二月大祓

第五條　死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ト申スル者ハ醫師及ヒ穩婆ヲシテ之ヲ檢査セシメ果シテ懷胎ナル時ハ檢察官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ產後一百日ヲ經テ更ニ司法卿ノ命令ヲ受ケ決行スヘシ

第六條　死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アル時ハ獄司之ヲ許可シ下付スルヿヲ得

第七條　死刑ノ宣告ヲ受ケタル者執行ニ至ルマテ何時ニテモ獄司ノ許可ヲ得テ其親屬故舊ニ接見スルヿヲ得

第八條　死刑ヲ執行シタル時ハ犯人ノ屬籍氏名年齡職業住所及ヒ其罪狀刑名ヲ記載シテ左ノ各所ニ榜示公告ス可シ

十五年司丙第三號達（二千二百十八）ヲ以テ死刑者犯由牌書式ヲ定ム

刑ヲ宣告シタル裁判所ノ門前
犯罪ノ地
犯人住居ノ地

第九條　徒流ノ囚ヲ發遣スルハ裁判ヲ爲シタル地ノ獄司ヨリ內務卿ニ上申シ其命令ヲ待テ蒲船ノ地ニ護送ス可シ

第十條　徒刑ノ囚ハ島地ニ於テ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルヿヲ得

第十一條　流刑ノ囚幽閉中獄內ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許ス可シ

第十二條　流刑ノ囚幽閉ヲ免ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ內務司法兩卿ニ上申シ其許可ヲ受クヘシ

第十三條　徒刑ノ囚假出獄ヲ許サレタル者又ハ流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者家屬ヲ招キ同居スルヲ請フ時ハ之ヲ許スヿヲ得但其路費ハ自ラ之ヲ辨ス可シ

第十四條　流刑ノ囚幽閉ヲ免シ地ヲ限リ居住セシムル者ハ監獄近傍ノ地ヲ限リ獄司ノ監督ヲ受ケシム若シ已ムヿヲ得サル事故アル時ハ獄司ニ請フテ限外ニ出ルヿヲ得

第十五條　流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者再ヒ罪ヲ犯シタル時ハ本刑期限內ト雖モ島地ニ於テ直チニ其刑ヲ執行ス可シ

第十六條　懲役重禁錮ノ囚ハ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルヿヲ得

第十七條　禁獄輕禁錮ノ囚獄內ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許ス可シ

第十八條　服役限內更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑期百日以內ハ工錢ヲ給與セ

ス

第十九條　囚人ニ給與スル工錢ノ額ヲ定メ之ヲ交付シ及ヒ領置スル方法ハ監獄ノ規則ニ從フ

第二十條　罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ之ヲ徴收セス附加ノ罰金ニ於ル亦同シ

第二章　監視

第二十一條　監視ハ主刑ノ終リタル後仍ホ將來ヲ檢束スル爲メ警察官吏ヲシテ犯人ノ行狀ヲ監視セシムル者トス

第二十二條　監視ニ付ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ主刑ノ終リタル時典獄ヨリ最近ノ警察所ニ護送シ其警察所ヨリ住居ノ地ノ警察所ニ送致シ監視ヲ執行セシム但主刑ノ期滿免除ヲ得タル者又ハ主刑ヲ免シ止タ監視ニ付スル者ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ護送スヘシ

十五年第四拾貳號布告ヲ以テ全條改正

第二十三條　犯人ヲ警察所ニ護送スル時ハ其監視ノ起算滿期ヲ記載シタル文書及ヒ刑名宣告書ノ謄本ヲ附ス可シ

第二十四條　同上布告ヲ以テ削除ス

第二十五條　警察所ヨリ犯人ヲ住居ノ地ノ警察所ニ送致スル時ハ其里程ヲ計リ日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與シ犯人到着ノ日直チニ之ヲ其地ノ警察所ニ差出サシム但途中事故アリテ滯滯シタル時ハ第三十一條ノ例ニ從フ可シ

犯人ヲ送致スル時ハ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ其地ノ警察所ニ遞送ス可シ

第二十六條　犯人住居ノ地ノ警察所ニ於テハ監視ノ期限間遵守ス可キ條件ヲ讀聞カセ監視ノ票ヲ下付ス可シ

第二十七條　監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一毎月二度所轄ノ警察所ニ到リ其謹愼ナルヿヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病又ハ已ムヿヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルヿ能ハサル時ハ其事由ヲ屆出ツ可シ

二酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルヿヲ許サス

三事故アリテ其住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

四擅ニ他ノ地方ニ旅行スルヿヲ許サス若シ已ムヿヲ得サル事故アル時ハ其事由ヲ警察所ニ具申シ許可ヲ受ク可シ

第二十八條　監視ノ期限間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルヿアル可シ

第二十九條　警察所ニ於テ住居ヲ轉スルヿヲ許可シタル時ハ其事由ヲ轉住ノ地ノ警察所ニ通知シ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ遞送ス可シ

第三十條　他ノ地方ニ旅行スルヿヲ許可シタル時ハ其里程ヲ計リ先方ノ地ニ滯留スル時日ヲ算シ往復日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與ス可シ

犯人先方ノ地ニ到レハ其地ノ警察所ニ出テ旅券ヲ示シ官吏ノ認印ヲ受ケ限定ノ日數内ニ歸來リ直チニ旅券ヲ警察所ニ還納スヘシ

第三十一條　旅行中天災又ハ疾病等ニ因リ臨時淹滯シタル時ハ事由ヲ其地ノ警察所ニ具申シ官吏ノ証書ヲ受ケ歸着ノ日旅券ニ添ヘ警察所ニ差出ス可シ

第三十二條　監視ニ付スル者住居ナク及ヒ引取人ナキ時ハ其期限間懲治場ニ留置シ工業ヲ爲サシメ又ハ使役ニ供ス住居遠地ニ在テ歸着スル資力ナキ者亦同シ

（十六年第六十二號公達（千二十九參照））

第三十三條　懲治場ニ留置シタル者限内引取人ヲ得又ハ住居ノ地ニ歸着スル資力ヲ得タル時ハ其地ニ送致シテ殘期ノ監視ヲ執行セシム可シ

第三十四條　刑期限内再ヒ罪ヲ犯シ初犯再犯共ニ監視ニ付スヘキ時又ハ監視ノ期限間再ヒ罪ヲ犯シ更ニ監視ニ付スヘキ時ハ並ニ主刑滿限ノ後前後ノ期限ヲ通算シテ監視ヲ執行ス可シ

第三十五條　罰金ヲ禁錮ニ換ヘタル者監視ニ付ス可キ時ハ其禁錮ノ日數ヲ監視ノ期限ニ算入ス可シ

第三十六條　監視ニ付セラレタル者其規則ヲ謹守シ悛改ノ狀アル時ハ警察官ヨリ其事實ヲ上申シ内務司法兩卿ノ命ヲ受ケテ假ニ監視ヲ免スルヿヲ得

附錄　明治十七年七月九日内務省司法省乙第三拾貳號（警視廳府縣（東京府ヲ除ク）ヘ達）

刑法附則ニ從ヒ監視假免ハ警察官假出獄ハ典獄ヨリ其事實ヲ具シ直ニ上申致來候處自今其所屬長官ヲ經由スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

第三十七條　假ニ監視ヲ免セラレタル者住居ヲ轉移スル時ハ第二十七條第三及ヒ第二十九條ノ例ニ從フ可シ

第三章　假出獄及ヒ特別監視

第三十八條　假出獄ヲ許ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ其犯人ノ行狀及ヒ刑名入獄ノ年月ヲ記載シ假ニ出獄ヲ許サレンヿヲ内務司法兩卿ニ上申シテ許可ヲ受ク可シ

第三十九條　假出獄ヲ許シタル時ハ獄司ヨリ其證票ヲ犯人ニ下附ス可シ

第四十條　假出獄證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一本人ノ屬籍氏名年齡住所罪名刑名及ヒ處刑ノ年月日

二殘期何年何月何日間假出獄ヲ許ス事

三假出獄中ハ特別監視ニ付ス可キ事

四假出獄中更ニ重輕罪ヲ犯シタル時ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ヲ刑期ニ算入セサル事

第四十一條　重罪ノ刑ニ處セラレタル者假出獄中自ラ財産ヲ治メ若クハ職業ヲ營マントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

第四十二條　假出獄ヲ許ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ出獄ノ日典獄ヨリ其證票ノ謄本ヲ添ヘ第二十二條ノ例ニ依リ犯人ヲ護送シ特別監視ヲ執行セシム可シ（十五年第四十二號布告ヲ以テ改正）

第四十三條　特別監視ニ付スル者ハ第二十三條第二十四條第二十五條第二十六條第二十九條第三十一條ノ例ヲ適用ス

第四十四條　特別監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守ス可シ

一毎週間一度所轄ノ警察所ニ到リ其謹愼ナルヿヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク

（十四年第八十一號布告（千二十三第四章參照））

（十五年四月内務省番外達（千二十八ヲ以テ假出獄宣告狀書式ヲ示ス））

可シ但疾病又ハ已ムヿヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルヿ能ハサル時ハ其事由ヲ屆出ツ可シ

二酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルヿヲ許サス

三事故アリテ住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ但他ノ府縣ニ轉移スルヿヲ許サス

四往復一日程ヲ過クル地ニ旅行スルヿヲ許サス

第四十五條　特別監視ノ期限間ハ警察官更時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルヿアル可シ

第四十六條　假出獄ヲ許サレタル者刑期滿限ノ日ニ至レハ假出獄證票ヲ警察所ニ還納シ警察所ヨリ證票ヲ出シタル獄司ニ遞送ス可シ

主刑滿限ノ後監視ニ付ス可キ犯人ナル時ハ警察所ニ於テ第二章ノ例ニ從テ處分ス可シ

第四十七條　假出獄ヲ許ス可キ者住所ナク及ヒ引取人ナキ時ハ第三十二條ノ例ニ從ヒ懲治場ニ留置ス可シ

第四章　刑事裁判費用

第四十八條　豫審公判ニ付キ呼出シタル證人醫師鑑定人通辨人翻譯人ニ給與ス可キ日當旅費止宿料及ヒ第五十一條第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

第四十九條　日當旅費及ヒ止宿料ハ左ノ制限ニ據リ各地方適宜其額ヲ定ム可シ

日當五十錢以下

旅費一里拾錢以下

止宿料一宿貳拾五錢以下

住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ヒ呼出ノ地ニ滯在中ハ日當幷ニ止宿料ヲ給ス其三里未滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料ヲ給セス（十六年第三拾九號布告ヲ以テ全條改正）

第五十條　證人ノ日當旅費及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非サレハ之ヲ給與セス

第五十一條　證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第百九十條ニ從ヒ償金ヲ要求スル時ハ旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給スルヿアル可シ

第五十二條　解剖舍密等ノ費用及ヒ數多ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日當ノ外別ニ之ヲ給與ス可シ

第五十三條　裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ納メサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徵收ス

第五章　賠償處分

第五十四條　贓物犯人ノ手ニ在ル時ハ直チニ被害者ニ還付スト雖モ若シ轉轉シテ他人ノ手ニ在ル時ハ被害者ノ請求ニ因リ還給セシムル者トス

第五十五條　贓物轉轉シテ他人ノ手ニ在ル時公商ニ由リ買取シタル物品ハ其公商若クハ被害者ヨリ買取者ニ原價ヲ償ハサレハ直チニ還給セシムルヿヲ得ス

若シ公商ニ由ラスシテ買取シタル物品ハ其還給ヲ拒ムヿヲ得ス但其買取者ハ賣者ニ對シ轉償ヲ求ムルヿヲ得

第五十六條　贓物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取タル者其贓物現在スル時ハ還給ヲ拒ムヿヲ得

ス但典物トシテ受取タル者ハ典主ニ對シ轉償ヲ求ムルコヲ得

第五十七條　贓物交換シテ現在スル時ハ公商ニ由ルト否トヲ區別シ第五十五條ノ例ニ從テ處分ス可シ

第五十八條　贓物已ニ費用シタル時又ハ識別ス可カラサル時又ハ其所在ノ知レサル時ハ損害ノ賠償ヲ請求スルコヲ得

第五十九條　人ノ名譽若クハ殺傷ニ關シタル損害其他犯罪ノ爲メ現ニ生シタル損害ハ其賠償ヲ請求スルコヲ得但失火ハ此限ニ在ラス

第六十條　贓物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯罪ヲ審判スル刑事裁判所ニ請求スルコヲ得若シ其審判已ニ終リタル後ハ民事裁判所ニ非サレハ之ヲ請求スルコヲ得ス

第六十一條　刑事裁判所ニ於テ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲スコヲ得其民事裁判所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式ニ從フ可シ

第六十二條　贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルコヲ得

第六十三條　贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セサル時ハ被害者ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請求スルコヲ得

○第貳款　死刑者犯由牌掲示式

第二千二百十八　明治十五年二月六日司法省丙第三號（裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク））へ達

處刑ノ者犯由掲示ノ儀ニ付明治七年五月當省第九號ヲ以テ相達置候旨モ有之候處今般新刑法實施ニ付テハ明治十四年十二月第六拾七號公布刑法附則第八條ニ據リ自今左ノ通改正候條此旨相達候事

一死刑ノ執行アリタルトキハ重罪裁判所書記ニ於テ左ノ雛形ニ據リ公告案ヲ製シ三日間該廳門前ニ掲示シ且別ニ宣告書ノ謄本ヲ製シ犯罪ノ地幷犯人住居ノ地方（東京ハ警視廳）府縣ヘ速ニ送達スヘシ

一警視廳府縣ニ於テハ重罪裁判所書記ヨリ死刑宣告書ノ謄本送達アレハ左ノ雛形ニ據リ犯罪ノ地幷犯人住居ノ地何レモ三日間通衢ニ榜示公告スヘシ

死刑宣告榜示公告雛形

重罪裁判所門前榜示

用紙堅質ノ品ヲ撰

宣告書全文ヲ掲ク

犯罪ノ地又ハ犯人住居ノ地榜示

宣告書全文

用ス

、、、、、、
、、、、、、
、、、、、、

右之通宣告相成候ニ付公告スルモノ也

警視總監名
又ハ府縣長官名

、、、、、、

五百

○第三款　監視票及旅券幷監視者旅行ノ節認印方

第二千二百十九　明治十五年三月廿二日内務省乙第拾九號（警視廳府縣宛ヘ送）

刑法附則中監視票旅券共別紙書式之通相定候條各廳ニ於テ調製シ下附スヘシ此旨相達候事

但紙質堅緻ナルモノヲ用ユヘシ

別紙

監視票

一毎月一度所轄左ノ條件ヲ遵守スヘシ

一酒宴遊興ハ已ムヲ得サル事故ハ其事由ヲ警察署ニ届出テ受ク可シ

一事故アリテ旅行スル可キハ警察署ニ具ム

一他ノ地方ニ住居ヲ轉移セントスルトキハ警察署ニ到ル

一集會スル場所ニ參會スル

一人ニ會シ又ハ群集ヘシ

一此票ヲ所持シ官吏ノ檢査ニ遵ヒ認印ヲ受ク可シ

一表ハ月一度ノ期限間ニ出シ警察署ニ到ル

一監視ノ期限ハ刑期ノ何年何月何日迄

刑名　監視期　何年何月何日迄

族籍　何番地何何何

東京府

右刑法附則第二十六條ニ因リ此ノ票ヲ下付スル

明治何年何月何日

東京ニテハ何警察署

府縣ニテハ警察署

何府縣何警察署

警察使

何某　印

警部

何某　印

下五横分四五寸面ニ縦横托シ以寸面ニ縦横七分四五寸剛ハ横原書

第五部　第壹編　第三章　第三款

五百一

認印表

	初年	二年	三年	四年	五年
一月	十五日以前	十五日以前	十五日以前	十五日以前	十五日以前
二月	十六日以後	十六日以後	十六日以後	十六日以後	十六日以後
三月					
四月					
五月					
六月					
七月					
八月					
九月					
十月					
十一月					
十二月					

何日出頭 印
疾病 二付 不參
旅行 中

本號十六年改正以前ハ十年ヲ改ステ

旅券

何許縣何郡何町何村何番地住又ハ寄留同某子弟妻女同居

族籍

何年何月何日宣告 何年何月何日恕免

何年何月何日起 何年何月何日滿

何 某

何年何月日 明治何年何月何年何ケ月

刑名刑期

監視 何年何月

罪質犯數

一此者何府縣何區郡何町村何某方ヘ旅行スルヿヲ許可ス

一何年何月何日本地ヲ發途ス

一先方ノ地若シ途中滞在スルトキハ其旨ヲ記スニ滞在スル日數何日間トス

一何年何月何日飯宅スルモノトス

先方ノ地若シ途中滞在スルトキハ其旨ヲ記スニ到レハ此旅券ヲ直ニ其地ノ警察署ニ出シテ官吏ノ認印ヲ受クヘキ事

旅行中天災又ハ疾病等ニヨリ已ムヿヲ得スシテ淹滞シタルトキハ其事由ヲ其地ノ警察署ニ具申シテ官吏ノ證書ヲ請ヒ歸着シタルトキ若シクハ先方ノ地ニ到レハ此旅券ニ副ヘ速ニ之ヲ其警察署ニ示スヘキ事

歸着シタルトキハ此旅券ヲ直ニ還納スヘキ事

右刑法附則第三十條ニ依リ下付スル者也

東京ニテハ 何警察署

府縣ニテハ 何府縣何警察署

明治何年何月何日 署 印

警察使 何某 印

警部 何某 印

認印表			
某警察署	何年何月何日ヨリ 何年何月何日迄何 府縣何區何町何番 地何某方ニ滯在ス	印	
〃	〃	印	
〃	〃	印	

旅券

何府縣何區何町何番地何某又ハ何某妻子弟妹女同居

族籍 何 某

何年何月何日宣告 何年何月何日迄期

何年何月何日起 何年何月何日迄

何年何月生 明治何年何月何年何ケ月

刑名刑期

監視 何年何月

罪質犯數

一此者監視假出獄ヲ許サル特別監視ニ付セラレ何地ニ於テ之ヲ執行スヘキニ付該地ヘ到ル者也

一何年何月何日本地ヲ發途ス

一何年何月何日先方ノ地ニ到ルモノトス

先方ノ地ニ到レハ直ニ其地ノ警察署ニ此旅券ヲ差出ス可キ事

但シ本文旅券ニ假出獄證票ヲ添ヘ官吏ノ監査ヲ受クヘシ

旅行中天災又ハ疾病等ニ因リ臨時淹滯シタル時ハ其事由ヲ其地ノ警察署ニ具申シ官吏ノ証書ヲ請ヒ到着ノ日此旅券ニ副ヘ警察署ニ差出ス可キ事

右刑法附則第二十五條ニ依リ下付スル者也

東京ニテハ 何警察署 警察使 何某 印

明治何年何月何日 署 印

府縣ニテハ 何府縣何警察署 警部 何某 印

十六年刑ヲ四名姓名ヲ罪刑名ヲ期ノ選ヲ犯罪上ヲ以テ加減ス

特別監視票

府縣何郡何村何番地住（又ハ寄留何某千葉郡女同居）

族籍

何某

刑名刑期（何年何月何日宣告何年何月何日迄期）

附加監視何年何月（何年何月何日起何年何月何日迄）

假出獄何年何月（何年何月何日起何年何月何日迄）

特別監視何年何月（何年何月主明治何年何月何年何ヶ月）

特別監視ノ期限間左ノ條件ヲ遵守スヘシ

一毎週間一度所轄ノ警察署ニ到リ其謹慎ナルヿヲ表シ此票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受クヘシ

但疾病又ハ已ムヿヲ得ザル事故アリテ警察署ニ到ルヿ能ハサルトキハ其事由ヲ届出ツヘシ

二酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルヿヲ許サス

三事故アリテ住居ヲ轉移セントスルトキハ警察署ニ申請シ許可ヲ受クヘシ但他ノ府縣ニ轉移スルヿヲ許サス

四往復一日程ヲ過クル地ニ旅行スルヿヲ許サス

（重罪ノ刑ニ處セラレタル者ナルトキハ左ノ一項ヲ附加ス）

自ラ財産ヲ治メ若シクハ職業ヲ營マントスルトキハ刑法附則第四十一條ニ從ヒ警察署ニ申請シ許可ヲ受クヘシ

右刑法附則第廿六條ニ因リ此票ヲ下付スル者也

明治何年何月何日

東京ニテハ何警察署
府縣ニテハ何府縣何警察署

警察使何某 印

警部何某 印

認印表

		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
初年	一度	印 何日出頭ス											
	二度	疾病ニ付不參											
	三度												
	四度												
	五度												
二年	一度												
	二度												
	三度												
	四度												
	五度												
三年	一度												
	二度												
	三度												
	四度												
	五度												
四年	一度												
	二度												
	三度												
	四度												
	五度												

以後ハ第四十六號ニ準シテ省略ス

第二千二百二十一　明治十五年五月十五日內務省乙第三拾壹號府縣へ達

本年當省乙第拾九號達刑法附則第二十五條ニ依リ附與スル旅券第四項ノ但書ハ特別監視ニ附セラレタル者ニ限リ插入シ尋常監視ニ附セラレタル者ニ插入セス及ヒ監視票幷ニ旅券ニ警察署トアルハ警察分署ヲモ包含セル義ト心得ヘシ此旨更ニ相達候事

第二千二百二十二　明治十七年三月廿六日內務省乙第拾九號警視廳府縣（東京府ヲ除ク）へ達

監視ニ付セラレタル者他ノ地方ニ旅行スルトキハ必ス監視票ヲ携帶セシメ其滯留數日ニ涉ル者ハ滯留地ノ警察署ニ到リ謹愼ヲ表シ官吏ノ認印ヲ受ケシム可シ此旨相達候事

但官吏ノ認印ハ監視票ノ裏面旅行中欄內ニ捺印スヘシ

○第四章　陸軍兵卒ノ犯罪及其職務ニ對スル犯罪處分方

第二千二百二十二　明治十五年八月廿一日司法省丁第四拾壹號大審院裁判所へ達

今般太政官ヨリ左ノ通御達有之候條此旨相達候事

太政官達　明治十五年八月十五日

陸軍上等卒ニシテ刑法特ニ官吏ノ爲メニ定メタル罪ヲ犯シタル時ハ都テ官吏ニ準シ候儀ト可心得此旨相達候事

第二千二百二十三　明治十五年十二月廿八日第七拾三號布告

憲兵卒其職務ニ關シ罪ヲ犯シタル時ハ官吏犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

憲兵卒ノ職務ニ對シ罪ヲ犯シタル者ハ官吏ニ對スル犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

右奉　勅旨布告候事

○第貳編　罰則

○第壹章　總則

○第壹款　罰則中違犯者ヲ訴出ル者賞金給付方

第二千二百二十四　明治十三年三月廿日司法省丙第壹號大審院諸裁判所檢事檢事アラサル各縣へ達

諸罰則中違犯者ヲ見屆ケ訴出ル者ハ其賞トシテ科料又ハ罰金ノ半高ヲ給付ストヽ之レアルハ其違犯者無力ニシテ科料又ハ罰金ノ全部ヲ完納スル能ハサルトキハ實地徵收セシ金高ノ半額ヲ給付スル儀ト心得ヘク此旨相達候事

但シ本文ニ牴觸セル從前ノ伺指令ハ總テ取消候事

○第貳款　罰例處分方法

第二千二百二十五　明治十三年三月三十一日第拾壹號布告

諸罰則ヲ犯シ罰金科料ニ處セラルヽ者處分法左ノ通相定候條此旨布告候事

一罰金科料ハ宣告ノ日ヨリ一月內ニ納完セシム若シ限內納完セサル者ハ壹圓ヲ一日ニ折算シ禁獄ニ換フ其壹圓以下ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

但算シテ禁獄二年以上ニ及ホスヲ得ス

一禁獄限內罰金科料ヲ納完シ又ハ親屬等代テ納完スル時ハ經過シタル日數ヲ扣除シテ禁獄ヲ免ス

一罰金科料ノ實決ノ刑ニ併科シタル時完納セサル者ハ刑期滿限ノ後例ニ照シテ禁獄ス

第二千二百二十六　明治十四年十二月二十八日第七拾貳號布告

明治十五年一月一日ヨリ刑法施行候ニ付法律規則中罰例ニ係ルモノハ左ノ例ニ照シテ處斷スヘシ

第一條　凡懲役ハ十一日以上ヲ重禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス

第二條　凡禁獄及禁錮ハ十一日以上ヲ輕禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス

第三條　凡罰金及科料ハ貳圓以上ヲ罰金ニ處シ貳圓未滿ヲ五錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第四條　法ニ照シ律ニ照シ若クハ違令違式ニ照シ處斷ストアリ及ヒ咎可申付トアルハ總テ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五條　法律規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第六條　法律規則中罰例アリト雖ヒ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依テ處斷ス

第七條　前數條ノ罪ヲ犯シ拘留科料ニ處スル者ト雖モ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

但始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルヲ得

右奉　勅旨布告候事

○第貳章　各種罰則

○第壹欵　請願ニ關スル件及讒謗律

○請願規則罰例（第三部第壹編第拾四章第貳欵第壹節ニ出ス）

第二千二百廿七　明治八年六月廿八日第百拾號布告

讒謗律別冊之通被定候條此旨布告候事

別冊

讒謗律

第一條　凡ソ事實ノ有無ヲ論セス人ノ榮譽ヲ害スヘキノ行事ヲ摘發公布スル者之ヲ讒毀トス人ノ行事ヲ舉ルニ非スシテ惡名ヲ以テ人ニ加ヘ公布スル者之ヲ誹謗トス著作文書若クハ畫圖肖像ヲ用ヒ展觀シ若クハ發賣シ若クハ貼示シテ人ヲ讒毀シ若クハ誹謗スル者ハ下ノ條別ニ從テ罪ヲ科ス

第二條　第一條ノ所爲ヲ以テ乘輿ヲ犯スニ涉ル者ハ禁獄三月以上三年以下罰金五十圓以上千圓以下（二罰并セ科シ或ハ偏ヘニ一罰ヲ科ス以下之ニ倣ヘ）

第三條　皇族ヲ犯スニ涉ル者ハ禁獄十五日以上二年半以下罰金十五圓以上七百圓以下

第四條　官吏ノ職務ニ關シ讒毀スル者ハ禁獄十日以上二年以下罰金十圓以上五百圓以下誹謗スル者ハ禁獄五日以上一年以下罰金五圓以上三百圓以下

第五條　華士族平民ニ對スルヲ論セス讒毀スル者ハ禁獄七日以上一年半以下罰金五圓以上三百圓以下誹謗スル者ハ罰金三圓以上百圓以下

第六條　法ニ依リ檢官若クハ法官ニ向テ罪犯ヲ告發シ若クハ証スル者ハ第一條ノ例ニアラス其ノ故造誣告シタル者ハ誣告律ニ依ル

第七條　若シ讒毀ヲ受ルノ事刑法ニ觸ルヽ者檢官ヨリ其事ヲ糾治スルカ若クハ讒毀スル者

（刑法（二千二百十五）第百十七條第百二十九條及第三百五十條乃至第三百六十一條ニ依リ取捨スヘシ）

ヨリ檢官若クハ法官ニ告發シタル時ハ讒毀ノ罪ヲ治ムルヿヲ中止シ以テ事案ノ決ヲ俟チ其ノ被告人罪ニ坐スル時ハ讒毀ノ罪ヲ論セス

若シ事刑法ニ觸レスメ單ヘニ人ノ榮譽ヲ害スル者ハ讒毀スルノ後官ニ告發スト雖モ仍ホ讒毀ノ罪ヲ治ム

第八條　凡ソ讒毀誹謗ノ第四條第五條ニ係ル者ハ被害ノ官民自ラ告ルヲ待テ乃チ論ス

○第貳欵　外務ニ關スル件

○朝鮮國ニ於テ日本人留易規則罰例（第三部第貳編第三章第三欵ニ出ス）

○清國在留日本人心得方規則罰例（第三部第貳編第三章第三欵ニ出ス）

○清國及朝鮮國在留日本人取締規則（同上）

○朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本漁民取扱規則（第三部第貳編第三章第四欵ニ出ス）

第二千二百二十八　明治十六年四月五日第拾壹號布告

朝鮮國ニ於テ行步規程ヲ犯シタル者ハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

右奉　勅旨布告候事

○第三欵　內務ニ關スル件

○第壹節　警察ニ係ル件

第二千二百二十九　明治十五年五月廿四日第貳拾五號布告

（元年十二月廿三日布告ハ（五百七十六）ニ掲出ス）

明治元年十二月二十三日ノ布告ニ原ツキ富籤賣買ノ牙保幇助ヲ爲シ及富籤ヲ購買シタル者處分方左ノ通制定ス

第一條

凡富籤賣買ノ牙保若クハ幇助ヲ爲シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二條

凡富籤ヲ購買シタル者ハ其價ヲ拂ヒタルト未タ拂ハサルトヲ問ハス二十日以上四月以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス他人ノ名ヲ借リテ購買シタル者及他人ヨリ讓リ受ケタル者亦同シ

第三條

第一條第二條ノ罪ヲ再犯シタル者ハ同條ニ定メタル刑期金額ノ二倍ニ處ス但初犯ニ科シタル刑期金額ニ下ルヿヲ得ス

第四條

富籤ニ關スル犯罪ヲ告發シタル者ニハ其徵スル所ノ罰金ノ半額ヲ給與ス

第五條

富籤ニ關スル罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ自首シタル者ハ其罪ヲ免ス

再犯ニ係ル者ハ自首スト雖モ其罪ヲ免セス

第六條

富籤ニ關スル犯罪ニ因テ得タル財物ハ之ヲ沒收ス
自首ニ因テ罪ヲ免シタル者ト雖モ財物沒收ハ仍ホ前項ニ依ル
右奉　勅旨布告候事

○墓地及埋葬取締規則罰例（第三部第三編第壹章第貳款第五節ニ出ス）
○製茶砂糖反物薪炭等種々ノ物品限月若クハ現場賣買類似商業罰則（第三部第三編第壹章第貳款第六節第七項ニ出ス）
○集會條例罰則（第三部第三編第壹章第三款ニ出ス）
○遺失物取扱規則罰則（第三部第三編第壹章第四款第三節ニ出ス）
○古物商取締規則罰則（第三部第三編第壹章第五款ニ出ス）
○質屋取締條例罰則（第三部第三編第壹章第六款ニ出ス）

（五年第廿八號布告（六百二十九）十四年同第三號達（二千四十二）參照）

（十一年同第四號達（二千三百三十八）五十三號達及十年司丁第廿一號布告（六百二十）參照）

第二千二百三十　明治五年九月廿三日第二百八拾貳號布告

銃砲取締ノ儀ニ付別紙ノ通被相定候條此旨相達候事

別紙

銃砲取締規則ニ準ヒ銃砲彈藥類ヲ竊ニ所持シ且致取扱候者有之節ハ各地方ニ於テ其品取上ケ更ニ五拾錢ノ過料可申付候事

但取締向ニ關係無之者見當リ訴出候ニ於テハ犯人過料ノ半金ヲ可被下候事

一免許ヲ得スシテ銃砲彈藥ヲ製造スル者ハ其品取上ケ更ニ三圓以内ノ過料可申付事（七年第二號布告ヲ以テ但書共追加）

但書同前

右取上候品東京大坂ハ武庫司其他ハ所管ノ鎮臺ヘ可差出事

○石油取締規則罰例（第三部第三編第壹章第八款ニ出ス）
○不開港場取締心得方規則罰例（第三部第三編第壹章第拾貳款ニ出ス）
○外國船乘組規則罰例（同上）

第貳節　地理土木ニ係ル件

○社寺上地ノ中内實賣買入ノ者處分方（第三部第三編第貳章第七款第壹節ニ出ス）

第三節　戸籍ニ係ル件

○華士族相續決罰則（第三部第三編第三章第拾款第貳節ニ出ス）

第四節　衛生ニ係ル件

○藥品取扱規則罰例（第三部第三編第五章第八款第壹節ニ出ス）
○藥川阿片賣買並製造規則罰例（第三部第三編第五章第八款第三節ニ出ス）
○醫藥規則罰則（第三部第三編第五章第四節第壹項ニ出ス）

（十三年內務第十號達（九百七十五）第廿三號布告（九百七十六）參照）

第二千二百三十一　明治十年二月七日第拾六號布告

本年一月第七號ヲ以テ賣藥規則布告候處該規則第三章罰則ノ儀ハ來ル六月一日ヨリ施行候條此旨更ニ布告候事

刑法(二千二百十五)第二百四十八條參看

但諸鑑札授受稅納其他手續等ノ儀ハ追テ內務省ヨリ可相達事

○傳染病豫防規則第三部第三編第五章第九欵第壹節ニ出ス

○天然痘豫防規則罰例同上

○虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶檢査規則罰例同上

○第五節　圖書ニ係ル件

○出板條例罰則第三編第壹欵第壹節ニ出ス

○寫眞條例罰則第三部第三編第六章第貳欵ニ出ス

○新聞紙條例罰則第三部第三編第六章第四欵第壹節ニ出ス

○第六節　地方經濟ニ係ル件

○府縣會議員他ノ府縣會議員ト聯合集會罰則第三編第八章第四欵第四節ニ出ス

○第四欵　財務ニ關スル件

○第壹節　地租ニ係ル件

○地租條例罰則第三部第四編第貳章第三欵第十節ニ出ス

○隱田切開切添地罰例第三部第四編第貳章第三欵第拾節ニ出ス

〔第二千二百二十二〕　明治十五年七月二十四日第三拾四號布告

九年第六十七號布告(千二百十三)參看

脫稅ノタメニ土地ヲ欺隱スル者ハ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ニ處シ現地目ニ依リ地價ヲ定メ欺隱年間ノ租稅ヲ追徵ス但地租改正ノ初年以前ニ遡ルコトヲ得ス

其罪ヲ犯シ自首スル者ハ罰金ヲ免ス其追徵スヘキ租稅ハ仍ホ之ヲ納メシム

右奉　勅旨布告候事

○第貳節　海關及海關稅則ニ係ル件

○北海道諸物產出港稅并各港船改所規則罰例第三部第四編第貳章第四欵第貳節第壹項ニ出ス

○北海道各港貨物積卸條規罰則第三部第三編第貳章第四欵第三節第貳項ニ出ス

○西洋形日本船各開港出入規則罰例第三部第四編第貳章第四欵第三節第四項ニ出ス

○外國形日本船輸出入未納內外貨物回漕規則罰則第三部第四編第貳章第四欵第四節ニ出ス

○第三節　各種稅則ニ係ル件

○酒造稅則罰例第三部第四編第貳章第七欵第壹節ニ出ス

○酢造營業者酢元ニ供スル酒類製造罰則第三部第四編第貳章第七欵第三節ニ出ス

○醬麴營業稅則罰例第三部第四編第貳章第八欵第壹節ニ出ス

○烟草稅則罰例第三部第四編第貳章第九欵第壹節ニ出ス

○券證印稅規則罰例第三部第四編第貳章第拾欵第壹節ニ出ス

○船稅規則罰例第三部第四編第貳章第拾四欵第壹節ニ出ス

○車税規則罰例（第三部第四編第貳章第拾五欵第四節ニ出ス）
○米商會所株式取引所仲買人納税規則罰例（第三部第四編第貳章第拾六欵第四節ニ出ス）
○牛馬賣買免許税規則罰例（第三部第四編第貳章第拾八欵第壹節ニ出ス）
○賣藥印紙税則罰例（第三部第四編第貳章第拾九欵第貳節ニ出ス）

○第四節　貸紙幣公債證書及證券ニ係ル件

○醡造金銀銅貨取扱規則罰例（第三部第四編第貳章第八欵第貳節ニ出ス）
○大藏省證券條例罰則（第三部第四編第貳章第九欵ニ出ス）
○新舊公債證書發行條例罰則（第三部第四編第貳章第九欵ニ出ス）
○金札引換公債證書條例罰則（第三部第四編第貳章第九欵ニ出ス）
○起業公債證書發行條例罰則（第三部第四編第貳章第九欵ニ出ス）

○第五節　銀行及銀行券ニ係ル件

○國立銀行條例罰則（第三部第四編第貳章第拾貳欵ニ出ス）
○兌換銀行券條例罰則（第三部第四編第貳章第拾五欵ニ出ス）

○第五欵　軍事ニ關スル件

○徴發令罰則（第三部第五編第壹章第貳欵ニ出ス）
○徴兵令罰則（第三部第五編第壹章第三欵第壹節ニ出ス）

○第六欵　農商ニ關スル件

○第壹節　農業ニ係ル件

○鳥獸獵規則罰例（第三部第七編第貳章第四欵第壹節ニ出ス）
○水底電信線架設ノ場所ニ於テ禁ヲ犯シ漁業採藻ヲ爲スモノニ對スル罰則（第五部第貳編第貳章第七欵第貳節ニ出ス）

第二千二百三十三　明治十七年五月二日第拾貳號布告

北海道ニ於テ納税スヘキ水產物ヲ取獲セントスルモノハ其地ノ管廳ヘ願出許可ヲ受クヘシ違フモノハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其物品ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタルモノハ其代價ヲ追徴ス

右奉　勅旨布告候事

第二千二百三十四　明治十七年五月二十三日第拾六號布告

自今北海道ニ於テ熊虎幷膃肭獸ヲ獵獲スルヲ禁ス犯ス者ハ刑法第三百七十三條ニ照シテ處斷シ仍ホ其獵獲物ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴ス

但農商務卿ノ特許ヲ得タル者ハ此限ニアラス

右奉　勅旨布告候事

○第貳節　商業ニ係ル件

○商標條例罰則（第三部第七編第三章第壹款第壹節ニ出ス）

第二千二百三十五　明治六年十月九日第三百三拾八號布告

御國量目ヲ割直シ候西洋形權衡ニ大藏省ノ極印無之分相用候者有之ニ於テハ屹度咎メ可申付候條此旨布告候事

但螺旋機關等ニテ其概量ヲ知ルノミノ器具ハ此限ニアラサル事

○度量衡取締條例檢査規則罰例（第三部第七編第三章第壹節ニ出ス）

○度量衡改定規則罰例（第三部第貳款第貳節ニ出ス）

○米商會所條例罰則（第三部第七編第壹項ニ出ス）

○株式取引所條例罰則（第三部第七編第三章第三款第三節ニ出ス）

第二千二百三十六　明治十三年四月十五日第貳拾壹號布告

法律定規ニ遵ヒ官許ヲ得タル米商會所株式及ヒ横濱取引所外若クハ內タリ𪜈竊ニ米穀幷金銀貨幣及株式ノ限月若クハ現場（定規ヨリ起リタル現場ヲ云フ）賣買其他之ニ類似シタル取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取引ヲ誘助シタル者ハ其賣買取引ヲ誘助シタル者ハ拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處シ其賣買取引ハ無効ト爲スヘシ

但本條ヲ犯シタル者ヲ告發シタル者ニハ其告發ニ因テ科シタル罰金ノ全部ヲ給ス其自ラ犯シタル者事未タ發覺セサル前ニ於テ自首シタルトキハ其罪ヲ問ハス

右布告候事

（十三年第七號達（拾八號達（五百八十九）同年第四拾九號公達（五百九十一）参照）

第二千二百三十七　明治十六年一月十五日第四號布告

米商會所株式取引所ノ限月若クハ現場賣買ノ方法ニ倣ヒ又ハ之ニ類似ノ方法ヲ用ヒ諸物品ノ賣買取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取引ノ場所ヲ給與シタル者若クハ其賣買取引ヲ誘助シタル者ハ總テ明治十三年四月第貳拾壹號布告ニ據リ處分スヘシ

右奉　勅旨布告候事

第二千二百三十八　明治十六年八月六日第貳拾九號布告

米商會所及株式取引所ノ仲買人ニシテ竊ニ米穀幷金銀貨幣公價証書株式ノ限月若クハ現場（定期ヨリ起リタル現場ヲ云フ）賣買又ハ其類似ノ取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取引ノ場所ヲ給與シタル者若クハ其賣買取引ヲ誘助シタル者ハ五十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處シ其賣買取引ハ米商會所條例及株式取引所條例ノ手續ヲ爲サシム

右奉　勅旨布告候事

○第三節　水陸運ニ係ル件

○郵便條例罰則（第三部第七編第三章第四款第壹節第壹項ニ出ス）

○西洋形船規則罰例（第三部第七編第三章第四款第三節第壹項ニ出ス）

○西洋形船水先免狀規則罰例（第三部第七編第三章第四款第三節第七項ニ出ス）

○西洋形船々長運轉手機關手免狀規則罰例（第三部第七編第三章第四款第四節第壹項ニ出ス）

○海員雇入雇止規則罰例（第三部第七編第三章第四款第五節ニ出ス）

○危害品船積罰則（第三部第三編第三章第四款第六節ニ出ス）
○内國船難破及漂流物取扱規則罰例（第三部第七編第七節第壱項ニ出ス）
○海上衝突豫防規則罰例（第三部第七編第三章第五款第壱節ニ出ス）

第三拾五號布告（八（千九百廿七）ニ掲出ス）

十四年農甲第四號布達（一千九百二十八）参看

第二千二百三十九 明治十四年五月廿八日第三拾四號布告

明治十三年七月第三拾五號布告海上衝突豫防規則ニ記載シタル檣燈及舷燈ハ農商務省ノ許可ヲ受ケタル者ニ非サレハ之ヲ製造スルコトヲ得ス犯ス者ハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス

右布告候事

○第七款　工業ニ關スル件

○第壱節　鐵道ニ係ル件

壬申第百四十六號布告（千九百三十九）十六年第廿三號布告（千九百四十）参看

第二千二百四十 明治六年三月十三日第百壱號布告

壬申第百四十七號布告鐵道犯罪罰例別紙ノ通改正相成候條此旨相達候事

別紙

鐵道犯罪罰例

第一條　鐵道掛ノ者總テ鐵道上ニ關カル事務取扱中醉ニ乗シ無狀ヲ現ハスニ於テハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス若シ其職掌怠惰輕忽ニヨリ鐵道旅客ノ危難トモナルヘキ取扱アルトキハ其事情ニ依リ五百圓以内ノ罰金又ハ三月以内ノ懲役或ハ禁獄ニ處ス（十二年第拾貳號布告ヲ以テ禁錮ヲ禁獄ニ改ム以下皆同）

第二條　規則第四條ニ記スル處ノ不法ヲ爲ス者ハ貳拾五圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁獄ニ處ス（十二年第拾貳號布告ヲ以テ全條改正）

第三條　規則第五條ノ禁ヲ犯ス者ハ十圓以内ノ罰金ニ處ス

第四條　規則第六條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂タル賃金ヲ沒シ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

第五條　規則第七條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂タル賃金ヲ沒シ十圓以内ノ罰金ニ處ス

第六條　規則第八條ニ記セル所行ヲ爲ス者ハ拂タル賃金ヲ沒シ二十五圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁獄ニ處ス

第七條　規則第九條ニ記スル所ノ不法ヲ爲ス者ハ五十圓以内ノ罰金又ハ六週間以内ノ懲役或ハ禁獄ニ處ス

第八條　規則第十條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

第九條　規則第十一條ノ禁ヲ犯ス者ハ貳拾五圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁獄ニ處ス（上同）

第十條　規則第十五條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

第十一條　規則第十七條ニ記スル處ノ諸荷物品書其外ヲ故ラニ出サス或ハ故ラニ欺僞ノ品物書ヲ出ス者ハ三箇月以内ノ懲役又ハ禁獄或ハ其品物壹噸（千七百斤ヲ云）毎ニ貳拾五圓以内ノ罰金ニ處ス壹噸以下ハ拾圓以内尤一罰ノ贖金高五百圓ニ過キス（上同）

第十二條　鐵道附屬品ヲ毀損スル者ハ第七條ニ照シ罰ヲ科スルノ外其毀損物ノ代價ヲ償ハシムルヿアルヘシ但シ其償金ノ追徵モ鐵道寮ヨリ法官ヘ乞フトキハ法官ニ於テ追徵スヘシ

○第貳節　電信ニ係ル件

○日本帝國電信條例罰則（第三部第八編第四章第壹欵ニ出ス）

[第二千二百四十一]　明治十六年二月十日第五號布告

水底電信線路ニ於テ投錨漁業採藻等ノ禁ヲ犯ス者ハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

右奉　勅旨布告候事

○第三節　坑法ニ係ル件

○日本坑法罰則（第三部第八編第六章第壹欵ニ出ス）

○第八欵　司法ニ關スル件

○裁判所取締規則罰則（第三部第九編第壹章第五欵第壹節ニ出ス）

○第九欵　民事ニ關スル件

○土地賣買讓渡規則罰例（第四部第壹編第貳章第貳欵第六節ニ出ス）

○民事訴訟用紙規則罰例（第四部第貳編第貳章第壹欵ニ出ス）

○裁判所ノ呼出ヲ受ケ無屆遲不參ノ者罰則（第四部第貳編第三章第壹欵ニ出ス）

○第三編　治罪

○第壹章　治罪法

[第二千二百四十二]　明治十三年七月十七日第三拾七號布告

治罪法別冊ノ通創定候條此旨布告候事

但實際施行ノ期日ハ追テ布告スヘキ事（十四年第三拾六號ヲ以テ十五年一月一日ヨリ實施ノ旨ヲ布告ス）

別冊

治罪法

第一編　總則

第一條　公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルヿヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ

第二條　私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償賊物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條　公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條　私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラス公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヿヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヿヲ許サヽル場合ハ此限ニ在ラス

又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スヿヲ得

第五條　公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ

之ヲ爲ス可シ

第六條　刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラス若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ共ニ其效ナカル可シ

第七條　民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スヿヲ得ス

刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ヲ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スヿヲ得

第八條　被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙ト爲ルヿナカル可シ

第九條　公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一被告人ノ死去

二告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和

三確定裁判

四犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

五大赦

六期滿免除

第十條　私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一被害者ノ棄權又ハ私和

二確定裁判

三期滿免除

第十一條　公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一違警罪ハ六月

二輕罪ハ三年

三重罪ハ十年

第十二條　私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フ

第十三條　公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條　期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラス

第十五條　起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無效ニ屬スル時ハ期滿免除ノ

期限ノ經過ヲ中斷スルノ效ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無效ニ屬スル時ハ此限ニ在ラス

第十六條　被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルヿヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタル時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルヿヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スヿヲ得

第十七條　被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書記又ハ司法警察官ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十八條　此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラス但期滿免除ノ期限ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十九條　此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖モ三里以上ナル時亦同シ

島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

[附錄]　明治十五年二月一日第七號布告

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フルモノト定ム

右奉　勅旨布告候事

第二十條　此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ

第二十一條　訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ屆置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルヿヲ得ス

第二十二條　此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作リ書記局所屬ノ使丁ヲシテ之ヲ送達セシム

若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第二十三條　送達書ハ二通ヲ作リ其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スヿヲ得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ

送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スヿヲ得ス若クハ是等ノ者之ヲ受取ルヿヲ肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ效ナカル可シ

送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ之ヲ保存ス可シ

第二十四條　休暇ノ日及ヒ日出前日沒後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其送達ノ效ナカル可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

【附錄】　明治十四年九月廿日第四拾六號布告

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ內ハ不及其儀候事第一項

右布告候事

第二十五條　官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フルヿ能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ效ナカル可シ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條　官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ插入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更增減ノ效ナカル可シ

第二十七條　此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ預審以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

預審以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其效アリトス

第二十八條　此法律ハ將來預審ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ抵觸スル規則ハ此限ニ在ラス

從前預審シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

第二十九條　此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルヿヲ得ス

第三十條　此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ

第二編　刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章　通則

第三十一條　通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬ス

第三十二條　裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條　裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第三十四條　刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一犯罪ヲ搜査ス

二犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス

三裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス

四裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條　檢察官一名ハ公庭ニ立會フ可シ

第三十六條　裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第三十七條　書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第三十八條　犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルヿ左ノ如シ

一違警罪ハ違警罪裁判所

二輕罪ハ輕罪裁判所

三重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第三十九條　左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時

二數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時

三自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カルヽ爲メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條　同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

附錄　明治十四年九月廿日第四拾六號布告

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ內犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ（第二項）

右布告候事

○明治十五年二月十六日司法省丙第七號（大審院裁判所警視廳府縣及京府ヲ除ク）ヘ達

被告人逮捕ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中勾留ノ儀ニ付東京輕罪裁判所檢事犬塚盛巍ヨリ別紙甲號ノ通伺出候ニ付乙號ノ通內訓ニ及ヒ候條爲心得此旨相達候事

別紙

甲號

明治十四年太政官第四拾六號ヲ以テ（前略）犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄ス可キ旨御布告相成候處右實際取扱方ノ儀ハ被告人逮捕ノ地ノ檢察官ニ於テ事件ノ摸樣ヲ審按シ其被告人ヲ管轄裁判所ニ送致スルヲ要セスト思料シタル時ハ事案ノ顚末ヲ犯罪地ノ檢事ニ通知シ併セテ其囑託アル可哉否ヲ照會シ其囑託ヲ待テ起訴可及手續ニ可有之果シテ然ラハ被告人所在地ノ司法警察官ニ於テ其擧動犯人ト思料ス可キ者アル等現行犯ニ准シ處分シ得ヘキ被告人ヲ逮捕シ拘留狀ヲ發シ一應ノ搜査ヲ爲シタル後檢事ニ送致シタル時ノ如キ其拘留

狀執行ヨリ概子已ニ六七日ヲ經過スルヲ以テ囑託ノ義ニ關シ檢事ヨリ前記ノ照會中拘留狀十日ノ期限ヲ過クル者往々之アリ然ルニ檢事ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ被告人ヲ責付スルノ職權ナキニ因リ重罪犯又ハ逃走等ノ恐アリテ解放シ得ヘカラサル者ニ付テハ如何ヒ處分ノ施シ様モ無之去リ迚拘留日數經過ノ一點ニ拘束セラレ前書ノ照會ヲモ用ヒスシテ直ニ其被告人ヲ犯罪地ノ檢察官ニ送致スルカ如キハ囑託法ヲ設ケラレタル御旨趣ニ相戻リ可申又タ前書ノ照會一々電報ヲ借ルニ至テハ其事案ノ頻來ヲ盡ス能ハザル而已ナラス此等ノ事件ハ實際頻々遭遇スル所ニシテ其經費モ亦小額ナラサル儀ト存候就テハ右等ノ場合ニ於テハ如何處分致可然哉此段相伺候條至急何分ノ御指令ヲ仰キ候也

明治十五年一月二十四日

東京輕罪裁判所
檢事　犬塚盛巍

司法卿大木喬任殿

乙號

東京輕罪裁判所
檢事　犬塚盛巍

被告人逮捕ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中勾留ノ儀ニ付伺之趣ハ豫テ管轄裁判所ヨリ囑託ヲ爲シタルモノト看做シ一面ハ其裁判所ニ豫審若クハ公判ヲ求メ一面ハ其犯罪ノ地ノ檢察官ニ其旨ヲ通知スヘシ此旨及內訓候也

明治十五年二月十五日

司法卿大木喬任

第四十一條　數箇ノ裁判所ノ管轄地內ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一個ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條　犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地內ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

第四十三條　數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルヿ能ハス若クハ法律上逮捕スルヿヲ許サヽル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條　從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラス

附錄　明治十六年九月廿一日司法省丁第貳拾三號大審院裁判所ヘ達

今般陸軍治罪法施行相成候ニ付キ左ノ通陸軍卿ヨリ照會有之候條爲心得此旨相達候事

已決重罪囚其他裁判宣告ニ依リ軍籍ヲ脱シタル者ト雖モ犯罪之レ有ル時ハ舊慣ニ據リ軍衙ニ於テ審判致來候處今般陸軍治罪法御頒布ニ付テハ特例アルモノヲ除ノ外ハ軍衙ニ於テ審判シ得ヘカラサル者ニ有之候間右已決囚ニシテ重輕罪ヲ犯ス者等有之候時ハ地方管轄裁判所ニ送付セシメ候間豫メ御達置相成度此段及御照會候也

陸軍卿代理
參事院議長山縣有朋

明治十六年九月十三日

司法卿大木喬任殿

追テ自今本文ノ如キ罪囚ハ悉ク地方監獄ニ交付ノ見込ニ有之候此段申添候也

第四十五條　外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ內地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

闕席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條　商船內ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條　豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラス前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ闕席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラス此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第四十八條　裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルヿヲ得

十四年第六十五號布告一二千二百五十一ヲ以テ憲兵內犯罪取扱規則ヲ定ム

第二章　違警罪裁判所

第四十九條　治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地內ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

[附錄]　明治十四年九月廿一日司法省丁第拾三號（大審院裁判所）へ達

陸海軍軍人東京府下ニ於テ違式註違ノ罪ヲ犯シタル者處分ノ儀ニ付太政官ヨリ別紙ノ通御達有之候條此旨爲心得相達候事

司法省

別紙

陸海軍々人東京府下ニ於テ違式註違ノ罪ヲ犯シタル者ハ憲兵條例第八條ニ據リ憲兵ニ於テ處分シ其追徵シタル科料ハ憲兵隊長ヨリ其省ヘ交付セシメ候條此旨相達候事

明治十四年九月十五日

太政大臣三條實美

○明治十四年十月七日第五拾六號布告

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所（即チ違警罪裁判所）始審裁判所（即チ輕罪裁判所）ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民刑事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○明治十四年十月七日第五拾七號布告

伊豆七嶋裁判事務當分該島吏ヘ民事ハ百圓以下及勸解幷ニ刑事ハ違警罪裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

十四年第三拾六號布告ハ刑法治罪法實施ノ期ヲ定ムノ件ナリ

○明治十四年十二月二十八日第八拾號布告

本年九月第四拾八號布告左ノ通改正ス

違警罪ノ儀ハ本年第三拾六號布告ニ據リ明治十五年一月一日ヨリ治安裁判所ニ於テ裁判スヘキ處當分ノ內府縣警察署及ヒ其分署ニ於テ裁判セシムヘシ

右奉　勅旨布告候事

○明治十五年三月三日第拾六號布告

樺戸集治監ノ囚人假出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

十五年司丙第三拾四號達本法第百六拾八條附錄及十六年第三拾八號布告同七十條附錄一看參

右奉　勅旨布告候事

○明治十五年八月十二日第四拾壹號布告

空知集治監ノ囚人假出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

同上

右奉　勅旨布告候事

第五十條　違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ

判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條　違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ

第五十二條　違警罪裁判所檢察官ハ每月未決既決ノ事件表ヲ作リ輕罪裁判所檢事ニ差出ス可シ

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

十四年司丙第拾九號達（二）及千七十一（一）同丁第三拾四號達（二千七十三）ヲ以テ違警罪既決未決中件表ヲ定ム

附錄　明治十四年十月六日第五拾四號布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ內輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限リ始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スヿヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟廷內治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

○明治十六年一月十日第三號布告

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ內始審裁判所長ヲ以テ其裁判長ト爲スコトヲ得

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ儀ハ從前ノ通タル可シ

右奉　勅旨布告候事

第五十三條　違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

第三章　輕罪裁判所

第五十四條　始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス

第五十五條　輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヿヲ得

第五十六條　豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス

又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヿヲ命スルヲ得

第五十七條　判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ

判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヿヲ得

第五十八條　輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其ノ指名シタル檢事補之ヲ行フ

[附錄]　明治十四年十二月廿八日第七拾壹號布告

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其所在ノ地警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

十六年司丁第九號達（二千十八）登省

右奉　勅旨布告候事

第五十九條　輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條　東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

一　警視警部

二　區長郡長

三　治安判事

四　警部ノ在ラサル地ノ戸長

第六十一條　司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證憑其他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受クルヿアル可シ

[附錄]　明治十四年十月十日司法省甲第五號布達

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムル儀モ可有之候條此旨布達候事

○明治十四年十月十日司法省丙第拾三號（警視廳府縣東京府ヲ除ク）ヘ達

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ不得止場合ニ於テハ巡査ヲシテ警部ノ代理

ヲ爲サシメ不苦候條此旨相達候事

但代理ヲ命スヘキ巡査ノ姓名ハ豫シメ其地方輕罪幷違警罪裁判所ヘ通牒致シ置候儀ト心得ヘシ

○明治十四年十月十日司法省丁第拾七號大審院裁判所ヘ達

司法警察事務上時宜ニ依リ巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシメ候儀本年當省丙第拾三號ヲ以テ相達候條此旨可相心得事

○明治十五年五月十三日第廿三號布告

憲兵ヲ設置シタル地方ニ於テハ其將校下士ハ司法警察官トシ卒ハ巡査ト同シク司法警察ノ事ヲ行ハシム

右奉　勅旨布告候事

第六十二條　檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章　控訴裁判所

第六十三條　控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

十四年司丁第三十四號達（二千七十三）ヲ以テ表式ヲ達ス

第六十四條　刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヿヲ得

第六十五條　刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム

裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト爲ルヿヲ得

第六十六條　刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第六十七條　檢事長ハ其裁判所ノ管轄地內ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ屬スル司法警察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之ヲ行ハシムルヿヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地內ノ檢察官ニ告達スルヿアル可シ

檢事長ハ其管轄地內ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス

第六十八條　檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條　刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第五章　重罪裁判所

第七十條　重罪裁判所ハ其管轄地內ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

附錄一　明治十五年六月十日司法省丙第廿一號大審院裁判所警視廳府縣東京府ヲ除ク東京憲兵本部ヘ達

十四年第七拾八號布告ハ十六年第三拾三號布告ヲ以テ廢ス

被告事件重罪ナル時ト雖モ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處ス可キ者ハ總テ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀ト心得可シ此旨相達候事

○明治十五年六月廿日第三拾號布告

札幌根室ノ各始審裁判所ニ於テハ當分ノ内治罪ノ手續便宜取計且重罪犯ハ之ヲ審訊シ證憑擬律按ヲ具ヘ函館控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ

右奉　勅旨布告候事

○明治十五年七月八日第三拾三號布告

明治十四年十二月第七拾八號ヲ以テ重罪裁判所管轄區畫布告候處沖繩縣管内重罪犯處分ノ儀ハ當分ノ内同縣ニ於テ審訊シ證憑擬律按ヲ具ヘ長崎控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ

治罪ノ手續ハ便宜ノ取計ヲ爲スコトヲ得

右奉　勅旨布告候事

○明治十六年九月七日第三拾三號布告

明治十四年十二月第七拾八號布告ヲ廢シ自今重罪裁判所ノ管轄ハ各始審裁判所管内ヲ以テ一區劃ト定メ各其地名ヲ冒シ某重罪裁判所ト名稱ス

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ地方ハ從前ノ通

右奉　勅旨布告候事

○明治十六年十一月十日第三拾八號布告

樺戸空知兩集治監ノ囚人假出獄免囚閉ノ者トモ罪ヲ犯シ重罪ニ該ル者ハ當分ノ内札幌始審裁判所ニ於テ明治十五年六月第三拾號布告ニ準シ處分スヘシ

右奉　勅旨布告候事

第七十一條　重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得テ臨時開廳スルヿヲ得

第七十二條　重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條　重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命ス

二陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命シ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

【附錄】明治十四年九月廿日第四拾六號布告

治罪法第七拾三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相定候事第三項

右布告候事

○明治十四年十月六日第五拾五號布告

治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

第七十四條　重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

十四年司丁第三十四號達（二千七十三）ヲ以テ表式ヲ定ム

第七十三條ノ附錄看照

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ撿事長ヨリ始審裁判所撿事ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヿヲ得

第七十五條　重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條　控訴裁判所撿事長ハ閉廳ノ後既決事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六章　大審院

第七十七條　大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一上告

二再審ノ訴

三裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條　刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラス

第七十九條　刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

第八十條　刑事局撿察官ノ職務ハ其院撿事長又ハ其指名シタル撿事之ヲ行フ

第八十一條　刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條　撿事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章　高等法院

第八十三條　高等法院ニ於テハ刑法第貳編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス

附錄　明治十六年十二月廿八日第四拾九號布告

治罪法第八十三條ニ記載スル事件ニ付高等法院ヲ開カサル時ハ通常裁判所ニ於テ裁判スルコトヲ得

右奉　勅旨布告候事

第八十四條　高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其裁判ス可キ事件及ヒ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條　高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議官大審院判事中ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

二豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條　豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス

第八十七條　高等法院撿察官ノ職務ハ大審院撿事長又ハ司法卿ヨリ指名シタル撿事之ヲ行フ

第八十八條　高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ得ル

第八十九條　高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルヿヲ得

一闕席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ裁訴

三第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條　被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判スヿキ時ハ新ニ職員ヲ命スルヿアル可シ

第九十一條　高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編　犯罪ノ搜査起訴及ヒ豫審

第一章　搜査

第九十二條　檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ原由ニ因リ犯罪アルヿヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證憑及ヒ犯人ヲ搜査シ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節　告訴及ヒ告發

第九十三條　何人ニ限ラス重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルヿヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヿヲ得其告訴ヲ受タル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條　告訴人ハ成ル可ク其證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キヿヲ申立ツ可シ

又告訴人ハ第百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヿヲ得

第九十五條　告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スヿヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作リ告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

附錄　明治十四年十二月五日司法省丙第拾六號（大審院裁判所警視廳府縣東京府ヲ除ク）ヘ達

治罪法中犯人證人等押印ノ條々實印無之者ニ限リ從來ノ慣例ニ依リ拇印爲致候儀ト心得ヘシ此旨相達候事

第九十六條　官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルヿヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

十五年司丙第二十二號達（二千十五巻）

第九十七條　何人ニ限ラス重罪輕罪アルヿヲ認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發スルヿヲ得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條　告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スヿヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス

無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其效アリトス

第九十九條　告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルヿヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルヿアル可シ

十四年第七十三號布告（二千二百六十一）ヲ以テ無能力者等ヲ定ム

第二節　現行犯罪

第百條　現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第百一條　重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

一犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラルヽ時

二兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帶シタル時

三家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戶主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

附錄　明治十四年九月二十日第四拾六號布告

治罪法第百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其擧動犯人ト思料スヘキ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルヿヲ得第四項

右布告候事

第百二條　司法警察官及ヒ巡査其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

違警罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルヿヲ得

第百三條　巡査被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第百四條　司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第百五條　何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルヿヲ得

第百六條　前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルヿヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡査ニ引渡スヿヲ得

被告人ヲ巡査ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡査ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルヿヲ求ムルヿヲ得但逮捕ヲ爲シ

タル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムヿヲ得ス

第二章　起訴

第一節　檢察官ノ起訴

第百七條　檢事犯罪ノ搜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

二輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ

三違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ

四被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第百八條　前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第百九條　檢事豫審ヲ求ムル時ハ證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第二節　民事原告人ノ起訴

第百十條　重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第百十一條　被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

第百十二條　被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スヿヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章　豫審

第百十三條　現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルヿヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第百十四條　豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルヿヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第百十五條　豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ナ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルヿヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ送致ス可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日內ニ檢事起訴ヲ爲サル丶時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルヿナカル可シ

第百十六條　被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヿヲ得

第百十七條　檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルヿヲ得但二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ

又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スヿヲ得

第一節　令狀

第百十八條　豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遲クトモ出廷ノ日ヲ過クルヿヲ得ス

十四年甲丁第廿八號達(一二千二百四十四ノ)ヲ以テ令狀樣式ヲ定ム

第百十九條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地內ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルヿヲ得

第百二十條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

第百二十一條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

一被告人定リタル住所アラサル時

二被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ントスルノ恐アル時

第百二十二條　勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時內ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

[附錄]　明治十四年十月八日第五拾九號布告

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事

○明治十五年二月六日司法省丙第四號(裁判所警視總廳府縣東京府沖繩縣ヲ除ク)ヘ達

治罪法ニ定メタル勾引狀ノ期限ニハ總テ休暇ノ日ヲ算入ス可カラス但平常休暇ナキ官署ニ付テハ此例ヲ用ヰサル儀ト可心得此旨相達候事

第百二十三條　勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルヿヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第百二十四條　前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キヿヲ請求ス可シ

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第百二十五條　豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルヿヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルヿヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

第百二十六條　勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルヿヲ得ス

第百二十七條　豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付ス可シ

檢事ハ被告人ヲ責付スルヿナク更ニ十日間之ヲ勾留ス可キヿヲ豫審判事ニ求ムルヲ得

第百二十八條　收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後

十五年司丙第七號達（本法第四十條附錄）參照

ニ非サレハ之ヲ發スルヿヲ得ス

第百二十九條　收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一被告事件ノ概略及ヒ加重減輕ノ摸樣アル時ハ其概略

二其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條

三檢察官ノ意見ヲ聽キタルヿ

第百三十條　總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印ス可シ

勾引狀勾留狀收監狀ハ巡査ヲシテ之ヲ執行セシム

第百三十一條　召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所　丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第百三十二條　勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニヨリ正本數通ヲ作リ巡査數人ニ分付スルヿアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第百三十三條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタル時ハ其地ノ戶長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

巡査ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラス捜索調書ヲ作リ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ」家宅捜索ハ日出前日沒後之ヲ爲スヿヲ得ス

【附錄】明治十四年九月二十日第四拾六號布告

治罪法第百三十三條第三項ニ家宅捜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日沒後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸座敷ハ日出前日沒後ニ拘ハス捜索致シ苦シカラス第五項

右布告候事

第百三十四條　豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルヿヲ知リ又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡査ニ令狀ヲ帶行セシムルヿヲ得

巡査ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事捜事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

輕罪裁判所
豫審判事

【附錄】明治十五年四月十二日司法省丁第貳拾四號裁判所へ達

左之通豫審判事ニ及内訓候條爲心得此段相達候事

治罪法第百三十四條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ巡査ヲシテ令狀ヲ他管ニ帶行セシムルハ被告事件殊ニ急速ヲ要スル時ニ限リ輒ク其處分ヲ爲ス可キ者ニアラス又第百三十五條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ人相書ヲ發シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヿヲ請求スル者ハ

十五年司丙第六號達（二千二百四十六下）ヲ以テ逮捕狀ヲ發スル手續及人相書々式等ヲ定ム

專ラ重大ノ罪ヲ犯シタル被告人ニ對シテ發スル者ニ有之被告人所在ノ地ヲ覺知スルヿ能ハサル時ハ罪ノ輕重ヲ問ハス悉ク人相書ヲ發スル者ニアラサルナリ此等ハ兼テ注意アル可キ事ナレトモ猶ホ誤解無之樣爲念此段及内訓候也

司法卿大木喬任

第百三十五條　豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヿ能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヿヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

【附錄】明治十五年二月廿三日司法省丁第拾四號大審院裁判所へ達

治罪法第百三十五條ニ從ヒ豫審判事ヨリ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ若クハ其檢事長ヨリ管轄地内ノ檢事ニ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ命スル時ハ本年本省丙第六號達第壹號書式ニ照依シテ人相書ヲ作リ其命ヲ受ケタル檢事ハ第貳號書式ニ照依シテ逮捕狀ヲ作ルヘシ此旨相達候事

第百三十六條　陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムヿヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第百三十七條　勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルヿ能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヿヲ得

何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可シ

第百三十八條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ之ヲ執行シタルヿ又執行スルヿ能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡査ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第百三十九條　勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舍ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第百四十條　密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルヿヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人トノ之ヲ授受スルヿヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クヿヲ得

第百四十一條　豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第百四十二條　監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節　密室監禁

第百四十三條　豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニヨリ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第百四十四條　密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヿヲ許サス

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第百四十五條　密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヿヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節　證據

第百四十六條　法律ニ於テハ被告事件ノ摸樣ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルヿナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第百四十七條　豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第百四十八條　豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作リ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヿ能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作リ之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

十七年司丙第乾號達（二千二百五十六）

第四節　被告人ノ訊問及ヒ對質

第百四十九條　豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問スヘシ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第百五十條　豫審判事ハ被告人ヲメ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フヘカラス

第百五十一條　書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カスヘシ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシムヘシ若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記スヘシ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヿヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印スヘシ

【附錄】明治十六年三月七日第八號布告

豫審判事裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ內書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スルコトヲ得

右奉　勅旨布告候事

第百五十二條　被告人其陳述ニ付キ變更增減スヘキヿヲ中立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印スヘシ

第百五十三條　被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルヿヲ得

第百五十四條　豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヿヲ人違ナキヿヲ其他事實ヲ發見スヘキ一切ノ摸樣ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヿヲ得

第百五十五條　書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニヨリ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カスヘシ

第百五十一條第百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百五十六條　被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命スヘシ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第百五十七條　通事ハ正實ニ通譯スヘキノ宣誓ヲ爲スヘシ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシムヘシ

第百九十二條第百九十三條第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節　檢證及ヒ物件差押

第百五十八條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲スヘシ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢スヘシ

第百五十九條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヿヲ證明スヘキ摸樣ニ付キ調書ヲ作ルヘシ

又被告人ノ利益ト爲ルヘキ摸樣ヲモ記載スヘシ

第百六十條　豫審判事ハ臨檢ノ場合ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ摸樣ニ因リ被告人ノ人違ナキヿ又ハ犯罪ノ摸樣ヲ知ルニ足ルヘシト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ

目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第百六十一條　豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ヲサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヿヲ得

第百六十二條　豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヿヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戶長ノ立會アルヲ要ス

第百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十三條　被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヿヲ得

若シ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヿヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヿヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遲延ス可カラス

第百六十四條　家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第百六十五條　豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

拾六號及拾壹號布告ハ第四十九條ノ附錄ニ出ス

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載可スシ

第百六十六條　豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヿヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十七條　豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヿヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヿヲ得

第百六十八條　豫審判事ハ其管轄地內ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヿヲ得

陷錄　明治十四年九月二十日第四拾六號布告

治罪法第百六十八條第百七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヿヲ許シタル處分ハ當分ノ內其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヿヲ得第六項

右布告候事

○明治十五年十二月十三日司法省丙第三十四號大審院裁判所府縣東京府ヲ除クヘ達

、樺戶及空知ノ集治監ニ拘禁中ノ囚人ニ對シ訊問ヲ要スル等ノ事アレハ本年第拾六號同第四拾壹號公布ノ趣モ有之ニ付該監司獄官ヘ囑託スルヲ得ヘキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

第百六十九條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社

十四年第四十六號布告（本法第百六十八

ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヿヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節　證人訊問

第百七十條　豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但シ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スヿヲ得

第百七十一條　證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第百七十二條　豫審判事ハ證人裁判所所在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヿヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヿヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第百七十三條　呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルヿアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第百七十四條　證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルヿヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第百七十五條　證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キヿヲ認可シ又ハ職務上已ムヿヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第百七十六條　豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡旨ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルヿアル可シ

第百七十七條　豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルヿ其呼出狀第百七十三條ノ規則ニ背キタルヿ又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシヿヲ證明シタ

十四年司丁第廿八號達（二千二百四十四ヲ以テ宣誓式ヲ定ム）十四年司丙第拾六號達（本法第九十五條ノ參看）

ル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第百七十八條　證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人逃ナキヿヲ證明ス可シ

第百七十九條　豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第百八十一條ニ記載シタリ者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第百八十條　豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キヿヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添綴ク可シ

第百八十一條　左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルヿヲ許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クヿヲ得

一民事原告人

二民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者

四民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十二條　左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一十六歳未滿ノ幼者

二知覺精神ノ不充分ナル者

三瘖啞者

四公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百八十三條　證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第百八十四條　證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルヿヲ得

第百八十五條　豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヿヲ得

若シ證人同行スルヿヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條　第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百八十七條　皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク

十五年司丙第廿五號達二千二百五十五參看

可シ

第百八十八條　書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ

其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヿ又ハ爲サヽルノ事由ヲ記載ス可シ

第百八十九條　豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更增減センヿヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルヿ及ヒ變更增減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第百九十條　證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヿヲ得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償金ヲ要ムルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

[附錄]　明治十七年六月十三日第五拾七號官省院廳府縣へ達

官吏職務上ニ係リ刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スル時ハ治罪法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルコトヲ得ルト雖トモ被告事件無罪又ハ免訴トナリタル時ハ請求セサル儀ト心得可シ

但旅費日當ヲ請求シタル時其金額ハ雜收入トシテ大藏省へ納付ス可シ

右相達候事

第七節　鑑定

第百九十一條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヿヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條　鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヿ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヿヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヿヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條　鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヿヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ

第百九十四條　鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第百九十五條　第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルヿヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヿヲ得

第百九十六條　豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第百九十七條　豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヿヲ得

第百九十八條　鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作リ又ハ各自ノ異見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第百九十九條　鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ檢印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置ク可シ

第二百條　鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節　現行犯ノ豫審

第二百一條　豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヿヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヿヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヿヲ得

第二百二條　前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヿヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條　檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヿヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヿナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヿヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スヿヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヿナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條　前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條　第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヿヲ得但令狀ヲ發スルヿヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

【附錄】明治十四年九月二十日第四拾六號布告

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヿヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ內現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ發シ苦シカラス第七項

右布告候事

第二百六條　檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時內ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作リ拘留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

【附錄】明治十五年十一月十三日第五拾三號布告

治罪法第二百六條第二百七條中二十四時内ト有之處已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内五日以内ニ於テスルコトヲ得

右奉　勅旨布告候事

第二百七條　豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル拘留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヿヲ得

第二百八條　豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヿヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條　檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ拘留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラス被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヿヲ得

第九節　保釋

第二百十條　豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヿヲ得被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヿヲ得

第二百十一條　前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條　保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條　保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保証金若クハ供金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヿヲ得

第二百十四條　保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ沒入ス可シ

第二百十五條　保證金ヲ沒入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百十六條　豫審判事保證金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヿヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條　豫審判事保證金ヲ沒入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條　豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス

十四年第四十七號布告二千二百五十二ヲ以テ責付手續ヲ定ム

可シ

第二百十九條　豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヿヲ得

第十節　豫審終結

第二百二十條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルヿナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ」

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日內ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條　檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其事件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヿヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條　豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヿヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一犯罪ノ證憑充分ナラサル時

二被告事件罪ト爲ラサル時

三公訴ノ期限免除ト爲リタル時

四確定裁判ヲ經タル時

五大赦アリタル時

六法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第二百二十五條　被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條　被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ」

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スヿヲ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルヿヲ得

第二百二十七條　被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キヿヲ記載ス可シ

第二百二十八條　豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留スヲ可キ時ハ其原由ヲ明示スヲ可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヿ公訴受理スヲ可カラサルヿ及ヒ其原由又犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示スヲ可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質捜査證憑ノ充分ナルヿ及ヒ其罪ヲ罰スヲ可キ法律ノ正條ヲ明示スヲ可シ

第二百二十九條　前條ノ言渡書ニハ第百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示スヲ可シ

第二百三十條　書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達スヲ可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

第二百三十一條　被告人ヲ逮捕スルヿ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載スヲ可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヿヲ得ス

第二百三十二條　前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フヲ可キヿヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十三條　豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告スヲ可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略ナル報告書ヲ差出スヲ可シ

第四章　豫審上訴

第二百三十四條　左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヿヲ得

一管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二法律ニ背キ命狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サヽル時

四越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スヿヲ得

第二百三十五條　故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出スヲ可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條　故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決スヲ可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スヿヲ得

第二百三十七條　左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルヿヲ得

一豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時
二豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時
三豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

第二百三十八條　忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時內ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルヿヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條　豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スヿヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條　豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スヿヲ得ス

又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヿヲ得

第二百四十一條　會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スヿヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

第二百四十二條　豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由アルヿヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條　會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スヿヲ得

第二百四十四條　書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヿヲ得

第二百四十五條　檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヿヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヿヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條　檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲スヿヲ得ス

第二百四十七條　故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條　檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ